
ノーデルシアの勇者 第一章

bunz0u

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノーデルシアの勇者 第一章

【Nコード】

N5063L

【作者名】

bunzou

【あらすじ】

高校生、高崎環はある日家のドアを開けると異世界に足を踏み入っていた。魔法の力を手に入れた環は、守るための戦いに身を投じていくことになる。

7月31日完結しました。

12月27日、続編開始しました <http://ncode.syosetu.com/n7606p/>

パ
ブ
ー
で
も
掲
載
し
て
い
ま
す
h
t
t
p
:
/
p
.
b
o
o
k
l
o
g
.
j
p
/
b
o
o
k
/
1
1
4
8
1

迷子と魔法

「いつてきまーす」

高崎環１７歳はいつものように元気に家を出た。が、ドアの先にあったのはいつもの見慣れた景色ではなく、変な格好をした大勢の人間が待ち構えている広場だった。

環は何の言葉もなくただただ呆然と立ちつくした。ぼんやりと周りを見まわすと、そこにいる人々は何かおかしかった。一言で言えば、ファンタジー映画のようだった。

居並ぶ人々はいかにもそれらしい格好をしていた。特に環の正面の一人はまさに王族という風情だった。中年の男と自分より少し上の年齢くらいの若い男。

「異界の勇者よ、よくぞ参られた」

中年の男はよく通る声で環に話しかけた。

「私はリチャード王。このノーデルシア王国を治める者だ」

リチャード王と名乗った男はまだしゃべろうとしていたが、環は手を上げてそれを遮る大声を出した。

「ちよつと待ってくれ。ここはどこだ？」

「それは私が説明しよう」

リチャード王と名乗った男の隣にいた、環と同年齢くらいの男が一步踏み出してそう言った。

「失礼。私はリチャード王の息子、エバンス。ここはあなたのいた世界とは違う、異世界だ」

「異世界？」

「そうだ、勝手なことだと言われるのは承知のうえだが、あなたは我々がこの世界に呼び寄せたのだ」

「わかんない話だな。まあ、とりあえず俺は高崎環だ。まあ、タマキって呼んでくれればいい」環は首をかしげて聞いた。「それで、これから俺をどうしようっていうんだい？」

「我々の城に来ていただく。そこでこの世界について説明をしよう」
「なるほどね」

環はそう言っただけであらためて周りを見まわした。確かにここが全く別の世界だというのはよくわかった。一人ではどうしようもなさそうな状況なのは完璧に間違いない。

「まいったね、こいつは。ま、頼むぜ」

いかにも気楽な感じでそう言った環とは対照的に、エバンスは重々しくうなずいて、近くに控えている騎士に手で合図をした。騎士は早足で環に歩み寄ると、地面に膝をついてベルトにつけられ鞘に納まった剣とマントを差し出した。

「どうぞ勇者様」

「これを着ろってこと？」

そう言いながら、環はブレザーの上からマントを着けた。ベルト付の剣はどうしたものかとしばらく迷っていたが、今しているベルトの上から着けることにした。ブレザーにマントと剣、それに鞆という珍妙な格好になったが、環はそれなりに満足したらしかった。

「うん、悪くない」

「では勇者様、こちらに」

いつの間にか隣に来ていた眼鏡をかけた侍女らしき人物に手をとられ、環は歩き出した。迷子の子供みたいなもんかと思いながら、それなりに楽しそうにしていた。

どうやら城に向かっていているようだったが、環はそれを気にすることなく、辺りをずっと見まわしていた。

見れば見るほどファンタジーの世界だった。人々、市場、民家。全てがその手の世界のものだった。家を出たら異世界に連れてこられていたという理不尽な状況にも関わらず、不思議と怒りも悲しみも湧いてはこなかった。

環が連れて来られたのは、城の中の大きなホールだった。ホールには祭壇のようなものが中央に設置されていて、その前にはローブ

をまとった若い女性がいた。女性が環の手を引く侍女にうなずくと、侍女は頭を下げて後ろに下がった。

「勇者様、よくおいでくださいました。ありがとうございます」

ローブの女性は深々と頭を下げた。

「俺は高崎環だ。まあ、来たくて来たってわけじゃないんだけど。とりあえずよろしく」

環の気楽な挨拶にもローブの女性は落ち着いた態度を崩さずにやさしく微笑んだ。

「タマキ様ですね。私はロレンザという者です」

「で、ロレンザさんは何者？」

「私は勇者様に魔法をお教えるように命じられています。」

「魔法？ 魔法っていうと火を出したり雷を落としたりできるアレ？」

「そうです」

「そりゃすごい。どうやって使えるのかな、それ」

ロレンザは相変わらず微笑みながら、どこからか一冊の本を取り出した。それは豪華な装丁が施された、サイズで言えばA5くらいのサイズの分厚い本だった。

「これはスペルブックというものです」

「すべるぶつく？ というか、どこから出したのそれ？」

「所有者になればいつでも呼び出すことができます」そう言ってロレンザはさらに一枚のカードを取り出した。「そしてこれがスペルカードです」

「すべるカード？」

「スペルカードと契約できると、このスペルブックにその魔法が登録されて使えるようになります」

「へえ。その契約ってのはどうすればできるの？」

ロレンザはスペルブックを環に差し出した。

「まずはこのスペルブックに手を置いてください」

「こうか」

環がスペルブックの表紙に手を置くと、その場所が光り始めた。
どんどん強くなる光に、

ロレンザは息を呑んだ。

「すごい・・・ これだけの魔力があるなんて」

「魔力？」

光が爆発的に広がった。光は数秒の間ホールを満たし、徐々に収まっていた。環とロレンザはさっきの体勢のままだった。

「もう手を離してもいいですよ」

「ああ」

「今の光はタマキ様の魔力の大きさを表しています。これほどの光は記録でも見たことがありません」

「今のが俺の？」

「そうです。これでこのスペルブックはあなたのものです」ロレンザはそう言ってスペルブックを環に渡した。「それではスペルカードの契約をしましょう」

環はロレンザが差し出したスペルカードを受け取った。カードには爆発しているような絵が描かれていた。

「これは？」

「一番基本的な魔法であるバーストのスペルカードです。それはこう持つてください」

ロレンザはスペルカードを絵が描かれているほうを環に向けて、親指と人差し指ではさんで持った。環もそれを真似した。

「いいですか、おそらくタマキ様が今までに経験したことのない感覚だと思いますが、恐れることはありません。まずはカードに意識を集中してください」

言われた通りにすると、カードが自分の体の一部になったような感覚と共に、そこから未知の力が流れてくるような感覚があった。

「魔力の流れを感じますか？」

「ええ、たぶん」

「それでは、”契約バースト”と声に出して言うてください。力を

集中して」

環は目を閉じて、カードから自分の体に流れる力を感じた。そして、腹に力を込めて口を開いた。

「契約！ バースト！」

カードが光ると同時に、今までの穏やか力の流れとは違う、大きな力が勢いよく環の体に流れ込んできた。

「うお！」

思わずあどさつたが、カードはしっかりと握っていた。力の流れは止まり、カードは上から光になって消えていった。それと共に力の流入も止まった。

「スペルブックを開いてください」

言われた通りスペルブックを開いてみると、そこにはさっきのカード、バーストが刻み込まれていた。それ以外は空白だった。

「おめでとうございます」 ロレンザは微笑んだ。「これでバーストはスペルブックに登録されました。初めてで契約に成功するというのはすごいことですよ」

「このスペルブックっていうのは、ずいぶん空白が多いみたいだけど、魔法っていうのはそれだけ種類があるってことなのかな？」

「そうです。ですが、とりあえず今日はこれだけにしておきましょう。他にも色々なことを知っていたかなければいけませんから」

ロレンザはさっきの侍女を呼び寄せた。侍女は再び環の手を取って、ゆっくりと歩き始めた。環はされるがままになりながら、さっきの感覚を反芻していた。ふと我に返って、侍女に声をかけた。

「ああ、そうだ。君の名前を聞いてなかったけど」

「カレンです。タマキ様のお世話をさせていただくことになっております」

「カレンね。で、なんでさっきから手をひいてくれてんのかな？」

「そのほうが確実ですから」

「そういうもんかな」

「そういうものです」

侍女の話と城案内

「こちらがタマキ様のお部屋です」

環が案内された部屋はあまり派手ではないが、広く豪華な部屋だった。ベッドやテーブル、椅子はどれも高級なものだというのほすぐにわかった。

「こりゃすごい。スイートルームなんてもんじゃないな」

「ここは最高級の貴賓室です」

「はー、そりゃすごい」

そう言いながら、環は鞆と剣をテーブルに置いて椅子に座った。

「カレンも座って」

「なぜでしょうか？」

カレンは立つたまま眉一つ動かさずに答えた。

「ここには来たばかりでなんにもわかんないからさ、色々教えてもらいたいんだ」

「何をお知りになりたいのですか」

「さつき王様がノーデルシア王国って言ってたけど、この国っていつたいどんな国なのかな？」

「我がノーデルシア王国は500年の歴史を誇る大陸最大の国です。国土は肥沃で政治、経済も安定していました」

「していましたってことは、今は違うってことなわけ」

「はい、5年前、闇王と名乗るものが現われてからは安定とは程遠い状況です」

「闇王？」

「闇の力を持つ魔物を使役する存在です。正体は不明ですが、人間のような姿をした悪魔だという情報があります」

「そいつを倒すために俺を呼んだったことでもいいのかな」

「その通りです」

「なんで俺なの？」

「かつて世界の危機に異世界からの勇者を召喚し、その危機を治めたという伝説があります。勇者は類まれな魔力を持ち、希望をもたらしただ存在だと、その伝説は伝えていきます。タマキ様は優れた魔力の持ち主です、勇者に間違いありません」

「勇者ねえ」環は首をかしげた。「どうも実感が湧かないな。そもそもここにすることが夢みたいだし」

「タマキ様はなじんでるように見えますが」

「なじんじやいないけどさ。仕方ないんじゃないかな、ここが俺の世界とは別の世界なのは間違いないみたいだし。目の前に大きな問題があるのは間違いないんでしょ、そういうのをスルーするのって気分が悪いんだよね」

「気分が悪い、ですか」

カレンは少し微笑んだ。環もそれをみて笑顔になった。

「やつと笑ってくれた。あれ、そういえば不思議なんだけど」

「なにがですか？」

「なんでこうやって普通に話せてるのかな？ 言葉は違うはずだけど」

「それはわかりません。伝説では意思の疎通ができなかったということはありせんので、何らかの力が働いているのだと思われます」

「そういうもんか。まあ、便利だからそれでいいけど」

「それよりタマキ様、お疲れかもしれません、これから案内したいところがあるのですが」

「案内って、どこに？」

「本日は城の中をご案内いたします。」

「城の中ね。荷物は置いてつてもいいかな」

「はい」

環は鞆と剣をテーブルに置いたままにして立ち上がった。

「それじゃ、案内してもらつよ」

環とカレンが最初に来たのは食堂だった。数百人が収容できる食

堂には環も驚いているようだった。

「これはすごいな。城の人間は全部ここで飯を食うのかな」

「ほとんどはそうです。別にここで食事をしなければいけない規則があるわけではないので、全員ではありません」

「すごいな。俺もここで食事することになるのか」

「いえ、タマキ様は自室で済ませていただくことになります。どうしてもとおっしゃるのであれば、ここで食事をしていただいてもかまいませんが」

「それはいいけどさ、いつも一人っていうのは味気ないからなあ。たまにはこういうにぎやかなところで飯にしたいよ」

「そうですか。それでは次の場所にご案内いたします」

次は兵舎だった。そこは城の中でも一番大きな区画で、通常の兵士から魔法使いまで、様々な者達の訓練施設や寝床が用意されていた。カレンは環を武器庫に案内した。

「タマキ様、気に入るものがここにあるでしょうか？」

環は様々な種類の武器を眺めながらためいきをついた。

「こりゃすごいけど、俺はこんなもの触ったこともないよ」

「そうですか。訓練すれば使えるようになると思いますよ」

「そういうのは嫌だな。俺は魔法みたいなほうがいい」

「それでは魔法の訓練所にご案内します」

カレンが魔法の訓練所と言った場所は、かなりの広さと分厚い壁で囲われた広場だった。「今は誰もいないんだな」

「はい、それではまずこれを」

そう言ってカレンは一枚のスペルカードを取り出した。

「これはストーンスキンのスペルカードです。訓練を始める前に、まずこのカードと契約してください。これを使えば怪我の心配はありません」

「なるほどね。それじゃ、契約！ ストーンスキン」

バーストを契約した時と同じように、カードから力が流れ込んできた。それと共にカードは光になって消えていった。

「さすがです。それでは早速使ってみましょうか。カードと契約した時の感覚を思い出してください」

「なんか力が流れ込んでくる感じのこと？」

「はい。その逆の力の流れを作るイメージです」

「力の流れね」

環は意識を集中して、自分の中にある魔力を感じた。それを体の外へと流すようにイメージを描いた。

「できたみたいですね。今度はそれを魔法の名前と一緒に一気に放出してください」

「よし、ストーンスキン！」

環は全身が力に覆われるのを感じた。カレンはいつの間にか手にダガーを持っていた。

「ちよつと待った、その手に持つてるのは？」

環は一步後ずさったが、カレンは一気に間合いを詰めてダガーを横薙ぎにした。しかしダガーは環が出した腕に止められた。カレンはダガーをどこかにしまうと、眼鏡を直して微笑んだ。

「これは？ 切れてない、痛くもない。ところでそのダガーはどこから？」

カレンは環の疑問は無視して話を続けた。

「それがストーンスキンです。タマキ様の魔力があれば並大抵のことでは傷つかなくなるでしょう」

「確かに」環は思い切り地面を殴りつけた。拳は深く地面にめり込んだ。「全然痛くないし、体が硬くなってるからかな、パンチ力もすごい」

「次はバーストを使ってみましょう。やりかたは今と同じですが、こんどは手に意識を集中するのがいいです」

「今と同じね、こんな感じかな。バースト！」

かざした手からのものすごい爆発と共に環は吹き飛んで壁に叩きつけられた。頑丈なはずの壁は簡単にへこんでしまった。

「やれやれ、なんだよこれは」

環は頭をかきながら起き上がった。カレンはそれに手を貸しながら楽しそうな笑顔を浮かべた。

「本当にすごい魔力ですね。バーストは基本的な攻撃魔法で、本来はそれほどの威力はないはずですし、術者が飛ばされるようなものではないのですが」

「こんな風に自分が吹っ飛ばなんてことはないはずってわけか」

「そうですね。これほど派手なバーストは初めて見ました」

「うまくコントロールできるようにならなきゃ駄目だな、こりゃ」

「大丈夫ですよ、ストーンスキンを使っていれば爆風くらいでは無傷でいられます。周りを巻き込むことだけを注意すれば問題ありません」

「そうは言っても、いつも吹っ飛ばされるわけにもいかないから、練習しないとな」

環はさんざん吹き飛びながら練習を再開した。カレンはそれを優しい微笑みで見守っていた。

「なあカレン。この魔法って別に手から出さなくてもいいんだよね」

「可能ではあると思いますが、どうするつもりですか？」

「こうするのさ」

環は腰をおとして、右足を一步後ろに引いた。

「バースト！」

右足の下で強力な爆発が起こり、その勢いで環は前方に吹き飛んでいった。そのままの勢いで地面に突っ込んだが、環はすぐに笑顔で立ち上がった。

「こりゃすごいな」

「確かにすごいですね、非常識もいいところです」

スケルトンの襲撃

環とカレンが魔法の訓練をしているところ、城の外では慌しい雰囲気漂っていた。斥候隊からもたらされた情報、魔女がスケルトンの軍勢を率いて城に向かっていているという情報のせいだった。

「それで、避難の状況はどうだ」

エバンスが斥候を前にして落ち着いた様子で尋ねていた。

「はっ、現在全力で避難誘導しております。魔女が到達するまでにはほとんどの避難が完了する見込みです」

「全ては無理か。バーンズ、軍の準備はどうだ？」

「第一陣はすぐに出撃できます」

「そうか。時間は稼ぎたいが、無駄な被害はできるだけ避けたいところだな」

「しかし、そうしなければ被害は大きくなります」

「そうだな」エバンスは腕を組んでロレンザに視線を移した。「ロレンザ、勇者タマキはどうしている？」

「タマキ様はカレンと魔法の習得を行っています」

「戦えると思うか」

「魔力は計り知れないものがあります。しかし、すぐに戦うのは難しいのではないでしょうか」

「だが、我らには勇者の力が必要だ。すぐにここに呼んでもらいたい」

「はい」

一方、環はカレンに見守られながら魔法の練習をしていた。

「タマキ様、だいぶ上達しましたね」

「ああ、あんまり吹っ飛ばなくて済むようになってきたよ」

そこらじゅうを穴だらけにしながら、環はさっぱりした顔をしていた。

「そろそろ他の魔法も使ってみたいんだけど」

「まずバーストとストーンスキンを使いこなせるようにしたほうがいいでしょうね」

「けっこう使えてると思うけど」

「まだまだ無駄が多いですね。いくらタマキ様の魔力が膨大とはいえ、無限ではありえませんし、有効な使い方というものがありますから」

「失礼します！」

そこに1人の騎士が駆け込んできた。

「勇者様、至急城門前までお越し願いたいと王子の仰せです」

「王子って、あのエバンスって人か」

「そうです。重要なことだと思いますので、急ぎましょう」

カレンは環の手を取って早足で歩きだした。

「ところでさ、その王子様ってのはどんな人なのかな」

「王子さえいれば次代は安泰だと言われています。さらに、武勇と智謀に優れ、民衆からも慕われています」

「大した王子様なんだな。それで、その王子様が急ぎの用っていうのはなにかな」

「それは、行けばわかります。タマキ様、少し面倒なことがあると思いますので、気を引き締めていただくのが良いかと」

「気を引き締めるって、戦争でも始まるのかい？」

「似たようなものです」

話しているうちに、2人はエバンスの元に到着した。

「よく来てくれた勇者タマキ」

「単刀直入に聞くけど、何があつたんだい王子様？」

シンプルな環の問いにエバンスは楽しそうに笑った。

「エバンスと呼んでくれてかまわないよ、勇者タマキ」

「なら、俺のこともタマキでいい。勇者っていうのはいらないよエバンス」

「わかった、タマキ。さて、君に来てもらったのは、今やつかいなことが起こっているからだ」

「なんか化物でも攻めて来たとか？」

「その通りだ。我々が魔女と呼んでいる者が、スケルトンというモンスターを率いてこの城に侵攻してきている。手をこまねいているわけにはいかない」

「スケルトンっていうと骸骨の化物か。軍隊でも出すのかな」

「軍は少しなら出せるが、時間稼ぎ程度しかできないだろう。こちらの被害も大きいものになる可能性がある。動かないわけにはいかないのだが、うかつなことはできないんだ」

「そこで勇者とやらの出番ってわけになる？」

「そう、その通り」

エバンスは真面目な顔でうなずいた。そしてカレンに視線を移した。

「カレン。タマキは戦えるか？」

「今のタマキ様でも、スケルトン程度に引けをとるとは思えません」

「戦えるの？ 俺が？」

「はいタマキ様。先ほどのあなたの訓練に比べたら、はるかに楽なものです。魔女には注意が必要ですが、1人で戦ったとしてもタマキ様が負けることはありません」

「カレン、それは本気で言ってるのか？」

その断言に、エバンスは内心驚いていた。だがカレンが本気で言っているのは間違いないかった。

「タマキ様、恐れ入りますが、バーストを一発撃ってみてください。周りを巻き込まないように」

「バーストね、そんじゃ軽く、バースト！」

あたりに爆音が響き、環は魔法の反動で数メートル後方に飛ばされた。そこにいた者は皆、啞然としていた。とても基本魔法と言われるバーストの威力ではなかったからだ。

「こんなもんかな」

「次はストーンスキンを使ってみてください」

「はいはい、ストーンスキン！」

「どなたかタマキ様を斬っていただけませんか？」

カレンの言葉にその場は騒然としたが、エバンスが一步踏み出してすぐに静かになった。

「いいのだな？ タマキ、カレン」

「いや、いいのかな？」

「はい、問題ありません」

環は首をかしげていたが、カレンは自信を持って言い切った。エバンスは腰の剣を抜いて、一気に間合いをつめると、環に袈裟切りに切りかかった、が、硬い音と共に、エバンスの剣は環の体に弾き返された。

「これは、信じられない。まるで岩山に斬りつけたようだ」

エバンスが剣を振るった結果と言葉に、周囲の者達は畏敬の念をこめて環を見つめた。

「確かにこれなら負けることはない。タマキ、第一陣と共に出撃してくれるか？」

「出撃ね、そうすればこの町を守れるのかな」

「君の力があれば必ず守れる」

「わかった。それじゃ、さっさと行こうじゃないか」

「武器は必要ないのか？」

「使ったことないしいらないよ。魔法があるんだからなんとかなりそうだし。なあカレン」

「そうですね、行きましよう」

カレンの一言に環は不思議そうな顔をした。

「カレンも来るのか？」

「ええ、タマキ様のお世話役ですから」

スケルトン軍団が見えるところまで到着した環は、その軍団の数に驚いていた。

「これはすごいな、見渡す限り骸骨って感じた」

「スケルトンはそれほど強くないモンスターですが、これだけ数が

集まると厄介です」

「こいつらの攻撃はストーンスキンを使っていれば大丈夫なのかな」

「普通はそうはいきませんが、タマキ様ならスケルトンの攻撃は問題になりません」

「わかった。それじゃあ、ちよつと行ってくるか」

環は兵士達に向き直った。

「ちよつと行ってくるけど、みんなはここにいてくれ。怪我とかしてほしくないからね」

そう言つて、環は腰を落として走り出すように構えた。

「タマキ様、スケルトンを操っている魔女がいるはずですよ。その魔女を倒せばスケルトンは自然に消滅します」

「わかったよ、それじゃ行ってくる。ストーンスキン！ バースト！」

爆発と共に環は砲弾のようにスケルトン軍団の中に飛び出していった。その突撃だけで数十体のスケルトンがばらばらになった。環はゆっくりと立ち上がって辺りを見まわした。

「こんだけ骸骨ばかりつていうのも壮観だな」

周囲のスケルトンが一斉に切りかかってきたが、防ぐこともせずそのまま剣を体で受け止めた。一太刀たりとも環の体を傷つけることはなかった。

「この程度なら1人でどうにでもできそうだな」

そうつぶやいた環にスケルトンは次々に襲いかかってきた。

「バアアアアアアストオ！」

全身に魔力をみなぎらせての凄まじい爆発がおこった。半径5メートルのスケルトンは跡形もなかった。

兵士達はその光景を見て呆然としていた。ただ1人カレンだけは特に驚いた様子もなかった。

「本当に非常識な人ですね。あれはもうバーストではない新しい魔法ですよ」

「確かにそうですね」

兵を率いていたバーンズはやっと驚きから開放されて、カレンに声をかけた。

「これは勇者様だけで何とかなってしまいそうな様子ですが」

「そうですね。タマキ様はまだ加減というものがわかりになっていないので、下手に動いたら巻きこまれてしまいます。危なくなる様子があるまではじっとしているのがいいでしょうね」

「危なくなると思いますか？」

「なりませんよ」

カレンの視線の先には、次々とスケルトンを撃破していく環がいた。

魔女

「いい加減にすっこんでろ！」

環は気合と共にスケルトンに蹴りをいれた。ストーンスキンで強化された蹴りは易々とスケルトンを粉碎した。すでにかなりの数のスケルトンを倒していたが、まだ魔女のいる場所には到達できなかった。

「バースト！」

間髪入れずに後方のスケルトンを振り向きざまのバーストで吹き飛ばす。それでもスケルトンは限りがないように思えるほど湧いてくる。

「魔女とかいうのを見つけないや、きりがないか」

環は腰を落として足に魔力を集中させた。

「一気に跳んでやる！ バーストオ！」

環は爆発の勢いで跳んだ。上空から見渡すと、はるか後方にスケルトンの密度が高い場所があるのが確認できた。

「あそこか」

そして着地というか、墜落すると、すぐに体勢を立て直して再び跳んだ。何回かの跳躍でやっと目指していた場所に到達できた。

「魔女さんよ、ちょっと顔を見せてもらいたいんだけどな」環はスケルトンの固まりに手をかざした。「バースト！」

スケルトンは吹き飛び、そこには魔女と思しき人物が残された。それほど環と年齢が離れているとは思えない、軽装の鎧に身を包んだ女だった。

「お前が魔女か。できればこの骸骨連中を連れて退いてもらいたいのんだけどな」

魔女は環の言葉に、顔だけは動かしただが目は空ろで何の反応もなかった。ただ手を上げると、吹き飛ばされたスケルトンの穴を埋めるように新しいスケルトンが集まってきた。

「話は聞かないか。それならその気になるまでつきあってやるよ！」
地面を蹴って魔女に向かって突っ込む環。スケルトンは次々に襲いかかってくるが、それは次々に殴り飛ばされていった。しかしそれだけでは追いつかず、環にはびつしりとスケルトンが張り付いた。しかしその口は笑みを浮かべた。

「まとめて弾け飛ばえええええ！ バアアアストオオオオ！」
それまでとは比較にならない強烈な爆発がスケルトンを吹き飛ばした。魔女は何かの手段でそれを防いだのか、まったくの無傷だった。

「勇者か、お前の名は？」

相変わらずの空ろな目で魔女は環に問いかけた。

「やつと口をきいたか」環はほっとしたような表情になった。「おれは高崎環。こことは違う世界から来た。あんたは何者だ？」

「わたし？ わたしは」魔女は顔をしかめて額に手を当てた。「わたしは魔女だ」

「俺が聞いているのはそんなことじゃない！ あんたが何者でなんて名前かだ！」

「何者？ 名前？ わからない。お前はタマキか、勇者タマキ」

「俺のじゃない、あんたの名前だよ。思い出せないとでもいうのか？」

「思い出す？」

「最初から魔女なんてもんじゃないだろ、それを思い出せって言ってるんだよ」

「いいかげんに、黙れ」

魔女は押し殺した低い声で言うと、環に手を向けた。それと同時に凄まじい衝撃波が環に襲いかかった。

環はその衝撃波を腕をクロスさせて受け止めた。

「話はちゃんと」じりじりと衝撃波によって環の体が押されていった。「最後までするもんだぜ！」

腕を開くと同時に気合と魔力を一気に放出し、衝撃波を吹き飛ば

した。

「まったく、そっちがその気なら話す気になるまで付き合ってやるうじゃないかって、おっと！」

魔女はいつの間にか環の目の前まで迫り、再び衝撃波を放とうと腕を突き出した。環もそれに大して腕を突き出し叫んだ。

「バースト！」

衝撃波と爆発が互いに相殺しあった。環はすぐに蹴りを繰り出したが、魔女はそれを一歩後ろに下がってかわした。そして腕を空に突き上げた。

「スケルトン、集え」

その声に応えて、スケルトン達が一斉に魔女の背後に集まるように動き出した。

「贅をささげる」

闇としか形容しようがないものが現われ、次々に集まるスケルトンを吸い込むように飲み込んでいった。最後に魔女もその闇に飛び込んでいった。しかし、環がバーストの爆発で跳び、それを阻止した。

環に抱えられた魔女に、初めて表情らしいものが浮かんだ。それは怒りだった。

「放せ、これでは召喚が完成しない」

「そんなもん知るかよ。あんた人間なんだろう、あんなわけのわからんものに飲みこませるわけにはいかないな」

「放せと言っているんだ」

「うおっ！」

着地すると同時に、魔女の衝撃波で環は吹き飛ばされた。魔女は全てのスケルトンを飲み込んだ闇に走り出したが、闇はどんどん小さくなっていった。

「やめとけ、闇に合わない」

環は立ち上がりながらそう言った。その通りに闇は魔女を飲み込むことなく消えた。

「これで防げたと思うな」

魔女は闇があつた場所に手を置いた。

「闇の力よ、贄に捧げた魂を喰らえ。そして魂の代価を今ここに現せ」

地響きと共に再び闇が地面に広がり、そこから巨大なスケルトンの頭部が現われ始めた。

「おいおい、骸骨飲み込んで巨大化とか、勘弁してもらいたいな」
ウンザリしたような様子で呆れながら環はその光景を見つめた。

頭、肩、胸、腰、足と巨大スケルトンはその姿を現していった。

「こいつは20メートルはありそうだな、魔女さんよ」

「不完全だが、貴様をつぶすには十分だ」

魔女が環に向かって腕を振り下ろすと、巨大スケルトンは動き出した。図体のわりに早い動きで環に迫り、踏み潰そうと足を上げた。環はそれを正面から受け止めた。

「ぐっ、さすがに重いな」環は今にも潰されそうに関わらずにやりと笑った。「ちょっと試してみるか」

環は目をつぶって小さな声でつぶやき始めた。

「魔力は力だ。その力の流れをうまく体の中でコントロールするこ
とができれば、それを自分の力として使うこともできるはず」

スケルトンの足が完全に止まり、逆に押し返され始めた。

「おおおおおおおおお！」

気合と共に一気にスケルトンが押し返された。

「一気に潰すぜ！ バースト！」

環は爆発を利用して一気に飛び上がり巨大スケルトンの顔面を殴りつけた。その巨体が揺らぎ、ゆっくりと倒れていった。環は着地するとすぐにその倒れる影に入り、両手をかざした。

「砕け散れ！ バアアアアアストオオオオオ！」

環に向かって倒れこんだ巨大スケルトンは、爆発で粉々に砕け散った。あつという間のできごとに、魔女は何もできずに見ているだけだった。

「じぼくも眠ってました」

もう1人の勇者

スケルトンの襲撃から数日、王国は上から下まで大騒ぎだった。

スケルトンの軍団を1人で壊滅させた勇者タマキの存在がその原因だった。そして問題を複雑にしているのは環が連れてきた魔女の存在だった。

そんな中、エバンス、ロレンザ、バーンズの3人はエバンスの私室に集まっていた。

「タマキ様の力は我々の想像以上のものだったようですね」

まずロレンザが口を開いた。バーンズはそれにうなずいた。

「確かに想像以上でしたね。カレン殿は予想していたようですが」

「バーンズ、お前の目からはどう見えた？」

「魔法の威力は凄まじいものでしたし、その動きも常人離れしていました。キングスケルトンを一撃で殴り倒してしまうほどです。ほとんど雑魚を相手にしているように見えました」

「話を聞けば聞くほどすごいな、タマキは。それだけの力があれば魔女を倒してしまうのは簡単だっただろうがな。なぜ生け捕りにしたのだ？」

「カレンが聞いた話では、勘だと言っていたそうです」

「勘か、いい勘だ。だが、そのおかげで知られたくないことを知られることになってしまったな」

「エバンス様、それに関して王様はなんとおっしゃっているのですか？」

ロレンザの質問にエバンスは難しい顔をした。

「父上はまだ態度をはっきりさせていないが、魔女を始末してしまえという意見もあるらしい」

「そのようなことをすれば余計な疑念をまねくだけではないでしょうか？ タマキ様は何かを感じたからこそ、魔女を倒さずに捕らえてきたのでしょう。いっそのこと、全てをお話するべきなのでは？」

「私もロレンザ殿に同感です。あれだけの力を持つ勇者様に下手な小細工を弄すべきではないかと」

「そうだな、タマキはいい男に思えるし、余計なことで距離を作ることはしたくないものだ。魔女の正体を明かしてもいいかもしれないな」

3人は黙って考え込んだ。そこでドアがノックされた。

「エバンス様、カレンです」

「カレンか、入れ」

「失礼いたします」

カレンは頭を下げて部屋に入ってきた。

「タマキの様子はどうか？」

「今は自室でお休みになっています」

「そうか。カレンよ、タマキのことに關してお前の意見を聞かせてもらいたいのだが」

「はい」

「タマキは魔女の正体に関して何か言っていたか？」

「いえ。タマキ様はただ魔女が無事かどうかということだけを気にされています。今回はほかに気にする必要がある人間はいませんので」

「そういえば、タマキはこの町を守れるかと、出撃前にそう聞いていたな。彼が戦うのは、ただ守るためか」

「戦うのを楽しんでいたのなら、魔女を生かしておくことなどしなかったはずだ」

「どんなに大きな力を持っていても、それに溺れず、自分の信念を貫く人間なのだろうな。私も、誠意を持って接するしかあるまい。カレン、今からタマキに会いに行くぞ」

「はい、エバンス様」

4人は部屋から出て行った。

環はベッドに寝転がって上を見ていた。あの朝、家を出たと思っ

たら、変な世界に足を踏み入れて、魔法やら骸骨の化物やら、あつという間に色々なことが襲いかかって来た。

それでも誰も傷つけずに済んだ。化物はずいぶん倒したが、あれは生物とは言えないのは戦ってみてよくわかった。そしてあの魔女とかいう人は何だったのか。何かに操られているように見えた。まだ意識は戻っていないらしい。

環は自分の右手を顔の前にもってきて、それをじっと見つめた。これからこの手で何をすることになるのかと、思わずためいきが出た。魔力のせいか体は疲れていないが、なにか心に隙間が生まれているような妙な感覚があつた。

「タマキ様、カレンです。起きていらつしゃいますか？」

環の思考はカレンの声で遮られた。

「ああ、起きてるよ。鍵はかけてない」

カレンがドアを開けてエバンスを室内に導いた。環は体を起こした。エバンスはソファアーに腰をおろした。

「タマキ、休んでいるところをすまないな」

「いや、別にいいよ。それで、何の用かな？」

「ちよつと話がしたいと思つたのだが。かまわないか？」

「ああ、別にいいよ」

「圧倒的な戦いぶりだったが、タマキは元の世界では何をしてたのだ？」

「別にただの学生で、勉強してただけだよ。喧嘩ならともかく、あんな化物は相手にしたことはなかったね」

「勉強をしていたのか。しかし、戦いが怖いとは思わなかったのか？」

「怖い？　そういえば全然思わなかったな。なんでだろう？」

「タマキがそれだけ胆力があつたということだろう」

エバンスはそう言って笑ったが、カレンは少し顔をしかめた。環はそれに気がついた。

「カレン、俺何かまずいことを言つたかな」

「いえ、なにも」

「それよりタマキ、なぜあの魔女を捕らえてきたのだ？」

「なんとなくだよ。人間みたいだし、何か様子がおかしかったからね。事情がありそうじゃないか」

「事情か」エバンスは腕を組んで少し考え込むような表情になったが、すぐに意を決したような表情に変わった。「事情は大いにあるのだ。しかもタマキ、君に関係がある」

「本来は君にこれ話を話すかは、今父上達が討議しているところだ。だが、我々のために戦ってくれた君には知る権利がある」

「知る権利っていうのは、何を？」

「魔女の正体だ」

「それを何で？」

「魔女というのは元々、タマキと同じ世界から我々が召喚した勇者なのだ」

「それはつまり、いや、なんでこんなことになってるんだよ」

環は少々取り乱していた。エバンスはそれにかまうことなく話を続けた。

「彼女はミヤザキヨウコと名乗っていた。君ほどではないが優れた力を持っていて、我々に協力してくれたのだが、闇王に敗れて捕らえられてしまったのだ」

「それで魔女になって敵として現われたっていうわけなのか」

「そうだ。だが君が取り戻した」

「なるほど。何かあるとは思ったけど、そういうことだったのか。でもなんでそれを隠してたんだ？」

「以前に勇者がいて、しかもその勇者が敗れていたなど、言えるものではない」

「それはまあ、言いたくないだろうけどさ。それはちょっとな、気分が悪いよ。ひょっとして同郷の人間を殺すところだったんだぞ。カレンも知ってたんなら言ってくれよ」

「もうしわけありませんでした」

カレンは素直に謝罪の言葉を口にして頭を下げた。エバンスはそれを見て自分も頭を下げた。

「カレンを責めないでほしい。これは我々の総意だったのだ」

「わかったよ。それで魔女、じゃなくてミヤザキさんはどうなるの？」

「まだわからない。しかし、こうしてタマキに真実を知らせた以上、処刑などということはないはずだ」

「処刑って、そんなことやったら暴れるよ、俺は」

「タマキ様が暴れたらこの国は滅んでしまいますので、どうか自重してください」

「ああ、そうならないと約束する。私が皆を説得しよう。なに、タマキが暴れると言えば納得しない者はいまい」

エバンスはさわやかに笑い立ち上がった。

「カレン、タマキを頼む。必要なことはなんでも手配してくれ」

「はい、エバンス様」

カレンの返事にうなずいて、エバンスは部屋を出て行った。環は緊張の糸が切れたのか、ベッドに倒れこんだ。

「ところでタマキ様、今着てらっしゃる服ですが、だいぶ傷んでしまっているようですね」

「ああ、そうかな。あれだけ派手にやったわりには大丈夫みたいだけど」

「預けていただければ、同じものはできませんが、似たものなら作ることができます」

「できるの？」環はブレザーを脱いだ。「じゃあとりあえず、このブレザーだけよろしく。あと、ミヤザキさんの見舞いに行こうと思うんだけど、案内頼むよ」

「はい、ご案内いたします」

カレンはブレザーを受け取り、環の手をとった。

「いや、いちいち手をひいてくれなくても」

「そのほうが確実ですから」

聖なる泉へ

「失礼しまーす」

環はそう言ってドアを開けた。部屋には数人の侍女らしき人がいた。カレンが目で合図を見ると、侍女達は礼をして部屋から出て行った。

環は黙ってベッドのそばまで歩いていくと、そこで寝ているヨウコの顔を見た。

「意識は戻ってないんだな」

「はい、医者の話では命に別状はないようですが、閻王の呪縛から解き放たれたのはヨウコ様が初めてですからくわしいことは何もわかりません」

「でも案外簡単に目を覚ましそうに見えたんだけどな」

「それはタマキ様の巨大すぎる魔力が呪縛に影響を与えたのだと思います」

「それじゃあ俺の魔力を注ぎ込めば目を覚まさせることができるんじゃないか？」

「おやめください。最悪命に関わります」

「駄目か。じゃあ、どうすれば目を覚まさせることができるんだらうな」

「ロレンザ様なら何かご存知かもしれません」

「あの最初に魔法を教えてくれた人か。賢者さんてやつ？」

「賢者？　そうですね、そう呼ぶのもいいかもしれません。今度からそうしましょう」

「じゃ、行こう」

2人は部屋から出て、祭壇のあるホールに向かった。ホールではロレンザが分厚い本を開いて何かを調べていた。

「賢者ロレンザ様、タマキ様が伺いたいことがあるそうです」

「賢者とは何事ですか？　カレン」

ロレンザは軽く笑って振り向いた。

「ヨウコさんのことで聞きたいことがあるんだ。あの人の目を覚ます方法は何かないのかな」

「目を覚ます方法ですか。今ちょうど調べていたところです」

「それで、何かわかったりしたのかな」

「ええ、これは我が国に古くから伝わる伝説ですが、北にある森の中心に、精霊の泉というものがあります。その泉には邪悪な力を浄化する力があるというものです」

「精霊の泉ね。そういうことならさっさと行こうじゃないか。場所は？」

「タマキ様、少々急ぎすぎではないでしょうか」

「いや、そんなことはない」カレンの質問に環は首を横に振った。

「闇王つてのがまだいるんだろ、いつ攻めてくるかわかったもんじやないし、それにミヤザキさんだってほつといたらどうなるかわからないじゃないか」

「たしかにそうかもしれませんが、それには1つ問題があります」

「問題？」

ロレンザの言葉に環は首をかしげた。

「精霊の泉が応えるのは精霊の加護を受けた者だけです」

「精霊の加護っていうのは、それは誰なんだい」

「エバンス様です」

「つまり、王子さんに同行してもらわないといけないのか。それは面倒くさいことになりそうだ」

「残念ですが、それほど面倒なことにはなりません」カレンは大して残念でもなさそうに言った。「エバンス様であれば喜んで同行するかと」

「そうなの？」

環の疑問にロレンザは笑顔でうなずいた。

「はい、その通りです」

3人はエバンスを探して城内を歩いていた。なぜかカレンはその居場所がわかるようで、環の手をひきながら、迷うことなく進んでいた。

「カレン、本当にこっちにエバンスがいるのか」

「はい、この時間は庭園にいらつしやいます」

「庭園、そんなものであるんだ」

「もちろんです。ところでタマキ様、それよりも新しい魔法を契約していただかなくてはいいけません」

「魔法か、確かに2種類じゃ寂しいよな。あと何種類ぐらい覚えればいいの」

「あと6種は契約していただきます」

「6種類か、それって大変？」

「大丈夫ですよ」ロレンザはスペルカードを取り出して微笑んだ。

「タマキ様ほどの魔力があるなら、簡単にできることです」

「そっか、じゃあ庭園で練習できるかな」

「それはご遠慮願います」

「わかったよ」

カレンにたしなめられて環はうなだれた。そうこうしているうちに、庭園に到着した。そこにはカレンの言った通り、エバンスがいた。花の手入れをしているようで、環達には気がついていないようだった。

「土いじりって楽しい？」

環が声をかけると、エバンスは振り向いた。穏やかな顔をしていた。

「楽しいぞ。それより3人揃ってどうしたのだ」

「エバンス様、ヨウコ様のことで新しくわかったことがあるのです」

「わかったこととはなんだ？ ロレンザ」

「ヨウコ様は眠ったまま目を覚ます気配がありません。しかし目を覚ますことができる方法が見つかりました」

「精霊の泉か」

「はい」

「私の出番のようだな」

「ですが、いいのですか？ 今はそうできる状況ではないと思いますが」

「我々を救えるのはタマキだけだ。だから、その願いをかなえるのは何よりも最優先にすべきだ。これは信義の問題なのだから」

「さすがエバンス。わかってらっしゃる」

環は満面の笑みでエバンスの肩を叩いた。

「ああ、邪魔がはいらないうちにさっさと出発しよう」

「また王や大臣達が色々心配されると思いますが」

カレンのつつこみに、エバンスは首を横に振った。

「かまわん。今はそんなことよりやるべきことがあるのだ。行こう
タマキ」

「おお、早速出発だ」

「カレン、バーンスを呼んできてくれ。裏の門に集まることにしよう」

「はい、ただちに」

カレンは音もなくその場を去っていった。

「さて、ヨウコを乗つけていくための車を用意しよう。タマキは一緒に来てくれ、ロレンザは裏の門までヨウコを連れてきてくれ」

しばらくして、一行は城の裏の門に集まった。

「準備はいいな」

「ちょっと質問なんだけど、精霊の泉ってどれくらい遠いのかな。あと馬車で行けるの？」

「ゆっくり行っても日が沈む前に帰ってこられる程度の距離だ。道もあるから馬車も通れるし、特に危険もない」

「そっか、それならさっさと出発だ」

「タマキ様」

早速歩き出そうとした環をカレンが止めた。

「タマキ様は馬車に乗ってください。到着までにスペルカードの契約を済ませてしましましょう」

「みんな乗らないのか？」

環の言葉にエバンスは首を横に振った。

「私は歩く、こんな機会でもないとなかなか森を歩きまわることもできないからな。バーンス、御者を頼む。ロレンザはタマキと一緒に後ろに乗ってくれ」

ロレンザとバーンスは言われた通りにした。環とカレンもロレンザに続いて馬車に乗り込んだ。馬車の内部はヨウコが寝かされていて、あと3人も入るとほぼ満員だった。カレンは6枚のスペルカードを取り出して環に手渡した。

「これはそれぞれどんな魔法なのかな」

「それは私から説明いたしましょう。まず一番上のカードはアイスバイト、氷の牙を出現させます。次がファイアボール、これは爆発する火の玉を作り出します」

「うんうん、それでこの3枚目は？」

「それはライトニングボルト、雷の矢を作り出します。次はプロテクション、それは魔法の盾を作り出します」

「魔法の盾？ ストーンスキンとはどう違うの？」

「ストーンスキンは直接体の防御力を高める魔法ですが、プロテクションはあくまでも魔法の盾です。ストーンスキンでは炎や氷、雷にはそれほど効果はありませんが、プロテクションを使えばそれらも全て防ぐことができます」

「そりゃすごい、それでこの最後の2枚のカードは」

「1つはヒーリング、体力の回復をする魔法です。軽傷ならばすぐに治すことも可能です。そしてもう1つがマイティ、身体能力を向上させます」

「身体能力の向上か。あのかい骸骨と戦った時は魔力を使っ
てすごい力が出せたんだけど、それと同じかな」

「いえ、マイティではあそこまでの力は出せません。しかし、マイティならば一度使えばしばらくの間は有効ですし、他人にかけることもできるのです」

「確かに、あのやりかたは瞬間的にしか使えないみたいだもんな。他人にもかけられるのも便利そうだ。魔法様々」

カレンはその環の言葉にうなずいた。

「その通りです。タマキ様は非常識な魔力をお持ちですが、それともにも使わなければ効率は悪いですし、制御を失敗することもあるかもしれません」

「なるほどね。すっかり覚えないといけないんだな」

泉の精霊と闇の気配

泉までの道のりはのんびりしたものだ。環は魔法の契約を済ませ、周囲に被害が及ばない種類のものを練習していた。

「よし、プロテクション」

環は自分をの前に壁を作り出すイメージでプロテクションを使ったのだが、そのイメージ通りにはいかずに、馬車全体を覆うほど巨大な魔力の盾が出現した。

「ちよつとでかすぎだな」

「ちよつとどころではありませんね。プロテクションはイメージ通りに展開できなければ使いにくい魔法ですよ」

環はプロテクションを解除して難しい顔をした。

「そうなの？ でかいほうがいいような気がするけど」

「大きければ魔力の消費も激しくなりますし、維持するのも大変になります。それにプロテクションは1点でも破られてしまうと消失してしまいます」

カレンの説明に環は納得したように何度か首を縦に振った。

「なるほどなるほど。確かにあのサイズをずっと集中して維持するのは戦いながらだと難しそうだな。ロレンザさん、何かコツみたいなものはないの？」

「コツ、ですか」ロレンザは両手を前に突き出した。「プロテクション」

突き出した両手の間に円状の魔法の盾が出現した。

「こうして、手の間に作るようにすると、イメージしやすく、比較的簡単にできると思います」

「こうかな」環はロレンザと同じように両手を突き出した。「プロテクション」

形は多少いびつだが、環の両手の間に魔法の盾が出現した。それはロレンザのプロテクションよりも強い輝きを放っていた。

「おお、できた」

「ライトニングボルト」

その盾に向かっていきなりカレンがライトニングボルトを放った。それは魔法の盾に当たり消失した。

「カレン、いきなりそれはきついつて」

「うまくいつているかは実際に試するのが一番ですから。それにタマキ様ならば大丈夫でしょう」

「いや、駄目だつて」

「タマキ、着いたぞ」

そうしているうちに、馬車が止まってエバンスが外から声をかけてきた。タマキはヨウコを抱えて馬車から降りた。その目の前には小さな泉があつた。透き通るような泉は、確かに普通ではない存在が感じられた。

「これが精霊の泉か」

「そうだ、美しい泉だろう。我が王家の守護を司る存在でもある」

「それで、精霊っていうのはどこに？」

「まあ見ていってくれ」

そう言うエバンスは泉に足を踏み入れて、どんどん歩いていった。腰辺りの深さのあるところまで歩くと立ち止まった。

「なあカレン、エバンスは何をしようとしてるんだ？」

「精霊に語りかけているんです。見ていればわかりますよ」

環はエバンスに注目した。立っているエバンスを中心に波紋が広がっていくのが見えた。さらに、水が霧状になりゆっくりとエバンスの体を包み込んでいった。そしてその霧は次第に人のような形を作つていった。

「あれは？」

「精霊がエバンス様の体を借りて姿を現そうとしているのです」

ロレンザは落ち着いた様子で環に解説をした。そうしているうちにも霧はほぼ人間のような形になった。大きさは人間の2倍ほどで、霧で出来たシルエットという感じのものだった。

「異界からの勇者よ、よく来た」

泉全体からこの世のものではない声が聞こえた。

「あんたが精霊さんか。今日は頼みがあってきたんだ」

「わかつている、今我が子から聞かせてもらった。勇者よ、その娘を我がもとに」

環はヨウコを抱えたまま泉に足を踏み入れた。精霊は手にあたる部分を伸ばしヨウコを包みこんだ。環は手を放しヨウコの体を精霊にゆだねて、泉から出た。

「どれくらいでミヤザキさんは目が覚めるの？」

「これは、少し時間がかかるであろう。いや、待て」精霊の声が少し緊張を帯びたものになった。「どうやら森に邪悪な存在が足を踏み入れたようだ」

「邪悪な者つて、どれくらい？」

「ごく少数だ」

「タマキ様、ちょうどいい実践練習ができそうですよ。ただ、使うのはバーストとアイスバイトだけにしていただけますか？」

「なんでまた」

「タマキ様の魔力でほかの攻撃魔法を使われたら火事になってしまいます」

「たしかにそうだな。わかった、いい実践練習になりそうだし、ちよつと行ってみよう。それで精霊さん、その闇の手の者つていうのはどこにいるかわかるかな」

「焦ることはない。邪悪な気配はここを目指してきている」

「そういうことなら、ここで迎え撃とうか」

環の提案にカレンはうなずいた。

「勇者様、我らにできることありませんか？」

バーンズは環にそう聞いた。環は少し考えるように、あごに手を当てた。

「みんなは馬車とエバンスを守ってくれないかな」

「了解しました」

3人は馬車とエバンスを守るために後ろに下がった。環はそれを確認すると、邪悪な気配というのを迎え撃つために道のと真ん中に立った。

「あれが邪悪な気配ってやつ of 正体か」

環の視線の先には数十体の異形の魔物達がいた。スケルトンやその他の人間とも他の動物とも全く違う禍々しい連中だった。

「スケルトンにピットデーモン、オーガもいますね」

「カレン、なんでここにいるの。いや、まあいいか、あの小さいのがピットデーモン？」

「そうですね、素早い動きに注意してください。あの巨体がオーガです、見ての通り、力が強い魔物です」

「あとなんか浮いてる霞んだボロきれみたいなものもいるけど」

「イビルミストですね。魔法を使う魔物で普通の攻撃はなかなか効きません」

「それじゃとりあえず、アイスバイト！」

環が腕を振ると氷の牙が3つ出現し、魔物達に向かって飛び出していた。そして激突。ピットデーモン数体とスケルトン数体がその餌食になった。

「まずまず。じゃ、次は」

成果を確認している環に向かって、イビルミストからお返しというわけなのか、氷の牙が放たれた。

「プロテクション！」

それは魔法の盾に阻まれ砕け散った。そのまま盾を展開したまま、環は走り出した。

「こいつも試してみるか、マイティ！」

身体能力が強化され、環の走るスピードは更に早くなった。その間もイビルミストからの攻撃はやまなかった。しかし、それはことごとく魔法の盾に阻まれた。さらにピットデーモンが襲いかかって来たが、それは一気に跳躍してかわした。

「まずはボロきれからだ、バースト！」

爆発がイビルミストを吹き飛ばした。環が着地するタイミングで、オーガが腕を振るった。

「ストーンスキン！」

それを環は腕を上げて防いだ。マイティで強化された力はその一撃を受け止め、踏み止まることができた。

「なるほど、マイティで出せる力はこれくらいか。それじゃ」環の体内で魔力が一気に膨れ上がった。「終わりにさせてもらおう！」

オーガは蹴りの一発で吹き飛ばされた。それに巻き込まれたスケルトンとピットデーモンが潰れた。残った魔物が環を囲んで一気に跳びかかった。

「バースト！」

跳びかかってきた魔物は残らず吹き飛ばされ、あとはオーガを残すのみになった。なんとかかさっきの蹴りのダメージから立ち上がり、オーガは環に向かって突っ込んできた。

「いくぞ、アイスバイト！」

複数放ったものとは比べものにならないサイズの氷の牙がオーガに向かって飛び、その体を貫いた。

「さすがタマキ様です。実戦に強いですね」

「そうらしいね。じゃ、戻ろう」

そうして、環とカレンが泉に戻ると、エバンスはすでに泉から出ていた。

「なんだタマキ、早かったな」

「まあ、あんまり数も大したことなかったからね。それで、ミヤザキさんは？」

「彼女はまだ目覚めていないが、もう大丈夫だ。それよりも、この森に魔族が侵入したというのは気になるな、早く戻ったほうがよさそうだ。みんな馬車に乗り込め」

「いや、俺は一足先に戻るよ。なんか嫌な感じがするんだ」

「そうか、頼む」

「じゃ、一足先に行ってきます」
環はそう言って、バーストで跳んでいった。

闇王

城に戻った環を待っていたのは燃えさかる城下町だった。環は急いで城壁に登りその状況を見渡した。不思議なことに魔物の軍勢は全く見当たらなかった。環は手近にいる兵士をつかまえた。

「一体何があつたんだ？」

「勇者様、闇王が、闇王が攻めてきたんです！」

「闇王か」環が再び城下町を見渡すと、城壁に近い位置で爆発が起こった。「あそこか、バースト！」

一気に爆発があつたところまで跳ぶと、そこには姿は人間に似ているが、まとうている雰囲気は全く違う何者かがいた。

「あんた、闇王って奴かい？」

「なんだ貴様は？ いや待て、人間ではありえない魔力だ。ということは貴様も人間どもが呼んだ勇者か」

「そう、あんたを倒すために呼ばれたってやつ。ここで会えてちょうどよかったよ」

「ほう、どうするつもりだ？」

「悪いけど、倒させてもらう」

環はそう言つて闇王に指を突きつけた。

「前の勇者よりもできるようだが、貴様に何ができる。前の人間と同じようにしてやろう」

闇王は環のことを嘲った。環はそれを黙って受け止めてから、全身に魔力を溢れさせて闇王をにらみつけた。

「黙ってもらいたね、まずはストーンスキン！」

魔力が一気に開放された。

「バアアアストオ！」バーストの爆風で加速された環が一直線に闇王に突っ込んでいく。「くらええええ！」

「ぬるい！」

轟音。そして砂煙。その砂煙が晴れると、あれだけの勢いで突っ

込んだ環は闇王の片手で弾き飛ばされていた。城壁にめりこんだ環はそれでも何事もなかったかのようにそこから抜け出した。

「さすがにやるな。そうこなくちゃこつちも張り合いがないってもんだ」環は手を挑発するようにクイクイと動かした。「突っ立つてないでそつちからこいよ」

「ならそうしてやろう」

瞬時に闇王は環の目の前に現われた。そして手をかざした。

「燃え尽きる」

「バーストオ！」

闇王の手から炎が噴出するのと同時に環のバーストが炸裂した。互いに相殺しあい爆風と熱風が吹き荒れた。しかし2人は止まらない。環が横に跳ぶと闇王は後ろに跳び、連続で火の玉を放った。

「アイスバイト！」

鋭利な氷の牙が次々にファイアボールを貫いて消していく。環は休まず次の魔法を放つ。

「お返しだ！ぶつつけ本番ファイアボール！」

だがそのファイアボールはあっさりと闇王に握りつぶされた。2人の動きが止まり、闇王はつまらなそうに鼻をならした。

「少しはできるようだな、人間」

「それはどうも」

「貴様のことは覚えておいてやろう、無駄なあがきをした人間としてな」

「無駄かどうかはわからないぜ」

「たわごとを」

闇王は腕を一振りした。たちまち環を炎の壁が包み込む。しかし環は落ち着いている。「さすがに派手な魔法だな、バースト！」

爆風で炎を消し飛ばした。はずだったが、炎の壁はすぐにその形を取り戻した。闇王は右手を上げてその手を握った。炎の壁が環を飲み込むように動き出した。

「もっいっちょバーストッ！」

「逃がさん！」

爆風で上に逃れた環に闇王は雷の矢を数本放った。雷の矢が環の体を貫こうという時、両手を前に突き出した。

「プロテクション！」

雷の矢は魔法の盾に阻まれて凄まじい放電と共に消失した。そのまま環は勢いよく地面に墜落気味の着地をした。

「やれやれ、今のはけっこう危なかったぜ」

ゆらりと立ち上がる環を闇王は無言で見据えた。

「貴様、本当に人間か？ そんな戦いかたは見たことがない」

「ま、これは俺だけのやりかただから、あんたが見たことなんてあるわけがないぜ」

「そうか、だがこの私にはおよばない」

「いや、人間の力を見せてやる！」

環は右手を高々とかかげた。

「マイティ！　いくぜ！　バースト！」

爆風と共に闇王に突っ込んでいく環。闇王はその場から動かず、腰を落としてかまえた。環は体内の魔力を全力で集中して拳を叩き込んだ。環の右手と闇王の左手が激突した。衝撃が2人の間に起こった。互角のように見えたが、勢いのついた環を動かずに止めた闇王が明らかに優勢だった。

「まだまだだ！」そして左手を闇王に向かって突き出した。「ぶっつけ本番その2、ライトニング！　ボルトー！」

「甘い」

闇王は右手を突き出し、魔法の障壁を発生させた。環の放った雷の矢はその障壁に受け止められた。

「止めさせるかよ！」

障壁に受け止められた雷の矢にさらに魔力が込められる。輝きと放電が勢いを増していき、障壁に亀裂が走った。

「ちっ」

闇王が飛びのくと障壁が崩壊するのは同時だった。環はそれを

すぐに追いかけた。

「力比べといこうじゃないか」

そしてがっちりと手四つに組み合った。

「貴様は無謀な奴だな」

「そうでもないかもしれないぜ！ うおおおおおおおおお！」

環は魔力を全快にして全力で闇王を押しつぶそうと力を込めた。

2人の魔力が激突して、強力な衝撃波が発生した。大地そのものをきしませるようなパワーのぶつかり合いは両者とも一歩も退かない。

「はあああああああ！」

しかし徐々に環の魔力が増大していく。闇王は徐々に押されていく。

「バアアアアアストオ！」

爆風で闇王は弾き飛ばされ、壁に叩きつけられた。環はさすがに消耗したようで、追い討ちをかけることができず、膝に手を置いてそれを睨みつけた。闇王はゆっくりと立ち上がった。

「なるほど、大したものだ。私も本気を出さねばなるまい」

そして1枚のカードを取り出した。それには禍々しい悪魔が描かれていた。

「今、血の盟約を行使せよ。ダークデーモン！」

闇王の足元に血の渦が広がっていく。闇王はそれに飲み込まれていった。全身が飲み込まれると、血の渦は逆に回転しながら、恐るべき悪魔の頭部がそこから出てきた。それは環の10倍以上の巨大さがあった。

「これは、参ったな」

さすがの環も数歩後ずさった。悪魔はどんどん姿を現し、その異様な姿が明らかになっていった。

血のような皮膚の色に太い尻尾、山羊と人間を混ぜたような禍々しい顔。巨大な戦斧と鎖を持ったその姿は、悪魔という言葉すらかすんで見えるものだった。

「人間よ、恐怖するがいい。貴様に勝利はない」

地の底から響くような声がダークデーモンから発せられた。

「恐怖？ 不思議とそんなものは感じないんだよ。それに、やってみなくちゃわかんないんだろ」

「無駄なことだ！」

ダークデーモンは鎖を環めがけて叩きつけた。環は横に跳んでそれを避けたが、すぐにダークデーモンの足が襲いかかってきた。

「ぐっ」

ただ振り上げただけの蹴りだったが、環はそれをまともにくらって再び城壁に叩きつけられた。こんどは城壁にめりこむどころではなく、一部城壁が崩れた。

「まったく」城壁に埋もれていた環はゆっくりと立ち上がった。「すごい力だよ。正面から殴りあっても勝ち目はないな、これは」

「ならば逃げ出すといい。命が惜しいであろう」

「だけどな、あいにくここを通すわけにはいかないんだよ。それに、こっちにも切り札の1つや2つはある」

環はこんな状況にも関わらず、笑った。

切り札と決着

ダークデーモンと対峙する環は意識を集中し、全身に魔力を行き渡らせた。

「さて、本格的に始めようじゃないか」

「すぐに終わる」

言葉と共に、ダークデーモンは戦斧を薙ぎ払った。

「バースト！」

環は爆発で跳びあがりそれをかわすと同時に、ダークデーモンの顔を蹴り飛ばした。さらにその顔面めがけて手をかざした。

「おまけだ、ファイアボール！」

火の玉がその顔を襲った。ダークデーモンは少しよろめいたが、すぐに体勢を立て直し落下中の環を鎖で打とうとした。

「アイスバイト！」

複数の氷の牙が鎖の軌道を変え、空振りになった。環は着地と同時にすぐにダークデーモンの足元に走りこんだ。

「でかい奴は足元からつてな、バアアアアスト！」

膝の裏あたりに1発バーストを放ち、追撃をかけようとした。だが、そこに尻尾が降ってきてそれをなんとかかわすだけになった。そこに戦斧が振り下ろされ、それを両手をクロスして地面にめりこみながらもなんとか受け止めた。

「ほう、この斧で断ちきれんか」

「ああ、ちよつと心配だったけどな、ぐっ」

さらに戦斧に力がこめられ、環は膝をついた。なんとかもちこたえるのが精一杯だったが、それでもまだ、その表情には余裕があった。

「バーストオ！」

爆発の勢いで横に跳んでなんとか戦斧の圧力から逃れた環は、ダークデーモンから距離をとった。

「どうした？ もう終わりか」

「そう焦るな、これから奥の手を見せてやるよ」

環はダークデーモンに向かって手をかざした。

「アイスバイト！」だが氷の牙は出現せずに、ただ魔力だけが環の手に集中した。「アイスバイト！ アイスバイト！」

今度は魔力が可視化されるほど凝縮された。環は少し苦しそうな表情を浮かべた。そこにダークデーモンの鎖が襲いかかった。それをなんとかかわし、もう一度手をかざした。

「アイスバイト！」さらに凝縮された魔力をおさえるのに苦労している様子だったが、環はにやりと笑った。「くらえ！ 5倍チャージアイスバイト！」

今までにない巨大な氷の牙が出現した。ダークデーモンはそれを戦斧で受け止めた。

「ぐうおおおお」

しかし、弾き返せずそのまま押し込まれはじめた。すぐに環はその足元に走りこんだ。

「バアアアスト！」

そして押される方向とは逆方向にバーストを炸裂させた。上体を押され足元を逆方向にすくわれた格好になった。ダークデーモンは勢いよく頭から倒れた。

「バースト！ 2倍チャージバースト」

環は今までにないほど高く跳びあがり、その顔面めがけて急降下した。

「うまくいくかわからんが」環は全身に魔力をめぐらせ、さっきのチャージと同じ要領でそれを何倍にも増幅した。「さすがにきついが、いくぞおおおお！」

落下の勢いと増幅された魔力による強烈な拳がダークデーモンの顔面に直撃した。凄まじい轟音と土煙が舞い上がり、何も見えなくなった。すぐにその中から環が弾き飛ばされたが、なんとか着地して踏みとどまった。

土煙が晴れてくると、そこには立ち上がったダークデーモンがいた。その顔には環の拳による傷がしっかりと刻まれていた。

「今のは少しは効いたみたいだな」

環は肩で息をしながら再び拳を握り締めた。ダークデーモンは大きく口を開けると、そこから炎を吐き出した。

「プロテクション！」

半円状の魔法の盾が環を中心に出現し、炎を遮った。

「精霊の力よ！ 命の水よ！」

突然のエバンスの声と共に大量の水がその炎に襲いかかり、環に襲いかかる炎を遮った。

「タマキ、下がれ！」

その声に応じて環は後ろに跳んだ。声のしたほうを見ると、城壁にエバンスが剣をかまえて立っていた。その横のカレンが一枚のスペルカードを取り出して、タマキに向かって投げた。

「タマキ様、そのスペルカードを使ってください」

環は足元に落ちたスペルカードを拾った。カードには雷の絵が描かれていた。

「それは雷そのものを操る、ライトニングのカードです。強力すぎるので気をつけて使ってください」

「わかった、ありがたく使わせてもらうよカレン。契約、ライトニング！」

ライトニングのカードが光になり消えるのと同時に、環の体内に今までの魔法とは全く違う魔力の流れが生じた。今までのものが体内の魔力をそのまま魔法に変換するものだとするなら、それは魔力を放出して環境に影響を与え、操るものだと感じられた。

「水よ！」

動き出そうとしたダークデーモンにエバンスが再び水を放ったが、それは簡単に戦斧で退けられた。さらに鎖がエバンスを狙って振り下ろされようとした。

「そうはいくか！ ライトニングボルト！」

環の放った雷の矢によって鎖の軌道はずらされ、鎖はエバンス達から離れた城壁を直撃した。

「2人は下がっててくれ、他の人も城内に！」

「わかった、頼んだぞタマキ！」

エバンス達が城内に入るのを確認してから、環はダークデーモンに向かって笑顔を向けた。

「さて、そろそろ決着をつけようと思うんだけど」

「ずいぶんと自信があるようだな、人間」

「自信ね、それほどあるわけでもないんだけど、まあとりあえずやってみるか」

環は手を空にかかげた。

「ライトニング！」

轟音とともにダークデーモン雷がダークデーモンの持つ戦斧を直撃した。戦斧は手から弾かれ、その足元に落下した。

「加減してこれなら、いける」

環はそうつぶやき、落ちた戦斧に向かって走った。ダークデーモンは戦斧を拾おうと手を伸ばしていた。

「バースト！」

爆発で一気に加速した環はその手に体当たりをして弾いた。そして体をひねりダークデーモンの背中を正面に捉えた。

「ファイアボール！」

火の玉が炸裂しダークデーモンは一步よろめいた。環は地面を削りながら着地した。

「まだまだあ！ バアアアスト！」

今度はダークデーモンの後頭部めがけて跳んだ。しかしそこに鎖が振り向きざまに打ちつけられようとした。

「バースト！」

バーストで跳ぶ軌道をわずかに変えた環はそれをかわして、ダークデーモンの顔面に突っ込んでいった。だがその口が開き、炎が吐き出された。

「プロテクション！」

環は魔法の盾を全身を包むように発生させ炎に突っ込んでいき、そのまま突っ切った。

「甘いぜ！ バースト！ バースト！ 3倍チャージバアアアアアストオオオオ！」

3倍にチャージしたバーストがダークデーモンの頭部に叩き込まれた。ダークデーモンはよろめき、ゆっくりと倒れていった。そのまま環は城壁の前に着地して振り返って片手を空にかざした。

「ライトニング！」環は顔をしかめた。「くそっ、1回チャージだけでもきついな。だけど、やるしかない」

ダークデーモンはすでに起き上がり始めていた。

「ライトニング！ ライトニング！ ぐう、くそ！ ライトニング！」

すでにダークデーモンは立ち上がり、戦斧を拾うと環に近づいてきた。

「ライトニング！」環は片膝をついたが、すぐに立ち上がった。「まだまだ！ ライトニング！ ライトニング！」

真っ向から戦斧が振り下ろされた。環はそれを片手で受けたが、再び片膝をつくことになった。戦斧に力がこめられ、環はさらに押される。だが、ライトニングのチャージは止めない。

「おおおおおお！ ライトニング！ ライトニング！」

押しつぶされそうな環に鎖が振るわれた。しかし、その苦しげな表情にも関わらず、改心の笑みを浮かべた。

「10倍、ライトニイイイイイイ！」

環の絶叫と同時に地面が割れるような轟音が響き、天も割れるような稲妻がダークデーモンを貫いた。

ダークデーモンの動きが止まり、その場に崩れ落ちていった。

目覚めと縁

ダークデーモンが倒されてから2日が経った。環はその間、目覚めることもなく眠り続けていた。ベッドの横にはカレンが座ってその様子を見守っていた。そこに、ドアが開かれエバンスが入ってきた。カレンは立ち上がった頭を下げた。

「タマキの様子はどうか？」

「まだお目覚めになりませんが、心配はないかと思います」

「そうか、あの闇王を打ち倒したのだ。これだけ深く眠るのも当然だろうな」

「はい、ですが、魔力と体力の消耗以外の理由があるような気がします」

「それがなにかはわからないのか？」

「わかりません」

カレンがそう言うと、それに答えるように環の目が開いた。

「ああ、よく寝た」

環は目をこすりながら起き上がった。それから部屋を見回すと、カレンとエバンスを見て意外そうな顔をした。

「あれ、2人とも何やってんの？」

「お目覚めですね。体調はいかがですか？」

「体調ならば अच्छي。ところでどれくらい寝てたのかな」

「2日です。大変ゆっくりとお休みになっていましたよ」

「そんなに寝てたのか。ところで」環は自分の着ているものを確認した。「俺の服は？」

「新しいものがもう出来上がっていますので、これからお持ちします」

カレンは部屋を出て行った。エバンスはそれを見送ってからカレンが座っていた椅子に腰を下ろした。

「タマキ、礼を言わせてもらいたい」

「礼？ ああ、闇王っていうのを倒したことね」

「そうだ。まさかあのような悪魔になるとは思わなかったが」

「確かに、あのダークデーモンっていう化物には驚いたね。あのかい図体が消えたのも驚いたけど」

「魔族というのはそういうものなのだ。もともと闇と混沌から生まれたものだからかもしれない」

「ふーん。そういえば、あの助けてくれた時の水はなんだったのかな」

「あれは精霊の力を借りたものだ」

「あの泉の奴ね。それって誰にでもできんの？」

「いや、精霊の加護を受けた者だけだ。数は極めて少ない」

「少ないっていうと10人もいないとか」

「ああそうだ。私とヨウコ、それとあと6人ほしかいない」

「へえ、少ないな。俺は使えないのかな、それ」

エバンスは首を横に振った。

「生まれた時か、あるいはこちらの世界に召喚された時から決まっているのだ。召喚された時というのは、ヨウコのことです初めてわかったことなのだが」

「そうなんだ。それで話は変わるんだけど、そのミヤザキさんの様子はどうなの？」

「もう目は覚めている」

「そっか」環は立ち上がった。「それじゃあ挨拶に行こう」

そこにちょうどタイミングよく、カレンが服を持って戻ってきた。

「その前に、まずは着替えをしてはいかがでしょう」

環はその服を受け取って一通り確認した。

「すごいな、着てきたやつよりもよくできてるくらいだ。誰が作ったの」

「私です」

「カレンはなんでもできるんだな。それじゃ、着替えてさっさと行こうか」

環はゆっくりとドアを開けて顔だけ突っ込んだ。

「どうもはじめましてっ」と

ベッドの上の upper body を起こしたヨウコは驚いたような顔をして環を見た。

「は、はじめまして」

ヨウコは慌てて頭を下げた。環はそれを見て、笑顔でうなずきながら部屋に入った。

「その服。ということはあなたが高崎環さんですか？」

「そう、改めてはじめまして。高崎環っていいいます」

「私のほうも改めてはじめまして。ミヤザキヨウコです」

「えーっと」環は自分と一緒に召喚されてきた紙とペンを取り出し、自分の名前を書いてからヨウコに渡した。「どんな漢字か書いてもらえますか？」

宮崎葉子。紙には綺麗な字でそう書かれていた。環はそれを見て安心したように息を吐いた。

「やっと名前の書き方がわかった」

「聞いていただければお教えすることもできましたが」

カレンは冷静に言ったが、環はとりあえず聞かなかったことにした。

「それで、さっそくなんだけど、宮崎さんはこっちに来る前は何をやってたんです？ あ、俺は高校生です」

「私は、別に変わったことはない、ただの会社員でした」

「へえ、どんな仕事をしてたんです？」

「IT系の技術職です」

「なるほどなるほど。じゃあ、そろそろこっちでのこの話を始めますか」

環はそう言って椅子を3つ引きずってきて、ベッドの周りに適当に配置した。

「エバンスもカレンも座って。それじゃ、宮崎さん。こっちに来て

からのことを話してもらえますか？」

「はい。私がこの世界に来たのは3ヶ月前になります。理由は環さんと同じで、勇者として、です」

「それで、魔法とかを教えられて、化物連中と戦うことになったと」
「そうです。ただ、私はあまり魔法は使えませんでした」

「そういえば、エバンスの話だと、精霊の加護っていうのを受けてるんですよ」

「はい。最初は何かの声が突然聞こえてきて驚きました。でも、エバンスさんのおかげで精霊の声を聞くようになることができて、精霊の力を借りることができるようになったんです」

「ほー。王子様直々だったんだ。俺は」環はカレンをちらっと見た。
「かなり強引に仕込まれた気がするけど」

「タマキ様は才能がありますから、英才教育です。結果もしっかりしたものではありませんか」

そう言ったカレンは、完璧だけにわざとらしい笑顔を見せた。

「あー、わかった、わかったよ」

2人のやりとりを見て、葉子は少し笑った。

「仲がいいんですね。環さんはこの世界に来てまだ1週間くらいしか経っていないんですよ」

「え、ああ、そういえばそんなもんしか経ってないんだなあ。骸骨が襲ってきたのはこっちに来た当日だったし」

「その時、私を助けてくれたんですね」

「あれはけっこうすごかったなあ」環は笑った。「でもなんであんなことになったんです？」

「それはよく覚えていません。闇王っていう人、じゃなくて魔物と戦った時に私は負けてしまったんです」

それを聞いたエバンスはうつむいて沈痛な表情を浮かべた。

「私が一緒だったらそんなことにはさせなかったのだが」

「まあ過ぎたことだし、結果オーライでいいじゃない。でも、どうやって魔族の仲間になんかされたんだろう」

「それはおそらく、魔族の魂の一部を埋め込まれたのだと思います」
「魂の一部？」

カレンの言葉に環は首をかしげた。

「はい、魔族の魂は混沌と悪意から生まれたものですから、普通の人間がそれを埋め込まれたら、それに飲まれてしまいます」

「それで、ほとんど魔族みたいになってしまふ、ということなわけか」

「そうです。魔力は増大しますし、身体能力も格段に上昇します」
「なるほど、すごい話だ」

環はそう言ってから、葉子とエバンスの顔を交互に見た。

「そんな状況をなんとかしたんだ。すごいね、俺」

「そう、全てタマキのおかげだ。ありがとう」

「本当にありがとうございました」

エバンスと葉子が頭を下げたのを見て、環はとまどったような表情になった。

「まあまあ、そんなかしこまるもんじゃないって。俺は状況に流されてやってただけだし。それにしても2人とも息が合ってるね」

環がそう言うと、エバンスと葉子は目を見合わせて微笑を浮かべた。それを見て立ち上がったカレンは環の肩に手を置いた。

「タマキ様、そろそろ私達は退場しましょう」

「え？　なんで」

「もう少ししたらおわかりになりますよ。さあ、行きましょう」

「ああ、そうするよ。それじゃ2人ともまた後で」

環も立ち上がり、カレンと一緒に部屋から出て行った。残されたエバンスと葉子はそのドアを見た。

「面白い男だな、タマキは。ヨウコの世界にはああいう者がたくさんいるのか？」

「まさか」葉子は首を横に振った。「精霊もずいぶん驚いているみたいでしたけど、あんな不思議な人は見たことがありません」

「そうだな」エバンスは葉子の手をとって微笑んだ。「我らを祝福

してもらったのにあれほどふさわしい人間もいない」

伝説

環とカレンは並んで廊下を歩いていた。

「そういえば飯がまだなんだけど」

「すぐに準備はできますよ。部屋と食堂、どちらでお召し上がりになりますか？」

「せっかくだから食堂に行こう」

環は早足で歩きだした。カレンはそれに遅れることなく確実に後をついていった。

「ところでタマキ様。あのチャージというものについて詳しく教えていただけませんか？」

「ああ、あれ。まあ魔法を発動直前で止めておいて、まとめて使うと威力が上がるんじゃないかと思ってやってみたんだよ。魔法1発に込められる魔力には限界があるみたいだし」

「またずいぶんと非常識なことを考えましたね」

「うまくいったじゃないか、けっこうきついけどね。それより、あのライトニングのカードは何なの？ 普通の魔法とは感じが違ったけど」

「あれはほとんど伝説上の存在で、我が国の建国の英雄が使ったというものです」

「ひょっとして、建国以来誰も契約できなかったってことかな」

「そうです。魔力で環境そのものを急激に変える、というか作り出すというようなとてもない魔法ですからね。タマキ様のような非常識な魔力があつてようやく使えるものです」

「まあ確かに、とてもない威力だった。他にも似たようなものがあつたりする？」

「ありますよ。それよりも食堂に着きましたが、何を召し上がりますか」

「じゃあ、パンとなんか果物でもよろしく」

「はい、少々お待ちください」

カレンは一礼すると食べ物を取りに行った。環は席について辺りを見まわした。食堂にはほとんど他に人はいなかったが、環は注目されているようだった。

「やあどうもみなさん」環はいきなり立ち上がって大声を出した。

「えー、高崎環です。一応勇者というやつです」

「タマキ様、何をしてらっしゃるのですか」

カレンがパンと果物、飲み物を乗せたトレイを持って戻ってきた。

「いや、挨拶でもしておこうと思ってさ」

「そうですか。喉に詰まらせたりしないようにゆっくり召し上がってください」

環はトレイを受け取って、早速パンと果物をかじり始めた。あるていど食べてから、パンをかじりながら口を開いた。

「ところでさ、闇王ってやつはあれで本当に倒せたのかな」

「と、言いますと」

「いやね、確かにダークデーモンとかいうのは倒したけど、ひよつとしたら逃げられたりしたんじゃないかって気がするんだ」

「自分自身を贄にして呼び出したものを倒されたのですから、無事なわけではないのですが、しかし、タマキ様の勘というのは気になりますね」

「そう思うだろ」

「ロレンザ様の意見を聞かせていただいたほうがよさそうですね」

「それじゃ、行こうか」

環はそう言って立ち上がると、りんごのような果物をつかんで、それをかじりながら歩き出した。

「タマキ様、無作法ですよ」

「まあ別にいいじゃない」

環とカレンは祭壇のあるホールに到着した。ロレンザは目を閉じて立っていた。

「ロレンザ様、闇王のことでタマキ様が気になることがあるということなのですが」

「どういうことでしょうか？」

「いや、あの連中が使う召喚術っていうやつのことを詳しく聞かせてもらいたいんだけど」

「魔族達が使う召喚術は贄を捧げて強大な闇の存在を呼ぶものです。キングスケルトンのような比較的あまり強力でない存在は、普通の魔物と変わりません。しかし、力のある者が自分自身を贄とすると、その者自信が変化をするのです」

「つまり、でっかい骸骨は小さいのをダシにして呼び出したもので、生贄にした連中とは別の存在だけど、闇王みたいな奴がやると、召喚というよりは変身しちゃうわけ？」

「その通りです。それで、なにが気になっているのでしょうか」

「いや、生贄っていうのは自分の魂を使うわけでしょ、だったらその魂の一部だけを使って召喚っていうのを完成させることもできるんじゃないのかな。ほら、宮崎さんを魔女にするのに魂の一部を埋め込むって言うてたじゃないか、つまり、魔族っていうのは魂を切り売りできるわけでしょ」

ロレンザは環の意見を聞いて考え込んだ。

「確かにそれは可能かもしれませんが。ですが、いくら闇王でもあれだけの力を持つ存在を呼び出すのに魂の一部だけで済むとは考えられません」

「うーんそういうもんか。それじゃあ、あの闇王以上の奴っていうのはいるのかな？ ダークデーモンなんて化物が存在するんだから、もっと色々なのがいてもおかしくないんじゃないの」

「闇王以上の存在ですか、確かにそれは可能性があります。ただ、魔族のことはあまりわかっていないのです」

「それなら、もっと上の奴がいると考えておいたほうがいいか」

「そうですね。まだ戦いは終わっていないのかもしれない」

「そうなんだよな」環は1人で納得したように首を盾に振った。「

そういうわけだから、あのライトニングと同じ博物館もののスペルカードを見せてもらいたいんだ。もっと強い奴がいるなら間違いなく必要になると思う」

「わかりました。すぐにお持ちします」

ロレンザはホールから出て行った。カレンはそれを見送ってから静かに口を開いた。

「タマキ様はまだ戦いが続くと考えているのですね」

「まあね。あれで終わりだとはどうしても考えられないからさ。準備はしっかりやっておきたいんだ」

「最後まで、そうして戦うつもりですか？」

「乗りかかった船だから」

気楽な感じで首をかしげて環は笑った。カレンはその顔をじっと見て、ふつと息を吐き出した。

「私もその船には最後まで乗せていただきますよ」

「どこに着くかはわからないんだけどねー」

「2人とも、何の話をしていたのです？」

そこに小さな箱を持ったロレンザが戻ってきた。環は笑顔で手を横に振った。

「別に世間話、世間話。それより、その箱が」

「はい」

ロレンザは箱を開けた。中には2枚の古びた感じのするスペルカードが納められていた。

「1枚はメテオストライク、燃える岩を落とす魔法です。そしてもう1枚はブリザードストーム、狭い範囲に猛吹雪を起す魔法です」

「またとんでもない感じの魔法だなこりゃ」

「それでは契約を」

ロレンザが差し出した箱から、環は2枚のカードを手を取った。

「それじゃまずはこつちから、契約、メテオストライク！」

スペルカードが光になり消えていった。

「次はこつちだな、契約、ブリザードストーム！」

同じようにもう1枚のスペルカードも光となって消えた。

「こんだけ強力そうだと、試すわけにもいかないのが欠点だよな」
環は腕を組んでうなつたが、すぐに気を取り直した。「じゃあ、チャージの練習でもしようか」

「闇王に対して使ったという、魔法を限界以上に増幅するものですか？」

「そう、1発に込められる上限が決まってるみたいだから、今はいちいち魔法を寸止めしてその力を溜めてるんだ、1回ずつ溜めてるから10倍で使うなら10回も魔法を使わなきゃならないんだけど、それはちよつときついんだよね。1発使うだけで一気に10倍まで増幅できたりするといいんだけど」

「私の知る限りでは、そのような話は聞いたことはありません。ですが、伝説の中にならば、なにかが見つかるかもしれません」

「さっきの魔法を使えたっていう建国の英雄さんか。その人は俺みたい異世界から来たのかな」

「それはわかりません」

「そうなの？」

「はい。ですが、伝説では初めて異世界から勇者を召喚したのは、その英雄なのです」

「おもしろそうな人なんだ。じゃあ、そっちのことは調べてもらっておいで、後で聞かせてもらうよ。それじゃよろしく」

環の想いとカレンの力

それから数日の間、環はロレンザに話を聞きに行く以外はほとんど自室に閉じこもっていた。

「タマキ様、たまには外に出たほうがよろしいのでは？」

食事を持ってきたカレンはテーブルの上にそれを並べながら言った。環は起き上がるうとはしなかった。

「魔力をもっとうまく使おうと思ってさ。色々試してたんだ」

「魔法の増幅ですか」

「そう、でもなかなかうまくいかないんだよね。まあ全然駄目ってわけでもないんだけど」

「どういうことですか？」

「魔法に込められる魔力には限界があるとしても、ひょっとしたら無理矢理魔力を注ぎ込めばなにか起こるんじゃないかと思ってやってみただけど」

「どうなったのですか」

「3倍くらい魔力を使ってみたら、まあ割くよりは増幅できたかな」

「効率が悪い方法ですね」

「まあ、使えくはないよ、チャージとは違ってこれならすぐに使えるしさ。まあこの方法は魔法の発動を止められないからチャージはできないんだな、最後の1発には使えるけど」

環は起き上がってテーブルに着き、パンをちぎってシチューに浸けて口に放り込んだ。

「それで、今日はどうなさるのですか？」

カレンは水差しからコップに水を注いで差し出した。それを受け取った環は一口飲んでから考え込むように腕を組んだ。

「さて、どうしようか」

その時、ドアがノックされた。カレンがすぐにドアを開け、兵士

と言葉をかわした。カレンはすぐ振り返った。
「タマキ様の勘が当たったようです」

環は城壁に立っていた。

「まだ見えないな」

「ここまで到達するには、あと3日は余裕があるはずだ」隣に立つエバンスは笑ってそれに答えた。「もちろん、黙って待っているつもりはないが」

「軍隊を出すつもりかい」

「そうだ、今出撃の準備をしている」

「敵の正体はわかってるの？」

「魔物の軍勢ということくらいしかわからない。斥候の報告では、数はかなり多いということだ」

「出撃を止めることはできないのかな、俺が1人で行くと思うんだけど」

「1人で行くのか。確かに、そうしたほうがいいのかもしれないな」

「そう、軍隊はここを守るために残しておいたほうがいいよ」

「しかし、本当に1人で大丈夫なのか？ 闇王よりも強大な敵かもしれないんだぞ」

「だから1人で行くんだ。こう言っちゃなんだけど、あんな奴より強いのがいたら、軍隊じゃ相手にならないでしょ」

「残念だが、その通りだ」

「まあ、そんなのがいたら、俺だって1人でどうにかできるかはわからないんだけどさ」

「そうか、それでも行く気なんだな。我々を守るためか？」

「そんなところかな」そう言って環は笑った。「軍隊のほうは頼んだよ」

「わかった。君を信じる。軍は止めるように進言してこよう」エバンスはそう言って城内に戻っていった。「帰ってきてくれよ、タマキ」

「まかせておきなさいって」

環は気楽な様子で手を振ってエバンスを見送った。その横に立っているカレンは、対照的に固い表情だった。

「すぐに出発なさいますか」

「そうするつもりだけど」

「それでは馬車の手配をしてきます。城門前で待っていてください」
「わかった、まかせるよ」

城門前でカレンを待っていた環は、馬車の御者をしているカレンを見て少し驚いた顔をした。

「あれ、カレンが御者やるの？」

「そうですね。野宿もしなくてはいけませんし、タマキ様だけではどこで戦えばいいのかもわかりにならないでしょう」

「それもそうか。じゃあ出発しよう」

環はさっさと馬車に乗り込んだ。そして城壁にいるエバンスと葉子達に向かって手を振った。

「いつてきまーす」

出発してしばらくしてから、環はカレンの隣に移動した。

「どうしました？」

「いや、この町とか色々見ておきたくて。考えてみれば、こっちに来てからあんまり外を見てなかったし」

そう言う環にカレンは笑顔を向けた。

「それではよく見ておいてください。タマキ様が守ろうとしているこの世界を、よく見ておいてください」

「そうだよな、よく見ておきたいな。別に、守るっていうのに理由は要らないんだけど」

「理由もなく命をかけるのですね」

「理由なんて探してたらそんなことはできないよ。できるからやる、それで十分じゃない？ でもまあ、あるならあるで困るものでもないね」

「やはりタマキ様は非常識ですね。」

「ま、そうかもね」

「そうであって、心の底から良かったと思います」

それから2人は黙って馬車に揺られた。町をぬけ道なりに進んで行き、見通しのいい草原に辿り着いた。

「タマキ様が戦うには、こうした場所のほうがいいでしょうね」

「そうだね、ここなら思う存分暴れられる」

「それでは野宿の準備をいたします」

そう言ってカレンは手際よくテントの設営や諸々の準備を始めた。それが終わると再び馬車の御者台に戻った。

「私は城に戻ります。タマキ様、危なくなったら必ず退いてください」

「わかった。まかせておいてくれていいよ」

環が手を振るとカレンは馬車を反転させて城の方向に帰っていった。環はそれを見送ってから辺りの散歩を始めた。

カレンはしばらく進んでから、おもむろに馬車を止めた。

「さきほどから監視をされているようですが、なにかご用でしょうか？」

カレンがそう言うと、馬車の前方の空間が揺らぎ、人間の形をしたものが姿を現した。

「気づいていたか。貴様、何者だ」

「名乗るほどの身分はありません」

そう言ったカレンはいつの間にか右手にダガーを握っていた。

「そんな得物でどうにかできるとでも思っているのか」

「さて、どうでしょうか」

カレンは馬車から飛び降りて魔族の前に立った。そして、ダガーを構えて軽く力を込めると、それを基点に炎がロングソードのような形を作り出した。

「魔法剣だと？ 貴様、本当に何者だ？」

「ですから、名乗るほどの者ではありませんよ」

カレンは一気に間合いを詰めて袈裟切りに炎の剣を振るった。魔族は上空に飛びそれをかわすと火の玉を4発放った。カレンはそれに対して剣にまとわせた炎を飛ばした。その炎は火の玉をかき消し、魔族をも呑み込んだ。

「これで終わりではないと思いますが」

カレンがそう言うと、魔族がその背後に着地した。

「大したものだな、だがこれはどうだ！」

魔族は氷の牙を爪のようにして飛びかかっていった。カレンは再びダガーに力を込めると、今度は氷が剣を形作り、それを振り向きざまに一閃した。剣は魔族の氷の爪を砕き、さらにカレンは左手で魔族の胸を突きをいれて弾き飛ばした。

「そろそろ終わりにさせていただきます」

そう言つてカレンは目を閉じて眼鏡を外した。氷の剣が消え、カレンの雰囲気が変わった。魔族はそれにはかまわずカレンに突っ込んでいった。そしてカレンの目が開かれた。

そこには血のような赤い瞳があった。そして、右手のダガーに力を込めた。

「混沌の力よ」

つぶやくと同時にダガーが全てを吸い込むような深い闇をまとった。そのダガーを振り上げると一気に巨大な闇の大剣が構成された。「まさか！」

魔族の顔が驚愕に染まり、止まろうとしたが、そこに闇の大剣が振り下ろされた。魔族はその闇に呑み込まれ、跡形もなく消え去った。

闇の大剣もすぐに消えた。カレンは目を閉じると、眼鏡をかけてからゆつくりと目を開いた。そこには赤い瞳はなかった。

迎撃戦

テントから這い出した環は朝日に照らされる草原を見渡した。まだ魔物の軍勢は見えなかった。環はカレンが置いていった食料の中から果物を手に取ってかじった。

「化物連中が来るまで、まだ時間はあるのかな」

環は草の上に寝そべて待つことにした。そうして数時間後、遠くに魔物の姿が見えてきた。

環は立ち上がって、魔物達を見て、その位置をよく観察した。そして手を空に向かってかかげた。

「まずは挨拶代わりだな。メテオストライク！」

魔物達の先頭に燃えさかる岩が落ちていった。それが落ちた衝撃と炎で大量の魔物が薙ぎ払われた。それを埋めるようにさらに大量の魔物が出現した。環はそれを見て頭をかいいた。

「それにしても多いな。じゃ、第2弾だ。ブリザードストーム！」

今度は猛吹雪が起こり、大量の魔物が凍らせれたり吹き飛ばされたりした。それから環は魔物達に向かって歩き出した。魔物達のはつきり見えてくると、今回は弓矢で武装しているスケルトンがいるようだった。

「まずはストーンスキン、それとマイティ」

さらに進み、弓の射程距離に入ったようで矢が飛んできた。環は矢を片手で払いながらどんどん近づいていった。そして、軍勢の目の前に到着してから立ち止まった。

「よお、ボスさんいるんだろ、出てこいよ」

魔物達が左右に割れていき、フード付のローブをかぶった人間の形をしたものがその間を歩いてきた。そして、それがフードを取って出てきた顔を見た環は、苦笑いを浮かべた。

「俺の勘が当たったのかな。あんたは倒したと思ったんだけど、逃げられてたんだな」

「逃げた？ 違うな、異世界の勇者よ。貴様が倒したのは我が分身にすぎない」

「まがい物だったっていうのか」

「そうではない。力は小さいがまぎれもない我が力の一部だ」

「あんまり聞きたくない気がするんだけど、力の一部っていうのはどんなもんなのかな」

「5分の1程度だ。まさか人間に倒されるとは思っていなかった」

「あれで5分の1か。冗談だろまったく」環は苦笑いではなく、今度は楽しそうに笑った。「でも、5分の1は倒したんだから、少しは楽になつてゐるわけだ」環は腰を落とした。「バースト！」

爆風で突っ込んでいったが、閻王が手をかざすと、殴りかかろうとしていた環は閻王の目の前で止められた。

「5分の1にも通用しなかった攻撃が通じると思ったか」

閻王の手から衝撃波が放たれ、環は周囲の魔物を派手に巻き込みながら吹っ飛んでいった。閻王はさらに特大の火の玉をそこに放った。それは、狙い通り環の飛ばされた地点に直撃し、大きな爆発を起こした。

「アイスバイト！」

しかし上空から環の声と共に、氷の牙が2発放たれた。閻王は全く動こうとしなかった。しかし、氷の牙は閻王の目の前で粉々に砕け散った。

「こいつはどうだ！ ライトニングボルト！」

立て続けに雷の矢を放ったが、それも同じように閻王の目の前で消え去った。それでも環は落下の勢いを利用して、閻王に蹴りをくらわそうとした。

しかしそれも同じように閻王の目の前で止められた。見えない壁を思い切り蹴ったような感覚があった。環は蹴りの反動を生かして後ろに飛び退き、閻王と再び対峙した。

「魔力の壁だな。それも、とんでもない頑丈さだ」

「そうだ。貴様ら人間の低級な魔法など通用しない」

「それならこいつはどうだ！ ライトニング！」

雷が閻王を直撃したかに見えたが、そのかかげた手から煙が立ち昇るだけで、閻王そのものにはダメージが全くないように見えた。

「ファイアボール！ 2倍チャージファイアボール！」

間髪いれずに放った2倍ファイアボールも同じように片手で受け止め、消された。

「2倍程度じゃ駄目なら、もっとやってやるまでだ！ ってちよつと待て」

しかし、閻王は雷の矢を数10発放った。環はそれをかわすのが精一杯で、魔法をチャージすることができなくなった。それでも、環は笑みを浮かべた。

「いいこと思いついたよ」

そう言った環は、さらに続けて放たれた雷の矢をかわしながら、魔法を使うことを強くイメージした。

魔力が具現化した瞬間、魔法を発動させずにその力を溜めるのが環が行っているチャージというものだった。

そのためには実際に魔法を使って、その発動を無理矢理止めるというようにしていたのだが、環はそれを全て自信の想像の中で実行しようとした。成功すれば実際に魔法を使って力を溜めるよりはるかに早い。

「よし、今度は5倍チャージファイアボールだ！」

イメージでのチャージはぶっつけ本番でうまくいった。さっきのファイアボールよりも明らかに大きく、勢いもあるものが閻王に襲いかかった。

閻王は巨大な氷の牙を出現させ、その火の玉を貫き、消滅させた。環は横に跳びそれをかわした。

「なかなか面白いことをするな、人間」

「そうだろ。あんたに全然かなわないってことはなさそうだ」

「貴様、名はなんという」

「俺は高崎環。覚えておいて損はないぜ」

「タカサキ、タマキ」闇王はそうつぶやき、環の顔を凝視した。「この世界の理の外にある者か」

「なんだそれは？」

「ここで死ぬ貴様には知る必要のないことだ」

闇王の体に、目で見えるほどの魔力がみなぎった。

「あいにく、まだ死ぬつもりはないんだよ」

環も体中に魔力を充実させた。それと同時にイメージでのチャージを始めた。それが終わる前に、闇王が動いた。環に向かって一直線に突っ込み、素早い突きを繰り出してきた。環はかわすことができずに、その突きをもろに胸に受けた。

「ぐお！」

ストーンスキンで強化された環にも、その突きの威力は十分すぎるほどだった。環はなんとか後ろに吹っ飛ぶことでその威力を消したが、闇王はそれを上回るスピードで、今度は脇腹めがけて蹴りを繰り出した。

「がつ！」

なんとか腕を下げてガードしたが、勢いを殺すことはできずにそのまま横に飛ばされ地面を転がった。さらに闇王は跳びあがり上空から踏みつけようと迫った。環は魔力で強化した腕の力だけでなんとか飛び退いてそれをかわした。

「10倍！ブリザードストーム！」

一瞬前に環が倒れていた地面に着地した闇王を凄まじい吹雪が包んだ。

「バースト！」環は爆風で後方に跳びあがり、その吹雪の中心地点に意識を集中した。「これも10倍だ！メテオ！ストラアアアアイク！」

巨大な隕石としか形容のしようがないものが、吹雪の中心地点に落ちた。吹雪も周囲の魔物もほとんど吹き飛ばすほどの凄まじい衝撃と爆風だった。

それが収まってから、環がその爆心地を見ると、そこには人の形

をしたものが傷1つなく立っていた。

「おいおい5割増しだぜ」環は片膝を地面につき、苦笑を浮かべた。
「冗談だろ」

闇王はゆっくりと歩き出し、確実に環に近づいてきた。

「なるほど、我が分身が消された時よりもさらに力をつけたようだな。だが、終わりだ」

「いや、まだだ！」環は立ち上がり、自分を鼓舞するように叫んだ。
「アイスバイト！ ライトニングボルト！ ファイアボール！」

3つの魔法が闇王に向けて放たれた。闇王の足が止まったが、どれもそれに届きはしなかった。環はそのわずかな時間で限界まで魔法のチャージを行った。その負担に、体がぐらつき、両膝をつきそうになった。さらに、全ての魔力を込めた。

「これがありったけだ！ 20倍！ ライトニイイイング！」

雷が閃くのと環が倒れるのは同時だった。闇王のかかげた右手はそれを防ぎることができずに、黒く焦げ、ボロボロになっていた。だが、闇王は倒れていなかった。

闇王はゆっくりと歩き、うつぶせに倒れた環を見下ろした。そしてゆっくりと魔力を込めた左手を上げた。

「終わりだ。理の外にある者よ」

その左手が振り下ろされた。

「それはさせません」

環に振り下ろされるはずだった闇王の左手は、闇の大剣が横薙ぎにされたのに阻まれた。だが闇王は後ろに飛び退き、その左手には、わずかに闇の大剣がかすっただけだった。

「それは、混沌の力」

闇王はわずかな驚きを交え、つぶやいた。カレンは赤い瞳を光らせ、倒れた環の前に立ちはだかった。そして、闇の大剣が消滅すると、今度は同じ闇をローブのように形作り、環と自分自身を包み込んだ。

「それでは、失礼いたします」

闇が2人を包み込み、次の瞬間にはその場所には何もなくなっていた。闇王はそれを見て微笑を浮かべた。ボロボロの右手と切りつけられた左手の傷を交互に見て、その微笑は明らかな笑いになった。「おもしろい」

闇王は辺りを見まわした。魔物は環と闇王の戦いに巻き込まれ、ほとんど残っていないかった。その光景を見て、さらに笑った。

心を支える力

「タマキの様子はどうなのだ」

エバンスはなんとか自制してゆっくり歩きながらも、顔には焦りを浮かべていた。

「まだ意識が戻らないようです」後ろを歩くロレンザは落ち着いた口調だった。「魔力と体力の消耗による衰弱で命に別状はないというのが医者の見立てですが、カレンは違う意見があるようです」

「カレンが？ それはすぐに聞く必要があるな」

エバンスは歩みを速めた。そして、環の部屋の前まで来ると、いきなりドアを開けて中に入った。中にはベッドに寝かされている環と、その側の椅子に座るカレンがいた。カレンは立ち上がり、エバンスに頭を下げた。

「タマキの様子はどうだ」

「危険な状態です」

「医者は命に別状はないと言っているようだが？」

カレンは首を横に振った。

「エバンス様。これは私の推測でしかないことですが、このままではタマキ様が目覚めることはありません」

「どういうことだ。何が問題だというんだ？」

「タマキ様の魔力の源です。それは、精神、心だと思われます」

「心、だと」

「はい。おそらくタマキ様はご自身の心を魔力に変えていたのです」
「なぜ、そう言えるのだ」

「ヨウコ様のことを思い出してください。あの方は戦いには恐怖を抱いていらっやいました。しかし、タマキ様にはそれがありませんでした。そして、ご自分が恐怖を感じなかったことに不審を抱いてらっやいました」

「しかしそれだけでは、そうは言えまい」

「タマキ様のこの世界への適応の早さと動じない態度は、あまりに不自然ではないでしょうか？　おそらくタマキ様にとって一番大きな、守る、という心以外がほとんど魔力に変えられていたからこそ、そうだったのではないのでしょうか」

「たしかにタマキにとって、守るということは重要なことだったようだが」

「そして、ダークデーモンと戦われた後、タマキ様は2日間目を覚ますことがありませんでした。いくら魔力を消耗したとしても、肉体的なダメージはそれほどでもないのに、そのようなことがあるものでしょうか？」

「つまり、その間タマキは失った魔力を取り戻すために、心のほとんどを魔力の回復に使っていたから目覚めなかったというのか。だが、最初の戦いの後ではそのようなことはなかった」

「それは消耗した魔力が少なかったからではないでしょうか。そして、今回の戦いではタマキ様は持てる魔力のほとんどを使っていました」

「本来、タマキの心は回復はするはずだが、魔力が戻らない限りは空ろなままだというのか」

「はい。タマキ様の魔力の容量を考えますと、魔力が回復しきる前に肉体が持ちこたえられなくなってしまいます」

「なんとということだ」　カレンの推測にエバンスは歯をくいしばった。「だが、人間ならば自身が生きる意思というのは根源的なものはずだ。その心だけでもあれば目覚めることも出来るはずだ。だが、タマキの心の根本にあるものは」

「タマキ様にとって、心を占める一番のことは何かを守ること、なのでしょうね」

「そうか」　エバンスは全身から力が抜けたようになり、椅子に座り込んだ。「我々は彼のために何もできないのか？　彼は我々のためにしか行動していないというのに」

その落胆した言葉で、その場は沈黙が支配した。しばらくそのま

まの状態が続いたが、カレンが1歩踏み出して、その沈黙を破った。
「方法は、あります」

ロレンザはその表情を見て、顔色を変えた。

「カレン、まさかあなたの力を使うつもりではないでしょうね。あなたの推測が正しいという保証はないのですよ。それに、使うとしてもどう使うというのですか？」

ロレンザの問いに、カレンは目を閉じてしばらく考え込むようにしてから、おもむろに目を開いた。

「タマキ様に私の魂の一部を渡します。純粋な混沌の力ならばタマキ様の魔力を回復させることもできるはずです」

「そんなことができるというのか」

「できます」

カレンはうなずいたが、ロレンザは首を横に振った。

「あなたは特別なのですよ。普通の人間が純粋な混沌の魂を少しでも得れば、その力に飲み込まれて魔族となるだけでしょう」

「いえ、そうならないための方法ならあります」

「それは、どういうことだ」

「タマキ様に渡す混沌の魂には封印を施しておきます。私だけが力の解放と制御を行えるようにするものです」

「魔力の回復のためだけに力を解放して、あとは封印しておくということなのか。魔力が回復したら魂を取り戻すことはできないのか」

「それはできません。魂を渡したら、それはタマキ様のものになります。それに、タマキ様ならば、混沌の力を使うこともできる気がするのです」

「カレン。そのような憶測は危険です」

「しかし、このまま何もしないではできません」

カレンは珍しく感情的になって声をわずかに荒げた。エバンスとロレンザはその静かな迫力に口をつぐんだ。

「申し訳ありません」カレンは落着きを取り戻し、頭を下げた。

「ですが、私にまかせていただきたいのです」

「わかった」

エバンスは間をおいてから、重々しく首を縦に振った。

「ロレンザ、行くぞ」

部屋には環とカレンの2人だけになった。カレンはベッドの傍らの椅子に座ると、目を閉じてから眼鏡をゆつくりと外した。その目が開けられると、そこには赤い瞳があった。

カレンは環の胸の上に手を置き、そこに意識を集中した。カレンの体から全てを飲み込むような闇が滲みだし、その手に集まっていた。

「混沌の力よ」

その声に応えるように、カレンの手が触れそうなほどの闇に包まれた。1つ大きく息を吐いてから、その闇を一気に環の体内に流し込んだ。しばらくの間は、何も起きたようには見えなかった。

「解き放て」

カレンの声と同時に環の体がわずかに痙攣した。そして、その体をうつすらと闇が包み込み始めた。カレンはよりいっそう意識を集中させた。

環を包んでいた闇がその体に取り込まれた。カレンはそれを確認すると、環の胸に置いていた手をどかし、目を閉じてから眼鏡をかけた。

目が覚め、体を起こした環の目に入ってきたのは、ベッドの傍らで自分を見守っているカレンだった。

「確か俺は戦って、負けたはずだと思ったんだけど」

「はい、その通りです」

「なんでここにこうして寝てるんだろう」

「私がお連れしました」

「カレンはただ者じゃないと思ってたけど、あの闇王って奴の前からよく俺を連れてこられたね」

「私にはちょっとした特技がありまして。けっこう役に立つものな

んですよ」

「へえ、今度見せてもらいたいな。それで、俺はどれくらい寝てた、
というか倒れてたのかな」

「まだ1日ですよ」

「それだけか。正直言つて、もう目が覚めることはないんじゃない
かと思つてたよ」

カレンはその言葉に少し表情を硬くした。

「なんというかさ、倒れた時は消耗したというより、氣力がなくな
つていったんだよ、何も。それこそ目を開けてる氣力すらなくなつ
た」

「タマキ様、それはあなたの魔力に関係があります」

「魔力に？」

「はい。タマキ様は心を魔力に変えているのです。ですから、魔力
が急激に使われると、それを補うために心が使われるのです」

「空っぽになるのか。意思のない体になるってことなのか」

環は自分の両手の掌を見つめた。そして、その両手を握り締めた。
「それならなんで、今こうして起き上がっていられるんだ」

その問いに、カレンは眼鏡を外して環の顔を見つめた。

「私の目を見ていてください」

そう言つて一度目を閉じると、ゆっくりと目を開いていった。環
はそこにある赤い瞳を黙つて見入った。しばらくそうしていてから、
カレンは目を閉じ、眼鏡をかけ直した。

「何が見えましたか？」

「何でも見えたような、何も見えなかったような、不思議な感覚だ
つた」

「タマキ様に見えたのは、純粋な混沌です。全てを飲み込み、全て
を生み出す力です」

「何でそんなものが見えるんだよ」

「それが私の魂だからです。そしてタマキ様、今あなたの中にもそ
れは存在します」

カレンの言葉を聞き、環は自分の胸に手を当てて何かを考えた。そうして、胸から手を放して顔を上げると、カレンの顔をじっと見た。

「そうか、目が覚めたのはそのおかげか。カレンには助けられてばかりなんだな」

「いえ、うまくいく確証などはありませんでした。失敗したら、タマキ様は人間でない存在になっていたかもしれないのです。責められても、感謝されるようなことはしていません」

「その人間でない存在っていうのは」

「魔族です。混沌の力の負の側面、全てを飲み込む力に支配された存在です」

混沌の存在

環はベッドから出て城内を歩いていた。カレンはその後ろに影のようについていた。

「タマキ様、どちらに行かれるのですか」

「まず飯、と言いたいところだけど、ロレンザさんに聞きたいことがあるから、ホールだよ」

ホールの入り口に着くと、ちょうどロレンザが戻ってきたのと鉢合わせした。ロレンザは少し驚いた表情を浮かべた。

「タマキ様、目が覚めたんですね」

「ああ、カレンのおかげで助かったんだよ」

「うまくいったようで安心しました。それで私に何か用でしょうか」
「ああ、そのことだけど、とりあえず中で話そう」

3人はホールの中に入り、適当な椅子に腰を下ろした。

「用っていうのは、まあ聞きたいことがあるんだけど、闇王が俺のことを理の外にあるものとか言ってたんだけど、それってなんなんだろうって思ってたさ」

「理の外にある者、ですか」

ロレンザは何かを思いついたようで、立ち上がって1冊の本を持ってきてそれを開いた。

「理の外にある者。それは我が国の建国の英雄の別名です」

「闇王はそれを知ってるのかな。そうだとすると、なんで俺のことをそんな風に呼んだんだろう」

「わかりません」ロレンザは首を横に振った。「ですが、その英雄は魔族を打ち破ったという伝説があります。それならば、その英雄と同じ魔法を使うタマキ様のことをそう呼ぶのはおかしいことではないと思います」

「ひょっとしたら魔族の連中は、その伝説をこっちよりよく知っていたりするのかな」

「魔族との戦いに関しては、そうかもしれないね」

「でもわかんないな」。なんで今更そんな話を引っ張り出してくるんだろう」

環が頭をひねっていると、エバンスがホールに勢いよく入ってきた。

「タマキ！ もう動けるのか？」

「ああ、大丈夫だよ」

エバンスはそれを聞いても安心できない様子で、タマキの正面に立つと、その両肩をつかんだ。

「本当に何ともないんだな？」

「もちろん。ばっちりだよばっちり」

エバンスはそれを聞いて、息を大きく吐き出した。そして自分も適当な椅子に腰を下ろした。

「ロレンザ、何の話をしていたのだ？」

「闇王がタマキ様を、理の外にある者、と呼んだということです」

「それは、伝説の英雄の呼び名だな。なぜその名を」

「それがわからないんだ」環はそう言っ立ち上がった。「考えてもわかりそうにないから、飯でも食いにいくとしようか」

食事を終えた環は、水を1杯飲んでから正面に座るカレンに向き直った。

「ところで、平和そうだったから聞くの忘れてたけど、闇王はどうなったの」

「タマキ様と闇王の戦いに巻き込まれて魔物はほぼ壊滅してしまいました。闇王も傷ついたため、今回は退いたようです」

「それじゃあ、しばらくは時間があるんだ。あの闇王と戦うための対策を考えないとなあ」

カレンはそれを聞いて眼鏡の位置を少し直した。

「対策ならば、あります」

「それは、どんな？」

「場所を変えましょう」

カレンが立ち上がり、環はそれについて食堂から出て行った。しばらく歩いてから、環は目的地に気づいた。

「そっか、魔法の訓練所に行くんだ」

「はい。今の時間だと誰も使っていないはずですから」

訓練所に到着してみると、カレンの言葉通り、そこには誰もいなかった。カレンは環のほうに向き直った。

「タマキ様の体には、私の魂の一部、純粹な混沌の力が存在しています。今はその力は私が封印しているのですが、封印と言っても完璧ではありません」

カレンはそう言っでどこからダガーを取り出した。

「見ていてください」

カレンがダガーを握る手に少し力を込めると、ダガーを基に炎の剣が出現した。

「へえ、これはすごいな」

「封印していてもこれくらいの力は使えるのです」

「それが俺にもできるっていうこと？」

「はい。ですが、おそらくすぐにはできないはずです。そこで、少々荒っぽいやりかたになるのですが」

カレンは炎の剣を消してダガーをしまい、環に近づいてその手を取り、自分の両手で包んだ。

「ほんの少しだけ、タマキ様の中にある混沌の魂を開放します。違和感を感じたらすぐに言ってください」

「わかった」

環は目を閉じて自分の中に意識を集中した。最初は何も感じられなかったが、すぐに自分が飲み込まれるような強烈な違和感を感じた。

「待った！ ストップ！」

違和感は収まらなかったが、それ以上広がっていくような感覚も止まった。

「タマキ様、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫。しかしこれはすごい、本当にこんな力が使えるのかな」

「使えなければいけません。それでは封印します」

カレンがそう言うのと、環の中の違和感は小さくなっていた。だが、小さくはなってもその存在を感じ取ることはできた。カレンは環の手を放し一歩下がった。

「混沌の力を感じることが出来ますか？」

「ああ、わかるよ。それで、これをどうすればいいの？」

「まずは、想像してください。例えば、さきほどの私の魔法剣のよ
うなものを強く思い描いてください」

「想像か。じゃあ俺が使いたいものは」

「拳ですね」

カレンの言ったことは凶星だったようで、環はにやりと笑ってそれに答えた。

「火傷とかしないよな」

「しようと思えばできますが、そういうイメージしない限りは大丈夫です」

「それなら安心」

環は目を閉じて右手を顔の高さまで上げて、握った。その拳に力が込められてから数秒後、その拳を炎が包み込んでいた。環は目を開けてその光景をじつくりと観察してから、力を抜いて炎を消した。

「はー、これはすごい」

「さすがです」

「非常識だって言うんだろ。でもこれは使えそうだ」

「使える、と言いますと」

「闇王には遠くから魔法を撃つてもほとんど防がれてたんだ。まあ直接突っ込んでいってもだめだったんだけどさ、まあそこはなんとか隙を作って、こいつで殴りつけてやればけっこう効くんじゃないかな」

「そうかもしれませんね。ですがそれだけではなく、他のものも使えなくてはいけません」

「魔法で言ったら、あとは氷と雷。どうせなら両手でやってみるか」
今度は両手の拳を上げた。目を閉じず、軽く力を込めると、右の拳が氷、左の拳が雷をまとった。

「これだけの短時間でここまでできるものなのですね。」

カレンは心の底から感心しているようだった。環は満足げにうなずいて、両手の氷と雷を消した。

「なんかけっこう疲れるね、これは」

「慣れていないせいですよ。今日はこれくらいにして、タマキ様はお休みになるべきだと思いますが」

「わかった、そうするよ」

2人は環の部屋に戻ったが、その前にはエバンスが険しい表情で待っていた。

「タマキ、重要な話がある。カレンも一緒に来てくれ」

エバンスはそう言って部屋のドアを開けて中に入っていた。環も首をかしげながらそれに続いた。

「話っているのは？」

環の問いに、エバンスは透明な石のようなもので出来た、指でつまめる程度の小さなキューブ状のものを取り出した。

「これを見て欲しい」

エバンスがキューブを空中に放り投げると、それは静止し、小さな闇王の幻影が出現した。

「人間の勇者、理の外にある者よ。貴様と決着をつけることにした。時間は3日後、貴様と戦ったあの場所だ。混沌の力を使う女も連れて来い。来なければ、こちらから行く」

闇王の幻影が消滅し、キューブが床に転がった。環はそれを拾い、握りつぶした。

「受けようじゃないか」

「私もご指名を受けたようですから、ご一緒にいたします」

2対1の決闘

ゆっくり進む馬車の中で、環はゆったりと寝そべっていた。カレンはそれとは対照的にきつちりと座って、何か細かいものを作っていた。

「なあ、カレン。ちょっと聞きたいことがあるんだけど？」

「なんでしょうか」

環は寝そべったまま、カレンも手を動かしながらだった。

「カレンの力のことを知ってる人はどれくらいいるの」

「片手で足りすよ」

「少ないなあ。それじゃもう1つ、生まれはこの国？」

「いえ、違うはずです。私は物心ついた時には、ある人と旅をしていましたので」

「そのある人ってというのは？」

「わかりません。それは私の記憶から抜け落ちています。覚えてるのは、誰かと一緒だったということだけです」

「ふーん。じゃあ、その記憶でも探しに行こうか」

「それは探して見つかるものなのでしょうか」

「さあ、どうだろう」

そこで会話は途切れたが、しばらくしてから今度はカレンが口を開いた。

「タマキ様は元の世界に帰りたいとは思わないのですか？」

「元の世界ね。今はここでやることがあるし、それに」環は言葉を切って目をこすった。「段々、元の世界の記憶がぼやけてきてるんだ」

「つらいではありませんか」

「それほどつらいってことはないんだけどさ。それでも、向こうの記憶が全部消えたらどうなるんだろうとは思っね」

「そうですね」

「ま、今そんなことを考えてもしょうがないよ。ところでさ、カレンはその格好で戦うの？ あんまり戦闘向きには見えないけど」

「戦い向きの装備も持ってきていますよ」カレンは自分の足元に置いてあるスニーカーのような皮製のものを手で叩いた。「タマキ様の服装も戦いに向いたものでもないと思います」

「いや、これはけっこういいけるよ。それに一式全部、新しく作ってもらったからさ、気分もいいし完璧だね」

「作ったかいました」

カレンがそう言うと、環は起き上がって大きく伸びをした。

「ちよつと外の空気を吸ってくるよ。その間に着替えておけば？ 着いてからじゃ慌しいしさ」

「では、そうさせていただきます」

環は御者台に移動した。カレンが足元のケースを開けると、そこには地味だが丈夫そうな長袖とズボン、皮製の鎧とブーツ、グローブ、ベルト、ショートソードが納められていた。

「久しぶりですね」

馬車は環と闇王の戦いがあつた場所に到着した。そこには生々しい戦闘の跡が大量に残っていた。御者を務めていたバーンズはその光景を見て嘆息した。

「これは凄まじい」

「確かに、改めて見るとすごいなこれ。ほとんど俺がやったんだよなあ」

「ここを選んだ闇王に感謝しなくてはいいけませんね」

カレンの言葉に環は声を出して笑った。

「それは言えてる」

リラックスした2人の様子にバーンズは安心したような表情を浮かべた。

「一緒に戦いたいところですが、そうしたところでタマキ様やカレン殿の足手まといになるだけでしょう。私は馬車を安全な場所に待

機させておきます」

「はい。帰りもお願いします」

「よろしく」

カレンは頭を下げ、環は手をひらひらと振った。バーンズはそれに対して膝を折って礼をした。

「ご武運を」

バーンズは立ち上がり、馬車に飛び乗って去って行った。それを見送ったカレンは振り返り、空に顔を向けた。

「いつまでそんな高いところから見ているつもりですか？」

「勘のいいことだ」

カレンの声に応えたのは、上空から降下してきた闇王だった。闇王は環とカレンの数歩先に降り立ち、2人をじつくりと観察した。

「何を見てるんだよ。俺は別にな変わったところはどこにもないぜ」
「そのようだな」

闇王は構えは変えなかったが、明らかに雰囲気が変わった。カレンはそれに応じるように腰に下げたショートソードを抜いた。環は両手を下げたまま、全身の力を抜いた。

最初に動いたのはカレンだった。ショートソードに炎をまとわせ、それを上空に向かって振るった。炎が飛び、上空から降ってきた火の玉と激突、消滅した。

カレンはすぐに周囲に注意を向けたが、後方から飛んでくる、人の頭ほどの石に対する対処が遅れた。

「ストーンスキン！」

環がそこに飛び込み、石を拳で粉碎した。

「準備がいいなあ、闇王さんよ」

そう言った環が闇王を見ると、その顔は暗い笑いを浮かべていた。「貴様らの都合のいいようにしてやったのだ。これくらいの挨拶は当然だろう」

そう言った闇王は後方に一気に飛び退くと同時に、氷の牙を6発放った。

「カレン右を頼む！」

「はい！」

2人は同時に前に跳び出した。環は両方の拳に氷をまとわせ、カレンはショートソードに氷をまとわせた。環は2つの氷の牙を殴って砕くと、残りの1つは身をかがめてかわした。カレンはぎりぎりまでひきつけてからショートソードの一振りですぐに次の行動に移った。閻王は防がれるのがわかっていたようにすぐに次の行動に移った。環とカレンに向けて掌を向けて両腕を突き出し、そこから炎を噴出した。

「プロテクション！」

環も両腕を突き出し、魔法の盾でその炎を防いだ。

「俺を跳び越えろ！」

カレンは一瞬の躊躇もせずに環の頭上を飛び越えた。

「バースト！ バースト！」

1発目の爆発が炎に穴を開け、2発目が環を跳び越えたカレンを後押しした。カレンは勢いよく飛び、爆発が作った穴を通り閻王に迫った。

「ハアッ！」

振り上げたショートソードが炎をまとい、凄まじい勢いで閻王に振り下ろされた。しかしそれは閻王が手をかざすと見えない壁に阻まれた。

「まだまだあ！」

しかし、今度は爆風を利用して上空に跳んだ環が、落ちていく勢いと雷を拳に乗せて閻王に突っ込んでいった。その拳も見えない壁に阻まれた、かのように見えた。

「もういっぱあああつ！」

環は逆の拳にも雷をまとわせ、閻王に向かって振るった。甲高い音と共に見えない壁が消失し、拳がもう少しで閻王に届きそうになった。しかし閻王は上空に飛び上がり、それを回避した。

「逃がしません！」

カレンはベルトに挿してある投げナイフを素早く取り出して、それに氷をまとわせると闇王に向かって正確に投げた。さらにショートソードに炎をまとわせ、その炎も飛ばした。

「バースト！」

そのナイフと炎を追うように環が跳んだ。闇王はカレンの攻撃を弾いたが、跳んできた環に対して隙を作ることになった。

「いくぞカレン！」

環は両拳に炎をまとわせ、それを上から闇王に思い切り叩きつけた。それをもろに受けた闇王は勢いよく地上に落下した。下ではカレンがショートソードに雷をまとわせ、闇王の落下に合わせて渾身の力を込めてそれを振るった。確かな手応えと同時に、闇王の体は吹き飛ばされた。落下中の環はその飛ばされた地点をよく見て、手を天にかざした。

「くらえ！ 20倍ライトニイイイング！」

飛ばされた闇王が落ちた地点を、雷が正確に射抜いた。着地した環とカレンはその地点を見据え、油断なく身構えた。

2人の予想通り、煙が立ち昇る場所から闇王はゆっくりと立ち上がった。ダメージを負っているのは明らかだったが、闇王の顔は笑っていた。

「そうか、これが理の外にある者と混沌の力を使う者の力か」

そこで闇王の表情が変わった。その鬼気迫る人間離れた雰囲気、環は思わず息を呑んだ。カレンは射るような視線を向けていた。「我が力の全てを持って貴様らを滅ぼす！」

闇王は両手を広げ、顔を天に向けた。
「ドゥームデーモンよ！ 盟約にしたがい我にその力を！ 破滅と死を！」

晴れていた空に突然暗雲が発生し、日の光が遮られた。そんなかで闇王の周囲だけは不気味な薄い光に包まれていた。カレンは何も言わずにそれに向かって走り出した。

「よせカレン！」

環の静止を聞かずに、カレンは闇王に向かっていったが、それは剣が届くはるか手前で跳ね返された。環は倒れたカレンに駆け寄って闇王を見た。

「なんだよこれは。冗談みたいな力だ」

あまりの力の奔流に環は呆然とした。そうしているうちにも、闇王を包む光は濃くなっていき、その姿を飲み込んでいった。

その光が闇王を完全に飲み込んだ時、光が溢れ環とカレンは思わず目をそらした。そして、再び目を向けると、そこには闇王と大きさは変わらないが、その禍々しさは桁違いになっている存在がいた。

「お前は、何だ」

環の問いに、その存在は心に直接語りかけてくるような低い声を出した。

「我は破滅の運命を司る存在。お前達に審判を下すため、盟約に従いこの者に力を貸す」

環はその言葉を聞いて、立ち上がったカレンに苦笑いを向けた。

「話し合いの余地はなさそうだよ」

心と魂

環とカレンはドゥームデーモンと対峙していた。姿も形も闇王とほとんど変わらないその存在は、それだけでも消耗を覚えるほどの相手だった。カレンはショートソードを握りなおした。

「タマキ様、魔力はどれくらい残っていますか」

「20倍でライトニングとかそっちの魔法が3発くらいは使えそう
だ。でも30倍で2発にしたほうがよさそうだな。それくらいまで
なら、なんとか使える」

「わかりました」

カレンは眼鏡を外して、それをベルトに着いている眼鏡専用ホル
スターとでも言うべき物に納めた。そして目を閉じた。

「なあカレン」

「なんですか？」

「その眼鏡って何かいわくつきの特殊な物なの？ 力を封印すると
かそういう類の」

「いいえ、ただのアクセサリです。まあ、気分の問題でしょうか」

カレンは口元に笑みを浮かべ、目を開いた。赤い瞳がドゥームデ
ーモンをまっすぐ見据えた。

「私が仕掛けます。タマキ様はできるだけ魔力を消費しないように
して好機を待ってください」

「わかった。無理はしないでくれよ」

「はい！」

カレンは返事をすると同時に闇をローブのように形作り、それで
体を包むと瞬時に消えた。次の瞬間には、闇のローブをまとって
いないカレンがドゥームデーモンの背後の上空に現れた。そこから一
気に落下しながら、炎をまとったショートソードを渾身の力で振り
下ろした。

だが、それはドゥームデーモンの指1本に止められた。その指が

軽く動かされるとカレンの体が簡単に弾かれた。しかしカレンはうまく着地するとすぐにショートソードを振るい、まとった炎を飛ばし、それを追うように走った。

ドウムデーモンは右腕の一振りで炎をかき消し、それに続いて袈裟切りに振るわれた氷の剣を左手でつかんで受け止めた。

「どうした？ こんなものではあるまい」

その右腕がカレンに振り下ろされた。

「そうはいくか！」

環が勢いよく突っ込み、ドウムデーモンの後頭部めがけて炎をまとった拳を叩き込もうとした。だが、ショートソードをつかんでいた左手が動き、カレンの体ごと環に叩きつけた。環は拳を止め、なんとかカレンを受け止めたが、その勢いで2人とも後方に飛ばされた。ドウムデーモンは余裕を持っているようで、追撃はしなかった。

カレンはすぐに立ち上がり、環は首を横に振りながらゆっくりと立ち上がった。

「こいつは強いな」

「はい。一気に決めなければ私達が不利です」

「何か奥の手みたいなのはあるのかな」

「2つほどありますが、1つはあまり使いたいのではありません。もう1つもあまり乱発できるようなものではありません」

「でも、出し惜しみもできないな」

2人は改めてドウムデーモンに対峙した。その姿を見て、それは不気味な笑顔のようなものを見せた。

「そつだ、貴様らの全力で来い」

ドウムデーモンは火の玉を1発放った。環とカレンは左右に分かれてそれをかわしたが、火の玉は軌道を変えて環に襲いかかった。「後ろです！」

カレンの警告の声で環は背後の火の玉に気づき、振り向きざまに炎をまとわせた拳をそれに合わせた。

「ぐおっ！」

相殺したように見えたが、衝撃で環の体は後方に吹き飛ばされた。カレンは環をフォローしようと方向転換した。だがその進行方向にドウムデーモンが高速で移動して、道を塞いだ。

カレンはショートソードに雷をまとわせると、その胸に向かって強烈な突きを繰り出した。ドウムデーモンはそれをいなして、カレンの背中に手を向けると、そこから氷の牙を放った。カレンはなんとか振り向くと、ショートソードでそれを受けたが、勢いを殺せずそのまま吹き飛ばされた。ドウムデーモンはさらにカレンに追い討ちをかけようとした。

「5倍！ 連射バージョンライトニングボルト！」

そこに環の声と同時に、5発の雷の矢が飛んできた。ドウムデーモンは魔法の盾を発生させそれを防いだ。

「まだまだ行くぜ！ 2倍バースト！」

爆発を利用して勢いをつけた環は拳に雷をまとわせ、その盾に全力でぶつかった。拳は盾を貫き、一気にひらかれた。

「10倍！ ファイアボール！」

至近距離から火の玉が直撃し、環はその爆風に飛ばされた。すぐに体勢を立て直しドウムデーモンの姿を確認した。多少のダメージはあったようだが、それでもしっかりと立っていた。

「バースト！」環は再び勢いをつけてドウムデーモンに突っ込んだ。「おおおおおおおお！」

右に炎、左に氷をまとわせた拳を連続で振るった。ドウムデーモンはそれを的確に腕で防ぎながら後ろに下がっていった。さらにそこにカレンが側面から雷をまとったショートソードで切りかかっていった。

「なるほど」ドウムデーモンは2人の攻撃を捌きながら語りかけるようにしゃべり始めた。「人間にしておくには惜しい連中だ。それだけの力があるのなら我が眷族にしてやってもいいくらいだが」「黙れ！」

環は叫んで渾身の力を込めた拳をドゥームデーモンの顔に叩き込んだ。さらにカレンのショートソードも振り下ろされた。どちらも防がれたが、その胴体が一瞬空いた。

「10倍！ バアアアアアストオ！」

ドゥームデーモンは強烈な爆発に吹き飛ばされた。環は落下点の目測をつけると、すぐに次の一撃に移る。

「20倍！ メテオ！ ストライク！」

燃えさかる巨大な岩がドゥームデーモンを直撃した。その衝撃波が2人を襲ったが、カレンは闇のローブをまとうと、姿を消し、その落下地点の上空に姿を現した。

「混沌の力よ！」

ローブになつていた闇が消え、ショートソードに新たな闇が集まり、それが大剣となった。落下の勢いを乗せ、カレンはそれを炎に包まれるドゥームデーモンに振り下ろした。

次の瞬間にあつたのは衝撃。そして、カレンの闇の大剣を肩に切りつけられながらも、それを受け止める傷ついたドゥームデーモンの姿だった。

「我が肉体をここまで傷つけるとはな」ドゥームデーモンは闇の大剣をつかむ手に力を込めた。「だがこんなものなどおおおお！」

闇の大剣が握りつぶされ、霧消した。さらにドゥームデーモンはカレンの腕をつかんで、思い切り地面に叩きつけた。

「がっ！」

カレンはうめいたが、それでもショートソードは手放さなかった。ドゥームデーモンはもう一度カレンを叩きつけようとしたが、そこに環が飛び込んできた。炎の拳がその顔面を打ちぬき、ドゥームデーモンは吹き飛ばされカレンを放した。環はそのカレンを抱きとめた。

「カレン大丈夫か！ 5倍ヒーリング！」

カレンの体が柔らかい光に包まれ、息をするのも困難な状態からすぐに回復した。それでも足元がふらつくカレンに、環は肩を貸し

て2人で立ち上がった。その視線の先には、立ち上がるドゥームデーモンの姿があった。

「タマキ様、奥の手というものを使うことになりました」

「奥の手ね、どうするんだ？」

カレンはなんとか1人で立ち、ショートソードを鞘に収めてから、環に自分の左手を差し出した。

「私の手を握ってください。強く」

環は右手でその手を強く握り締めた。

「私はタマキ様に魂を委ねます」

「俺はどうすればいいんだ」

「力の源、心を私に委ねて下さい」

「わかった」

環は力強くうなずいて、ドゥームデーモンを見据えた。そしてカレンの手をさらに力を込めて握った。

「俺の心をカレンに委ねる」

「私の魂をタマキ様に委ねます」

つないだ手を中心に、2人の力が混ざり合った。環にはカレンの混沌の力。カレンには環の魔力。2つの力が混ざり合い、目に見える程の凄まじいエネルギーとなった。

ドゥームデーモンは後ずさり、悲鳴にも似た怒鳴り声をあげた。

「貴様ら、それはなんだ！ そのありえない力はなんだというのだ！」

環は首を横に振った。

「俺にもわからない」

「なにがわからない！ それは、その力は我が力と同じもの、混沌の力のはずだ！」

「いいえ、違います」

今度はカレンが首を横に振った。

「混沌の力は創造と破滅の両面です。あなたの破滅の力は不完全なものにすぎません」

「黙れ！ 破滅の運命を司る我が力以上のものは存在しない！」

ドウムデーモンが手を2人に向けると、そこから稲妻が発せられた。それは2人に直撃したが、瞬時に2人の力に取り込まれた。そして、2人の目の前に巨大な闇の柱が出現した。環の左手とカレンの右手がそれをつかむと、その手から白い光が輝き、闇の柱はその光をまといつていった。

光をまとう闇の巨大な剣は2人の手でかけられた。

「闇に！」

「帰れええええええええええ！」

咆哮と共に剣が振り下ろされた。

「ふざけるなああああああああああああああ！」

ドウムデーモンはそれを受け止めようとしたが、無駄だった。その姿は闇と光に飲み込まれていった。

闇と光の剣が消え、環とカレンは一気に力が抜けたようにその場に膝をついた。ドウムデーモンがいた所には、ぼろぼろになり、消滅寸前の闇王が倒れていた。

環はなんとか立ち上がり闇王の側まで歩いていくと、そこに腰を下ろし、その顔を覗き込んだ。

「俺達の勝ちだな」

「そうだ、貴様達の勝ちだ」闇王は苦しそうにうめきながら無理矢理笑った。「最後に助言をしてやろう。私のほかにも魔族はまだまだいる、せいぜい気をつけることだ」

「ああ、せいぜい気をつけておくよ」

「そしてもう1つだ」闇王は激しく咳き込んだが、それでも言葉を続けた。「私は実験体にすぎん。貴様とその女、せいぜい注意しておくのだな、は、ハハハハハ」

笑いながら、闇王の体は光となって消えていった。環はその光景を見ながらどこか悲しそうだった。カレンは黙って環の肩に手を置いた。

「タマキ様、帰りましょう」

「ああ、そうしよう
環は立ち上がった。

旅立ち

闇王との戦いから半年。環はほとんどの時間を自分の部屋で魔法の研究に費やしていた。公の場に姿を現したのはエバンスと葉子の結婚式くらいなものだった。

「タマキ様、根の詰めすぎはよくありませんよ」

昼食を運んできたカレンは辞書と魔法書を交互に見ている環に声をかけながら、配膳をしていた。

「そりゃわかつてるよ。でも覚えることが多くてさ」環は立ち上がって食卓に着いた。「言葉がわかるのと一緒でなんか知らんが字は読めても、意味まではわからないからなあ」

「それでも」カレンは環の机の上に詰まれた本を見た。「あれだけの量を読まれるというのはかなりのことだと思いますが」

「それでもわからないことは多いけどね」環はパンを一口かじって水で流し込んだ。「特にカレンの力に関するようなことは全然本には載ってないな」

「そうですか」

「そう。あの意外と不便な瞬間移動とか、闇の剣とか。どれだけ本をひっくり返してもでてないね」

「それほど不便ではありませんよ。連続して使えないのと、それほどの長距離は移動できないのと、それと目標の上空にしか出ることができないだけです」

「十分不便だと思うよ。闇の剣だって1回に1振りしかできないわけでしょ」

「一撃必殺というやつです」

「ものは言いようだね」

環は豆のサラダをスプーンですくって口に放り込んだ。

「何よりも不思議なのは、誰がカレンにそれを教えたのかってこと。自分で覚えたわけじゃないんでしょ」

「はい。誰かは思い出せないのですが、私と長く一緒にいた人に、力の使い方と制御の仕方を教えられた記憶があります」

「それだよ、その謎の人物。そいつなら俺の知らないことをたくさん知ってるはずだよ。もちろんカレンの記憶だって取り戻せるだろう」
カレンは少し首をかしげた。

「私の記憶がそれほど重要なものでしょうか」

「重要かどうかは知らないけど、俺は知りたいね」

「知ると言いましても、どうするつもりなのですか？」

「当然、カレンと一緒にいたって奴を探し出すんだよ。それが一番手っ取り早いだろう」

「旅に出るつもりですか」

「旅、いいなあ旅。最近引きこもりすぎだったからちよーどいい」

「しかし、まだ魔族の脅威が去ったとは言いきれません」

「半年も大したことは何もなかったんだから大丈夫だって。雑魚ならあの新婚夫婦にでもまかせりゃいいんだから」

「王がお許しになるかわかりませんが」

「許さなかったらぐれてやる」

「それは困りますね」

「そういうわけだから、早速かけあいに行こうじゃないか」

環はパンをかじりながら立ち上がった。

「旅に出ると、そう申されたか」

人払いをした謁見の間で、環とカレンを前にしてリチャード王は難しい顔をしていた。

「そう。闇王は倒したけど、まだ終わってなんかいない。でも今は魔族もけっこうおとなしくしてるから、連中のことを探るにはちよーどいいと思うんだ」

リチャード王はそれに返事をせずに、うつむいて腕を組んだ。その傍らに立つエバンスが何かを耳打ちした。それを聞いたリチャード王は軽くうなずいた。

「わかった。勇者タマキよ、そなたに魔族の動向を偵察する任務を与えよう。必要な人材や資材があれば遠慮なく申すがよい」

「それじゃ、1つ聞きたいことがあるんだ」環は自分の後ろに立つカレンをちらつと見た。「カレンがここに初めて来た時、一緒だった人がいたと思うんだけど、その人のことを憶えてるようなことはないのかな」

「カレンを連れてきた人物とな？ 確かにそういう人物がいた。必ず役に立つと言われ、その通りにカレンは我が王国にとって実に貴重な働きをしているが」

リチャード王は不思議そうな表情を浮かべて、何かを思い出そうとしているようだった。

「おかしい、それが誰なのか思い出せない。よく知っている人物のはずなのだが」

「やっぱりか」リチャード王の反応を見て環はつぶやいた。「王様、その人物を探すのがこの旅の一番の目的なんだ。何かの手段で人の記憶を封印している、王様とも親しかったカレンの育ての親らしい人物。こいつなら絶対に重要なことを知ってるはずだ」

環の言葉にリチャード王は重々しくうなずいた。

「よくわかった。詳しいことはエバンスと相談するがよい。旅の無事を祈っておるぞ、勇者よ」

リチャード王は立ち上がると、ゆっくりと退室していった。エバンスはそれを見送ると、環に向き直った。

「タマキ、私の部屋に来てくれ」

エバンスが背を向けて歩き出すと、環とカレンもその後について行った。そして、エバンスの部屋に到着し、ドアが開かれた。

「葉子さん、なにその格好」

環の視線の先には、侍女服とは違う、いわゆるメイドさんの格好をして忙しそうに部屋の掃除をしている葉子がいた。

「あら、環君。こんにちは」

「ヨウコ、タマキと大事な話があるんだ、君も一緒に聞いてくれ」

エバンスは別に動じていないようだった。

「カレン、この2人についていつもこんな感じなのか？」

「そういう話は聞きます。別に悪いものではありませんよ」

環とカレンがひそひそ話していると、エバンスと葉子は人数分の椅子を用意していた。

「どうした？ 2人とも、とりあえず座ってくれ」

言われるがまま、2人は椅子に座った。エバンスと葉子はお茶の準備をしてから、椅子に腰を下ろした。

「タマキ、突然旅に出るとは、一体本当の理由は何なのだ？」

「さっき言った通り、カレンをここに連れてきた人を探すのが一番の目的だよ。つまり、カレンの記憶を探しに行くんだ」

「なるほどな。確かに私もカレンを連れてきた人物というのは憶えていない。だが、ただ者でないのは間違いないだろうな」

「そういうこと。そんだけ大した奴なら魔族のことだってよく知ってるだろうし、探して損はないって」

「だが、なにか探す当てはあるのか？」

「それならあるよ。知の都っていう所に行ってみようと思ってるんだ」

「知の都？」

葉子が首をかしげた。エバンスは少し困ったような表情を浮かべた。

「ヨウコ、この間説明したじゃないか。知の都エルドウェス共和国、最大の図書館を持つ、知の中心と言っている国だ」

「そう、だからそこに行けば何かわかるかもしれない。だから紹介状か何か書いてもらいたいんだよ」

「そうか。紹介状ならいくらでも書くが、2人だけで行くつもりか？」

「ああ、そうだよ。大人数で行く気はないからさ」

「タマキとカレンならば何も心配いらないだろうな」

「そうそう。年上がおすすすめよ環君」

「その通りだな」

エバンスと葉子は見つめ合った。環は頭をかいてカレンに小声で話しかけた。

「どうすんだよこの2人」

「あまり邪魔をするのもよくありませんね。準備もありますから、私達は早く失礼しましょう」

「言えてる」

翌日の早朝、城の裏の城門前。いつも通りの制服にマントで全身を包んだ環と、闇王と戦った時の装備を身に着けたカレン、それと荷馬車が1台、見送りはエバンスと葉子とバーンスだけだった。

「2人だけで本当に大丈夫か？」

「平気平気。仰々しくしたくないしさ」

エバンスの問いに環は軽い調子で答えながら、バーンスから受け取った荷物を荷馬車に積み込んでいった。そのうち剣を渡されたが、環は首を横に振った。

「俺は武器は要らないよ」

「しかし、魔法が使えないような状況もあるかもしれないぞ。特にタマキの魔法は威力がありすぎるだろう」

「ところがそうでもない。ミニミニファイアボール」

環はにやりと笑って人差し指を立てた。その指の先に爪ほどのサイズの火の玉が現われた。

「受け止めて、ちよつと熱いけど」

指をエバンスに向けると、火の玉がゆっくりと飛んでいった。エバンスはそれを手で受けた。火の玉は軽く弾けて消えてしまった。

「これは驚いた。ここまで加減できるものなのか」

「ま、1発なら火傷すらしないし、屋内でも安心して使えるよ。でも100発も撃てばこれでもけっこう威力があるんだ。この半年の研究成果だよ」

「武器のことは要らない心配だったな。荷物はこれで全部なのか？」

「はい。必要なものは積み込みました」

カレンはそう言って御者台に上った。環は荷台に乗り込んで、3人に手を振った。

「それじゃ、行つてきます」

「ちよつと待つて」

葉子が荷馬車に駆け寄つて、何かを環に差し出した。それは2つの同じ形をしたアミュレットだった。

「これは？」

「精霊の力を借りて私が作ったの。環君とカレンの旅の無事を祈つてね」

「そうなんだ。ありがとう」

環はアミュレットを受け取つて、さつそくそれを着けた。カレンも葉子の手からアミュレットを受け取ると、同じように着けた。

「ありがとうございます。これほど心強いお守りは他にありません」

カレンは笑顔でそう言つと、静かに荷馬車を出発させた。

出会い

出発してから2日経った。道中は平和で、特に何事もなかった。ちょうど昼食時になったので、カレンは馬車を止めた。

「そろそろ昼食にしましょう」

「あれ、もうそんな時間だった」

環はそう言って昼食用の道具と材料を持って荷台から飛び降りた。適当な場所を見つけてその荷物を降ろした。カレンは馬を少し離れたところにある木に結わえつけると、環のほうに歩いていったが、途中で何かを感じて森のほうを見た。

「どうしたの」

「何か聞こえませんか」

「何か？」環は立ち上がってカレンのしている方向に目を凝らした。

「俺には何も、いや、聞こえるな」

「戦いの音のように聞こえますね」

「行ってみようか」

「いえ、少し様子を見ましょう。どうやらこちらに近づいてきているようです」

しばらく様子を見てみると、戦いの音はどんどん近くなってきた。そして、森から2人の人影が飛び出してきた。

「姉さんのバカヤロー！なにが森に入って軽く魔物退治でもしようだよ」

「あんなに出てくるなんてわかるわけないでしょ！」

環達のいる道と森はそれなりに離れていたが、それでも聞こえてくるほどの大声で2人は言い争っていた。その後ろからは魔物が数十体続いていた。

「なんだあれ」

「見たところ、1人は剣士、もう1人は魔法使いでしょうか。おおかた魔物を狩っていて深入りしすぎたのだと思います。どうします

か？」

「そりやもちろん助けるさ」環は1歩森のほうに踏み出した。「まずは足止めだ。ミニミニアイスバイト、1000発くらい」

環の頭上に小さな氷の牙が大量に出現した。手を上げて、走ってくる2人に向かって大声を出した。

「お前ら、伏せろ！」

2人は声に反応してとつさに伏せた。それと同時に環が手を振り下ろし、大量の小さな氷の牙が飛んでいった。それは伏せた2人の頭上を通り過ぎ、魔物達に降り注ぎ、その足を止めた。

「カレンつかまれ、一気に跳ぶぞ！ ストーンスキン！ バースト！」

環とそれにつかまったカレンは伏せている2人と魔物達の間一気に跳んだ。魔物達はミニミニアイスバイトで多少傷ついているようだったが、致命的な傷は負っていなかった。

「これってピットデーモンとオーガだっけ？」

「はい、オーガが3体もいますね」

「どうしようか」

「ピットデーモンのほうはタマキ様におまかせします。私はオーガを」

「わかった」

環はそう言つて、ゆっくりとピットデーモンが密集しているところに歩いていった。ピットデーモンが飛び掛つてくると、手当たり次第に殴る蹴るで吹き飛ばし始めた。

カレンはショートソードを抜き放ち、オーガ3体と対峙した。まず一番近くにいるオーガに向かって、カレンはベルトからナイフを抜いて投げつけた。ナイフはオーガの目に刺さり、その動きが止まった。カレンは素早く走り、その喉のあたりをショートソードで一閃した。

オーガは声も出せずにうつぶせに倒れた。後方のオーガはそれにかまわず左右から2体同時にカレンに突進してきた。カレンはシヨ

ートソードに雷をまとわせると、左のオーガにそれを飛ばした。それからすぐにショートソードに氷をまとわせ、長い氷の剣を作り上げると、右のオーガの振るった腕をかくぐり、その胸元を深々と貫いた。そして、剣を抜き倒れるオーガから離れ、雷で倒れたオーガに近づき止めを刺した。

環のほうは、ピットデーモンを殴ったり蹴ったりしながら、それを1つの場所に集めていた。

「こんなもんでいいか、ライトニング！」

環が手を振り下ろすと、雷がまとめられたピットデーモン達を撃ち抜いた。集められたピットデーモンは全て灰になって消えた。それでも少数残っていたピットデーモンが環に左右から襲いかかったが、環は落ち着いて手を左右に広げた。

「バースト！」

両手からの爆発で残ったピットデーモンも吹き飛ばされた。背後の2人は呆然としてその戦いを見ていた。

「これで全部かな」

「そうですね」

環とカレンはまだ立ち上がれない2人に視線を移した。

「おい、大丈夫かい」

2人はその呼びかけに何かのスイッチが入ったかのように立ち上がった。

「あ、あの、助けていただいてありがとうございます」

剣士風の少女は勢いよく頭を下げた。そして隣をちらつと見ると、突っ立っている魔法使い風の少年の頭を無理矢理下げさせた。

「あー、2人とも怪我はないの？」

環がそう聞くと頭を下げたのと同じくらいの勢いで少女は頭を上げた。少年の頭も上げさせた。

「いえ、大丈夫です、全然大丈夫です」

「そっか、それならいいけど。ああ、そういえばまだ名乗ってなかったか、俺は環、でこっちがカレン」

「タ、タマキさんにカレンさんですね。私はミラといいます」

「僕はソラです。よろしく願いします」

「そういえばさっき姉さんとか言ってたけど、姉弟？」

「はい私が姉でこっちが不肖の弟ですよろしく願いします」

比較的落ち着いているソラと比べると、ミラは落ち着きがなかった。カレンは落ち着いているソラに声をかけた。

「あなた達の荷物はどうしたんですか？」

「荷物！ そうだ荷物！ ソラ、見に行くよ！」

ミラはソラの腕をつかんで駆け出した。環はその後姿を見ながらなんとなく笑みを浮かべた。

「なかなか面白い姉弟じゃないか」

「はい、妙な2人組みですね。見たところ姉のほうはレザースーツを装備していますが、あれは要所に鋼のプレートが入ってますね。上等なものです。剣もただの剣ではないですね。弟のほうの服も上等なようですし、ローブには何か魔法がかけられている感じがしました。杖もそうですね」

「よく見てるね。それで、どうしようか、行っちゃったけどあの姉弟」

「戻ってくると思いますよ。昼食にして待ちましょう」

「それがいいか」

2人は荷馬車の場所まで戻って、昼食の準備を再開した。そして鍋の中のシチューがいい匂いを出し始めた頃、ミラとソラがぐくりして戻ってきた。

「ああ、戻ってきたか。荷物はどうだったの？」

「それが、動物に荒らされたみたいで」ソラはぼろぼろになった袋をよく見えるように持ち上げた。「食料もお金もほとんどなくなっていました」

ミラとソラはぐっくりとうなだれた。カレンはその様子を見て、器とスプーンを取り出すと、シチューをよそって2人に差し出した。「とりあえず食べて落ち着きましょうか」

ミラはうなだれたまま黙って器を受け取ると、一心不乱に食べ始めた。ソラのほうは多少遠慮しながら シチューを口に運んだ。環とカレンは自分達もシチューを食べながら2人の様子を見ていた。それからしばらくして、シチューを食べ終わった2人はだいぶ落ち着いたようだった。

「落ち着きましたか？」

カレンがそう聞くと、2人とも首を縦に振った。

「それでは事情を話してもらえますか？ 話したくなければそれでもかまいませんが」

「はい、私達は家の事情で修行の旅をしているんです。家のことはわけあって明かせないのですが、決して怪しいものではありません」
ミラはだいぶ落ち着いたようで、しっかりした口調だった。

「修行の旅ね。じゃあ森で魔物と戦ってたのもそういうわけなのか」
「そうです！ 世のため人のため私達のためです！」

ぐつと拳を握って、ミラは力強く宣言した。

「姉さん、あんまりきまってるないよ、それ」

ソラは冷静な一言を発した。カレンは眼鏡の位置を直してから、2人の顔を交互に見て口を開いた。

「修行の旅ということですが、どこか目的地はあるのですか？」

「いえ、特に目的地は決めてません」

「そうです、私達が探しているのは場所ではなく人なのです」

「人って？」

環の問いにミラは胸を張った。

「もちろん師匠です」

2人は目を輝かせて環とカレンを見つめた。

師弟？

師匠という話はとりあえず保留にしておいて、4人に増えた一行は最寄の町を目指していた。環はカレンの隣に座って、荷台で何かを話している姉弟をちらつと見た。

「タマキ様、あの2人をどうするつもりですか」

小声でのカレンの問いに、環は空を見上げた。

「師匠なんて言われてもなあ。まあけっこう面白そうではあるけどね。そこらへんに置いて行くわけにもいかないし、町に着いてから考えればいいんじゃない」

「私としては、2人の力を見たいですね。見所があるのなら、連れて行くのもいいと思います」

「かなわないと思って逃げるあたりはいいんじゃないかな」

「そうですね」

カレンがうなずくと、後ろからミラが顔を突き出してきた。

「なんのお話をしてるんですか？」

「ああ、次の町で補給しておく物の相談だよ」

環は適当にごまかした。

「あの、それで私達の弟子入りのことは、どうでしょうか？」

「それはさっきも言ったけど保留」

「そんなこと言わずにお願いします！ お2人ほど強い方は見たことがないんです！」

「そうですね、剣も魔法も次元が違います！ ぜひ僕達を弟子にして下さい！」

「わかったわかった」勢いよくせまるミラとソラに環は若干引き気味になった。「その件は町に着いてからゆっくりと話し合おうか」

「雑用でもなんでもしますから」

「そうですね、不肖の弟ですがこき使ってやってください」

「姉さんもだよ」

「私のぶんまで弟が働きます」

「それなら今晚は働いてもらいますよ。町に着くのは明日ですから」
カレンはそれだけ言った。

「そうそう、2人とも今はゆっくりしておきなよ」

環がそう言うのと、2人はおとなしく荷台のほうに戻っていった。

そして夕方、夕食の用意は環とカレンがやっていたが、テントの設営等はミラ、ソラの姉弟がやっていた。

「真面目にやってるな」

2人の様子を横目で見ながら、環はカレンに小声で言った。カレンも2人の様子を見て、渋い顔はしていなかった。

「野宿の経験はあるようですし、手際もそれなりですね」

カレンの言う通り、ミラとソラはそれなりにしっかりと働いていた。2つのテントを設営し終えた2人は、環達のほうに走ってきた。

「テントはばっちりです。ほかにやることはありませんか？」

「そうですね、この周りでも見てきてもらえますか。地形や危険がありそうな場所をよく見ておいってください」

「はい、わかりました！」

ミラは元気よく答えてソラを引っばっていった。カレンはその背中を一瞥して、夕食の準備を続けた。

「しかしあの2人、育ちはよさそうに見えるし、間違っても悪人には見えないよな」

「私も同感です」

「旅の道連れとしては悪くないかもね。賑やかだし」

翌日、一行はそれなりの規模の町に到着した。カレンは荷馬車と大きな荷物を厩舎に預けた。

「人がいるところは3日ぶりか。なんか久しぶりな気がするなあ」
環は町を体を伸ばしながら町を見渡した。小規模ではあるが、それなりに活気のある様子の町だった。

「で、カレン、これからどうするの」

「まず宿を確保しましょう。その後は必要な物の買出しですね」

「わかった。お前達は どうする？」

「それはもち！ うぐ！」

環の問いにミラが勢いよく答えようとしたが、ソラがそれを押さえた。

「僕達はお金もほとんどないので、できれば一緒にさせてもらいたいのですが」

「ああ、いいよ」

そうしてたどり着いたのは宿兼酒場兼食堂というような場所だった。カレンがこの主のような中年の女のところに行っている間、環達は適当に座って待っていた。すぐにカレンが戻ってきた。

「部屋は借りられました。上の2部屋です」

そう言ってカレンは鍵の1つをミラに差し出した。

「あなた達の部屋の鍵です、しっかり管理しておいてください」

「は、はい。必ず守り抜きます！」

「いや、それほどでもないって」

環の一言はミラには聞こえなかったようで、その気合は少しもおとろえなかった。ソラは特に何も言おうとしなかった。

「荷物を部屋に置いてから買出しに行きましょう」

カレンは特にそれを気にすることもなく、自分の手荷物を持って階段に向かった。環達もすぐにその後を追った。

そして、買出しのため市場に来たのだが、そこでは環が妙に生き生きとする事態に遭遇した。

「この剣は俺が先に目をつけといたんだ」

「高い値段をつけたこっちのものに決まってるじゃないか」

2人の傭兵風の男が武器商人の軒先で1本の剣をめぐって争っていた。環はそこにどんどん近づいて行って2人の間に割って入った。

「はいはい、待った待った」

いきなり割って入ってきた環に、2人の男は思わず争いを止めた。環はいきなり争いの元になっている剣をつかんだ。

「この剣をどっちが買うのかでもめてるわけだ」

「おい、あんた何を」

「1つ提案があるんだけどな。この剣の持主を決めるいい方法」

「いい方法だと？」

「実力があるほうが使えばいいじゃないか。その方法はこのミニミニアイスバイト」環はそう言って頭上に大量の小さな氷の牙を出現させた。「こいつを多く落とせたほうが買えるってことでどうかな」

傭兵風の男2人はその光景を見て驚いていたが、すぐに気を取り直して面白そうに笑った。

「それはいい。あんたもそれでいいだろ」

「ああ、面白そうだ」

「決まりだな。おっさん、それでいいよな」

環が武器商人にそう聞くと、商人は疲れた様子で首を縦に振った。

「早く決めてくれるんならどっちでもいいですよ」

「よし、決まりだな。場所を変えよう」

町の広場には人ばかりができていた。

「はいはい、危ないからそっち側には立たないようにね」

環は傭兵2人を適当な位置に立たせると、見物人を危険がないように誘導した。それから自分も適当な位置まで歩いてから傭兵達のほうに振り向いた。

「なんか人数が多いな」

傭兵2人に加えて、なぜかミラとソラも混じっていた。

「剣は欲しくないんですけど、私達の実力を見てもらいたいです」ミラの言葉にソラは無言でうなずいた。傭兵達は変なものを見る目で2人を見たが、環は特に気にする様子もなかった。

「まあいいか。それじゃ順番に始めよう。10発を連続で撃つから、一番多く落とした人が勝ちだ」

環はまず一番左の傭兵に指を向けた。

「始めよう」

まず1人目は5発を剣で打ち落とした。2人目は4発。そしてミラの順番になった。

「よろしく願います」

頭を下げると剣の柄に手をかけて息を整えた。そして一気に剣を抜くと、それは淡い光をまとっていた。

1発、2発、3発と鋭い動きで順調に氷の牙を打ち落としていく。4発、5発、6発、7発と続けて打ち落とし、8発目に剣を振り下ろそうとした時、剣がまとっていた淡い光が突然消えた。

「あれ？」

ミラは間の抜けた声を出して、動きが鈍くなった。その鼻っ柱にミニミニアイスバイトが直撃した。鼻を押さえてうずくまったところに、さらに2発の氷の牙が迫り、見事に額に連続で命中した。

「イタタタタタ」

「残念、7発だな。それじゃ次だ」

環はうずくまるミラを放っておいて、ソラに指を向けた。

「いつでもどうぞ」

杖をかまえたソラに向かって氷の牙が放たれた。だが、ソラは杖を振るう様子を見せずに、それを両手で持ち、地面にしっかりと固定した。

「風よ！」

その声と共にソラの前につむじ風が巻き起こり、氷の牙は7発そろされたが、突然風が消え、残りは見事に命中した。

「イテテテテテ」

ソラもミラと同じような結果になった。

「0発ですね」

カレンがそう言うと同時に、しまらない結果に見物人はどんどん去って行った。傭兵達もいたたまれなくなったようで、結局剣は買わずにどこかに行ってしまった。武器商人はとくに店に戻っていた。

「タマキ様」誰もいなくなってからカレンは口を開いた。「この2

人を連れて行くのも悪い考えではないと思います」「
「そうだね。面白そうだし、一緒に旅をすることにしようか」

都へ

荷馬車に揺られながら、環はミラとソラに話を聞いていた。

「ミラの剣は聖剣ってやつなんだ」

「はい。選ばれた者しか使えない由緒正しい剣なんです」

「その力が町でやってみせた剣が光るアレか」

「そうです、あの力を使うと古今無双の剣豪達に肩を並べるほどの力が発揮できるんです」

「でもまだうまく使えないと」

「はい、恥ずかしながら」

ミラはうつむいてため息をついた。環は今度はソラのほうに顔を向けた。

「で、ソラは風の精霊の力を使えるわけだ」

「いえ、僕は火の精霊の力も使えるんです」

「それは珍しいですね。2種類の精霊から加護を受けているというのは初めて見ます」

カレンは前を見たまま口を挟んだ。ソラは少しうつむいた。

「はい、そうなんですけど。僕はまだ一度にどちらか片方の力しか使えないんです」

「だからあの時は風の力だけだったのか。で、やっぱり片方だけでも、まだうまく使えないと」

「はい、まだまだ未熟です」

「なるほどね。才能は抜群てやつだ」

「そんなタマキ師匠、おだてないでくださいよ」

「そう言われると恥ずかしいです」

盛り上がるミラとソラだった。

「今はまだまだですけどね」

カレンの一言ですぐに盛り下がった。ミラとソラは少しがっくりしたようだったが、すぐに顔を上げた。

「でも僕達の力はあんなものじゃありません」

「そうです、もつとちゃんと見てもらいたいです」

「それでは、見せてもらいましょう」カレンはそう言って馬車を止めた。「少し早いですが、昼食の準備もありますからね」

御者台から降りたカレンは、道から離れた場所まで馬を引つ張つていき、杭を地面に打って馬をそこに結わえた。環達も必要な荷物を持って荷台から降りた。

「カレン、こっちは俺がやっておくから、2人のほうはまかせるよ」環は食料や調理道具を下ろしながらそう言った。カレンはうなずいてミラとソラに歩み寄った。

「では、少し離れた場所で始めましょうか」

「はい、わかりました」

ミラとソラは声を揃えて気合をいれると、カレンについて行った。カレンは適当な場所まで歩くと、振り返ってショートソードを抜いた。

「まずはミラ、あなたからです。自由に打ち込んできてください」

「は、はい」

ミラは1歩踏み出して剣を抜いた。そして、上段から一気にカレンに斬りかかっていった。カレンは足と上体を少しだけ動かしてそれをかわすと、振り下ろされた剣を自分のショートソードで上から押さえつけた。

「本気できてください」

カレンはそう言うってからミラの剣を自由にすると、数歩後ろに下がった。ミラは剣を構えなおすと、息をゆっくりと吐いた。その手の中の剣が淡い光を發した。

「いきます！」

声と同時にミラは一気にカレンとの間合いを詰め、袈裟切りに剣を振るった。カレンはそれを簡単に避けたが、すぐに逆袈裟の剣が襲いかかった。だが、それも後ろに跳んでかわした。

「踏み込みが甘いですね」

カレンはそう言つて、さらに振るわれる剣を避けたり、ショートソードで受け流したりしていた。ミラはそれに答える余裕はなく、必死に剣を振るつた。だが、それもカレンには全く届かなかった。「やあああああ！」

ミラは気合と共に上段から渾身の力を込めて打ちかかったが、途中で剣の光が消え、動きが鈍つた。カレンは横にかわすと、足をかけてミラを転ばせた。ミラはもろに顔面から地面に突っ込み、しばらくしてからやっと立ち上がった。

「イタタ、ひどいですよカレン師匠」

「その剣の力は悪くありませんが、不安定ですね。それに力が消えた瞬間に動きが鈍くなりすぎですよ。実際の戦いでは命取りになります。剣の力を安定して使えるようになるのも重要ですが、元の実力もしっかり上げる必要がありますね。それができれば大きな力になりますよ」

「がんばります！」

「次はソラ、あなたの番です。精霊の力でも魔法でも好きなほうできてください」

「わかりました」

ソラは杖を両手でしっかりと握り、地面に突き立てた。

「風よ！」

声と共に、強烈な疾風がカレンに襲いかかった。だがカレンは落ち着いてその疾風の規模を見極め、その線上から身をかわした。

「まだまだ！ 風よ切り裂け！」

今度は凝縮された風が刃のようになってカレンに向かって来た。だがカレンは今度は避けようとせず、正面からそれをショートソードで両断した。風の刃は真つ二つになり、カレンの背後にばらばらに着弾した。

「そこで休まず攻撃ですよ」

カレンはそう言いながら駆け出し、ソラとの間合いを一気に詰めた。ソラは少しあわてたような表情を見せた。

「風、じゃなくて火よ！」

ソラは目の前に炎の壁を出現させたかったのだが、あわてたせいか、それはせいぜい焚き火程度になってしまった。そうしているうちにカレンはどんどん迫ってきた。

「か、風よ！　ってうわぁ！」

ソラは自分を風で横に吹き飛ばしてしまった。杖を手放して地面に転がったソラは顔面を打ったのか、しばらくうずくまっていた。

「あれくらいで失敗してしまっただけじゃないよ」

カレンはショートソードを収めてからソラの手をつかんで立ち上がらせた。

「それに、風と火の精霊の力を同時に使えるようになるべきですね。愛称がいい組み合わせですし、うまく使えばそれも大きな力になります」

「はい、がんばります」

「それでは戻りましょうか」

3人は環のいるところまで戻った。環はちょうど材料を入れた鍋を火にかけてたところだった。

「ああ、戻ったんだ。それで、どうだった？」

「2人とも課題はありますが、潜在的な力は大きいですね。それから、ミラは私が教えられますが、ソラはタマキ様が教えたほうがいいと思います」

「でも、俺は精霊の力なんて使えないけど」

「魔力の制御と似ているという話ですから、大丈夫ですよ」

「なるほど。それより、みんな立ってないで座りなよ」

3人は適当な場所に腰を下ろした。それから、ミラがおもむろに口を開いた。

「あの、師匠達はどこに向かっているんでしょうか？」

「あれ、言っただけだったっけ」

「言ってますよ。どうしますか」

「どうって、別に言っても何の不都合もないよね」

「はい」

それを聞いたミラは身を乗り出した。

「それで、目的地はどこなんでしょうか」

「エルドウネス共和国の首都だよ」

「知の都ですか！」

ソラが興奮した様子で乗り出してきた。ミラはいまいちピンとこない様子だった。

「ソラ、そんなに興奮すること？」

「姉さん、世界最大の図書館を有すると言われる知の都だよ。誰でも閲覧を許されるわけじゃない、僕達だけじゃまず入れないよ」

「そんなすごいところなの？ でも、師匠達は入れるんですか？」

「問題ないよ。まあコネってやつで」

「コ、コネ？ すごいんですね師匠は」

「すごいのかな？ カレン」

「よくあることではありませんね」

その会話にソラはしばらく呆然としていたが、だんだん喜びが湧き出てきたようだった。

「やった！ 図書館、まさかあの図書館に入れることになるなんて今にも踊りだしそうなくらい喜んでいるソラだったが、ミラはそれをなにか理解できないもののように見ていた。

「そうかそうか、それはよかった」

環は楽しそうにそう言っているだけで、カレンは鍋の様子をしっかりと見ていた。

知の都

一行は知の都と呼ばれるエルドゥネス共和国の首都に到着した。城下町には本屋が並び、その城はほぼ全てが図書館という実に変わったところだった。

「なんかすごいところだね、ここ」

環はそう言いながら、店を構えたものから露店まで、様々な本屋が並び通りを歩いていて。ミラはあまり興味がなさそうだったが、ソラは興奮して店から店へ渡り歩いていた。

「本くらいであんなに興奮するなんて理解できません」

「それはまあ、好きなやつは不自然なくらい好きなもんだからね。俺だってそれほど好きってわけでもないけど、この半年でずいぶんたくさん読んだよ」

「そういうものなんでしょうか」

「そういうもの。読んでおけば、何か役に立つこともあるかもよ」

「はい、わかりました！」

ミラはそう言って適当な本屋に駆け込んでいった。それを見送った環も、カレンが戻ってくるまで時間を潰そうと、適当に本屋を覗くことにした。

しばらくするとカレンが戻ってきて、本屋を覗いている環に声をかけた。

「タマキ様、城の図書館の閲覧の許可が出ました」

「そう、それじゃ行こうか」

環は本屋から出てミラとソラを探した。2人はすぐに見つかって環に呼び寄せられた。

「これから城に行くよ」

「図書館に入れるんですね、やった！」

「でも、宿はとらなくていいんですか？」

「城に滞在する許可も出てますから、その心配はありませんよ」

ソラはそれを聞いて踊りださんばかりに喜んだ。ミラは城に泊まれると聞いて、それは喜んでいようだった。

一行は城の門まで到着した。カレンが守衛に声をかけると、城内に通じる扉が開かれた。中には受付のようなものがあり、カレンはそこに歩み寄ると、ショートソードとナイフ、ダガーを預けた。

「ミラとソラも武器を預けてください」

ソラはすぐに杖を預けたが、ミラは少しためらってから剣を預けた。環は別に武器は持っていなかったが、マントを外して受付に渡した。それから案内人が来て、4人を奥へと案内していった。環は歩きながらカレンに小声で耳打ちした。

「魔法があるのに武器だけ預けるのって意味あるのかな」

「形式的なものですよ」

「あの、それよりどこに向かっているんですか？」

「ミラもその会話に加わった。」

「館長のところですよ」

「館長？」

「この国の王のようなものですね」

「そうなんですか。ソラ、あんた知ってた？」

「知ってるものにも、館長に会えるなんて信じられないことだよ。」

「本当に師匠達は何者なんですか？」

「じきにわかりますよ」

それから無言で4人は歩いた。しばらくは廊下を歩いてしたが、ひととき大きな扉の前に着くと、その扉が開かれ5人は中に入った。中は巨大な本棚が並んでいる図書室だった。

「こちらですよ」

案内人はどんどん奥に進んでいった。ソラはしきりにまわりを見まわしていた。

「本なら後でたっぷり読むことができますよ」

「そうそう、落ち着きなくきよろするんじゃないの」

「わかってるよ」

そう言っているうちに、本棚が並ぶ一番奥にある古びた扉の前に到着した。案内人は扉をノックした。

「館長、お客様をお連れしました」

「どうぞ」

穏やかな声がそれに答えた。扉が開かれると、本棚が並ぶ十分な広さのある部屋に初老の女性が座っていた。その机の上には開かれた本が数冊置かれていた。案内人は椅子を4個持ってきて並べると、礼をして部屋から出て行った。

「みなさん、おかけになつてください」

初老の女性は落ち着いた声でそう言った。4人が椅子に座ると、机の上から本を一冊手にとって4人のほうに椅子の向きを変えて微笑を浮かべた。

「よく来てくれました。ノーデルシア王国を救った勇者、タマキ様」

「あのノーデルシア王国を救った！」

「勇者が師匠！」

ミラとソラは裏返った声を出して驚いた。

「ああ、まあそうだけど」

環は落ち着いたものだった。

「ミラ、ソラ、その話は後にしましょうか」

カレンにそう言われると2人は黙ってうつむいた。初老の女性は穏やかな顔でそれを見てから口を開いた。

「はじめまして、私はここの館長を務めているエリットです」

エリットは手に持った本をカレンに差し出した。

「カレン、あなたと会うのは初めてですが、この日記の持主から話だけは聞いていましたよ」

「日記の、持主ですか」

カレンはその本を受け取って適当なページを開いてた。そして、しばらくそれを読んでから顔を上げた。

「驚きました。私のことが書いてあるようですね」

そう言ったわりには、カレンはあまり驚いていないように見えた。

環はそれを見て首をひねった。

「カレン、その本は？」

「旅の日記です」

「つまり、それはカレンと一緒に旅をしていたっていう人の日記なのか」

「はい、そうです」

「で、それって誰なの」

「ハティス。私の少し変わった友人です」

環の問いにはエリットが答えた。

「昔は大賢者などと呼ばれた人でしたが、ある時から人々が持つて自分の記憶を封じてまわっていたんです」

「記憶を？　なんのために」

「目立ちたくないからだと言っていましたけどね」エリットは何かを思い出したように笑った。「それも嘘ではなかったのですが、本当の目的は別にあつたのでしょうか。私の記憶は封じずに、その日記を残していったのですから」

「そのハティスって人に会えれば色々わかるんだな」

「あなたが求めるものが何かはわかりませんが、ハティスと会えば必ず助けになるでしょう」

環はその言葉にうなずいてカレンを見た。カレンは何かを考え込むようにして日記をじっと見ていた。

「それじゃあ、エリットさん。図書館を見せてもらってもいいですか？」

「ええ、どこでもご自由にご覧になってください。まずはお部屋にご案内いたしましょうか」

エリットはそう言って立ち上がった。4人も立ち上がり一礼すると部屋から出た。それからそれぞれの部屋に案内された。それから、環はミラとソラを呼んだ。

「ミラ、ソラ、俺はカレンと一緒にこの日記を調べるから、2人は自由にしていいぞ」

「いいんですか？」

「ああ、楽しんできなよ」

「はい、姉さん行こう！」

「ちよつと引つ張らないでよ」

2人は廊下に消えていった。それを見送ってから、環はカレンの部屋のドアをノックして中に入ると、日記を持って椅子に座っていたカレンの肩に手を置いた。

「カレン、平気か」

「平気です。少し、驚いているだけですから」

「いきなりあんなことを知らされたら驚くよな。でも大丈夫だ、時間はあるんだからゆっくり調べよう」

「そうですね。ゆっくり、調べましょう」

カレンは少し笑ってから立ち上がった。2人はさっきの図書室に向かった。

「何から調べようか」

「この日記を日付順に古いほうから、手当たり次第に調べていきましょう」

「そうすればハティスっていう人の足取りがよくわかるな。目的もわかるかもしれない」

「はい、私の記憶は封じられた影響のせいかな、あまりあてになりそうにありませんから」

「よし、早速始めよう」

自称天才魔導師

知の都に滞在して数日、環とカレンはハティスの日記のほとんどを調べ上げていた。足取りはかなりわかったのだが、最後の日付は、知の都に訪れた4年前のものだった。

「これだと、今どこにいるかは絞り込めないな」

「そうですね。それに、あまり重要なことは書かれていないようです」

「カレンのことも詳しくは書いてないな。10年も書いてるのに」

「6年前までは一緒だったのですけどね」

「まあ、なんにせよ、これ以上ここにいてもわかりそうなことはないか」

環はそう言つて机の上に積み上げられた本を眺めた。

「問題はどうかやって探すかだ。会う人全部の記憶を封じてるなら、人に話を聞いても決め手にはならないし」

「ですが、それは存在自体を忘れさせるものではありませんから、全くヒントがないわけではありません」

「そうだな。誰かに会ったけど覚えていないっていううちの、不自然なのを探せばいいわけだ。でもそれも、人に会ってればの話か。でも何もないよりはましかな」

「エリット様のお話では、変わった人のようですから、人里からは離れた場所にいるかもしれません」

「とにかく動かないと駄目そうだね」

環は立ち上がって体を伸ばした。

「すぐに発ちますか？」

「そうしよう。俺はミラとソラを呼んでくるよ。受付で落ち合おう」
「では、私はここの片づけをしてから向かいます」

環はカレンと別れてミラとソラを探しにいった。2人はこの数日の間に定位置になった机にいた。ミラは机に突っ伏して熟睡、ソラ

は魔法や精霊に関して書かれた本を手当たり次第に読んでいた。

「2人とも、そろそろ出発するぞ」

その一言に、ミラは勢いよく立ち上がった。

「やったー！ ソラ、早く本返してきなさい」

対照的にソラはがつくりとうなだれていた。

「出発ですか。ああ」

それでもソラは立ち上がって本を抱え、元々あった場所に返しにいった。ミラもそれを手伝い、手早く本を片付けて戻ってきた。

「それでタマキ師匠、どこが目的地なんですか？」

「それが決まっていんだけどね。とりあえずはここから一番近い町かな」

「わかりました。すぐに準備をしてきます」

ソラは立ち直ったらしかった。

「じゃあ受付で集合しよう」

そう言って環は2人に背を向けた。その向かった先はエリットの部屋だった。環はドアをノックして返事は待たずに中に入った。

「おや、タマキ様。どうしました？」

「いや、そろそろ出発しようと思って。だから挨拶にきたんですよ」

「ハティスを探しに行くんですね。どこから探しに行くつもりですか？」

「まず、一番近くの町に行くつもりですよ。そこからは一番長く滞在したっていう場所の近くの村に行くつもりです」

「そうですか。旅の無事を祈ってますよ」

エリットはそう言ってから、机の引き出しを開けて小さな箱を取り出して、それを差し出した。環はそれを受け取って、それを開けた。

「これは、指輪」

「ハティスから預かっていたものです。カレンと一緒に自分を探しにくる者がいたら渡すようにと、頼まれていたのですよ」

「なるほど」環は指輪を取り出すとそれ左手のひとさし指にはめた。

「ぴったりだ。この指輪、きつと、なにか意味があるんだろうな」

「そうだと思いますよ。では、幸運を祈ります」

「ええ、行ってきます」

環は立ち上がって部屋から出て行った。

それから受付に来た環だったが、そこではミラが大きな声を出して誰かと言いつついた。その相手は陰になっていて見えなかった。「あんたみたいな怪しい奴を師匠に会わせるわけないでしょ！」

「ふん、半人前の剣士風情が。いいからさっさと勇者とやらを連れてくるんだ」

環は離れたところでおたおたしているソラに声をかけた。

「ソラ、あれは何やってるんだ」

「あ、はい。それがあの变なのが、勇者がここにいるはずだって押しかけてきたみたいで」

「变なのね」

そう言いながら環はミラの背後に移動した。ミラと言いつついたのは、長袖と長ズボン、小ぶりのマントに腰にはメイスを下げている、ミラやソラと同年代くらいの少年だった。

「探してるのは俺かな」

「な、師匠、なんでここにいますかあ！」

「いや、ここに集合って言ったじゃないか」

「そ、それはそうですね、時と場合というものが」

「そうか、お前が勇者か！」少年は環に向かって指を突きつけた。

「この天才魔導師ミニツク様と勝負しろ！」

「勝負？」

「そうだ、勇者というくらいだから腕は立つんだろう。僕が戦ってやるのにふさわしい」

「この、言わせておけば偉そうに」

飛びかからんばかりのミラを押さえながら、環はどうしたものかと考えていた。そこにタイミングよくカレンが来た。

「タマキ様、何かあったのでしょうか」

「いや、それが俺と勝負したいって言うんだよ、この子が」

「勝負、ですか」

カレンはミニツクをじっと観察した。

「とりあえず場所を変えたほうがよさそうですね」

4人にミニツクを加えて、一行は知の都を出発した。ある程度都から離れ、見通しのいい場所に到着すると、カレンは荷馬車を止めた。

「このあたりなら思う存分できますよ」

「思う存分ね。面倒くさいな」

環は荷馬車から降りて歩いていくミニツクの後ろ姿を見ながらぼやいた。

「そうです。あんなのの相手をする事なんてありません」

「でも、あれだけ言うならどのくらいの実力があるのかちよつと興味があります」

ミニツクのが気にくわない様子のミラとは逆に、ソラはミニツクに興味があるようだった。

「そうだな、俺のことを探しまわってたんなら、相手をしてやらないのも可哀想か」

そう言った環は荷馬車から降りてミニツクの後を追った。ミラとソラもそれについていこうとしたが、カレンが2人を止めた。

「2人とも、あまり近づかないほうがいいかもしれませんよ」

「どういふことですか？」

「見てればわかる、かもしれません」

ミラは渋々、ソラは特に何も言わずにその言葉に従って、荷台から環とミニツクを見つめた。2人はある程度の距離をとって対峙したところだった。

「いつでもいいぞー」

環は手を振ってそう告げると、体の力を抜いてゆったりと立った。ミニツクは両手を前に突き出した。

「ファイアウォール！」

その声と同時に、ミニツクの前に炎の壁が出現した。そして、それは環に向かってどんどん伸びてきた。

「面白い魔法だな」

環は余裕を持ってそれを観察しながらつぶやいた。そうしているうちに、炎の壁は環を包み込むように広がった。そして、それは一気に環を中心に収縮した。

「どうだ！」

燃えさかる炎を満足気に見ながら、ミニツクは膝に手を置いて肩で息をしていた。

「バースト！」

だが、環の声と共に炎は爆風によって一瞬で吹き飛ばされた。

「今のはけっこうすごかったよ」

その傷1つない環の姿を見て、ミニツクは慌てて体勢を立て直して、手を環に向けた。

「クソッ！ ライトニングボルト！」

だが、パチッという音がただけで何も起こらなかった。なんとかやっても同じだった。環はそれを見て空を見上げた。

「ちよつと寒いと思うけどね。ブリザードストーム、弱」

ミニツクを中心として、いきなり小規模な吹雪が起った。環はそれを数秒ですぐに解除したが、ミニツクはぼろぼろになって地面に転がっていた。環はそれに近づき、しゃがんで状態を確認した。

「おい大丈夫か？ ちよつとやりすぎたかなあ」

環の声にミニツクはがたがた震えながらもすっかり反応して、その手をつかんだ。

「で、で、弟子に、してください」

3人の弟子達

「オリジナル魔法とは大したもんだね」

環は荷馬車に揺られながらミニツクを褒めていた。ミラは気に食わなさそうな顔をしていたが、さっき先輩と呼ばれて気をよくしていたので、特につかかることもなかった。

「しかし、それを1回しか使えないのは関心しませんね。それと、基本的な魔法は苦手なんですか？」

カレンの手厳しい一言にミニツクは頭をかいた。

「えー、実は自分で考えた魔法以外は苦手です」

「何種類くらい使えるんだい」

「3つ使えます。どれも威力抜群ですよ」

「まさかどれも1回しか使えないのではないでしょうね」

ミニツクは胸を張っていたが、カレンの言葉が凶星だったようであつむいてしまった。

「ところで、なんで俺があそこにいたって知ってたんだ？」

「それは僕の師匠から教えられたんです。知の都に行けば、そのうち勇者に会えるだろうって」

「師匠？」

「昔は大賢者とか呼ばれてたらしいんですけどね。怪しい爺さんですよ」

「大賢者ですって！」

ミラがミニツクの言葉に反応して、その首をつかんで思いきり揺さぶった。

「その爺さんについて知ってることを全部吐きなさい！ さあさあさあ！」

「姉さん落ち着いて」

ソラがなんとかそれを引きはがした。ミニツクはしばらく咳き込んでいた。

「いきなりなんなんですか」

「ミニック、その人の名前はわかるかな」

「はい、ハティスっています」

その一言に、ミニック以外の4人は無言だが強く反応した。その雰囲気にはミニックはとまどったように全員の顔を見まわした。

「僕、なんか変なこと言いましたか？」

「いや、変なことじゃない。俺達はその人を探しに行くつもりだったんだよ。今どこにいるかわかるか」

「商業都市エズラっていう町の近くで、けっこう遠いところです。

僕は知の都に着くまで、そこから1ヶ月くらいかかりました」

環はそれを聞いて腕を組んで考え込んだ。

「大賢者という人には私達が何をするか、お見通しだったわけですね」

「そうらしい。ミニック、大賢者のところまでの案内をよろしく頼むよ」

その日の夕方、ミラ、ソラ、ミニックの3人はテントを張っていた。ミニックは手を止めて、地図を手に相談している環とカレンを見た。

「そこ、手を休めないで」

ミラに注意されても、ミニックは手を止めたまま口を開いた。

「ミラ先輩。タマキ先生とカレンさんはどんな関係なんですか？」

「関係って、そりゃあねえ」

ミラは含み笑いをしながらソラをつつついた。

「なんで僕に話をふるんだよ」

「うーん、いやさあ、こういうことはなんかそついうことに興味なさそうというか、鈍そうなほうが説得力あるじゃん」

「なんなんだよまったく」

ソラはそう言ってテントを張る作業に戻った。ミラは舌打ちをした。

「我が弟ながらノリが悪い奴」

「あの、それで2人の関係は？」

「コ・イ・ビ・トに決まってるでしょ」

「そうですね。なんでそう思うんです」

「そのほうが面白い、んじゃないくて、テントだって交互に見張りしてるけど1つだし、宿だって2人部屋だけど同じ部屋だし」

「全然説得力ないですね」

「大体妙齡の男女が2人旅なんておかしいでしょ。勇者ならもっとお供をそろそろ連れててもおかしくないじゃない」

「お忍びなんでしょう」

「だからあ、駆け落ちとか考えたほうが面白いでしょ。まあ、実際はタマキ師匠もカレン師匠もめちゃくちやに強いから護衛の必要がないのと、タマキ師匠の性格の問題だと思うけど」

ミニツクは少し感心したような顔をした。

「思ったよりも頭使ってるんですね」

「あんだ、ケンカ売ってるの？」

ミラはミニツクに詰め寄ろうとしたが、ソラがその間に入って止めた。

「2人とも、早くしないと日が落ちるよ」

「はいはい、わかりましたよ」

ミラはミニツクから離れてテントを張る作業に戻った。環と話していたカレンは、その様子をたまに横目で見ていた。環との相談が一段落してから、カレンはそのことを口にした。

「あの3人はうまくやっていけそうですね」

「え？ ああ、ずっと観察してたの」

「はい、城に勤めて身に着けた技能です」

「なんでもありだなあ。でもミラとミニツクはよくケンカしそうになってるように見えるけど」

「あれくらいなら問題はないと思います。ミラにとっては生意気な弟が増えたというくらいではないでしょうか」

環はカレンの言葉にちよつと笑った。

「そうかもね」

「それに、ソラがうまく2人の間に入ってるようですから」

「しかしまあ、まさか弟子なんてのができるとは思ってなかったよ。おかげで退屈はしなさそうだけど」

「そうですね」

それから、2人は準備しておいた夕食の様子を見に行つた。その晩は特にそれ以上のこともなく、翌朝、環は全員を集めた。

「これからのことだけど、とりあえず行く予定だった町にはこのまま向かうことにした。目的地はけっこう遠いから、それなりの準備が必要だしね」

「そのあとはまっすぐ商業都市エズラに向かうんですか？」

ミラの質問にはカレンが一步前に出た。

「そうしたいところですが、人数も増えましたし、隊商に同行できるといいですね。そのほうが旅の負担も少ないですから」

「そう、だから町に着いたら護衛として同行できる隊商を探す。どうしても見つからなかったら今まで通りに行くことになるね」

「エズラはけっこう有名ですから、たぶん見つかるんじゃないでしょうか」

「そう願いたいね」環はミニツクの言葉にうなずいた。「それじゃ、出発しようか」

町に到着した一行は、宿を確保してから、手分けして条件の合う隊商を探すことにした。

「隊商なんてどこ探せばいいってのさー」

ミラはぶつくさ言いながら先頭を歩いていた。後ろを歩いているソラとミニツクは宿から借りてきた町の案内図を見ていた。

「聞いてんのお2人さん」

「聞いてるよ姉さん。市場があるみたいだから、とりあえずそこに行けばなにか見つかるんじゃないかな」

「市場ね。なんか面白いもんでもあるといいけど」

「ミラ先輩、買物に行くんじゃないんですよ」

「わかってるっての」

そうしているうちに市場に到着した。市場はそれなりに賑わっていて、店舗も人も多かった。

「思ったよりちゃんとしてますね。どうやって目的の隊商を探しましょうか」

「手分けして店の人にでも聞くのがいいと思うけど」

「それでいいんじゃないの」

ソラの提案通り、3人は別れて隊商の情報を探すことにした。しかし思ったよりも有効な情報はなかなか得られなかった。ミラは聞きこみに飽きて、手近な壁によりかかった。

「あー！」

いきなり市場の通りで叫び声がした。ミラは壁から体を放し、その声のしたほうに体を向けた。

「誰か！ ひったくりだ！」

手荷物を無理矢理奪われて転倒した少年が大声で叫んでいるのが見えた。そして、その少し先には肩掛けのカバンを片手でつかんでいるひったくりらしき人物がいた。ひったくりは通行人を突き飛ばしながらミラのいるところにとんと近づいてきた。

ミラは淡い光をまとう剣を静かに抜いた。ひったくりはミラが立っているほうの手で、カバンの上部をつかんでいた。息を整え、すれ違いざまにミラはカバンをつかんでいる手のわずかに下を狙って剣を振るった。

切られたカバンの下の部分が地面に落ち、言葉にならないどよめき起きた。ひったくりはすぐには何をされたかわからなかったようだ。自分の手の中にカバンの上の部分しかないのと剣を持つミラを見て、手の中の残骸を放り投げると、ものすごいスピードで逃げていった。

ミラは剣を収めてから地面に落ちたカバンを上下とも拾うと、な

んとか立ち上がったいた持主の少年のもとにそれを持っていった。

「ありがとうございます！」

少年はミラ手からカバンを受け取ると、それを抱きしめて何度も頭を下げた。

「いや、取り戻すためとはいえ切っちゃったし、そんなに頭を下げないでも」

「そんなことはありません。これにはとても大切なものが入ってます。本当にありがとうございます！」

いつの間にか集まってきた野次馬に囲まれたまま、少年はまた勢いよく頭を下げた。ミラはそれを少し困った顔で見ている。

「姉さん、何の騒ぎ？」

「ミラ先輩、何かやらかしたんですか？」

そこにソラとミニツクが戻ってきた。

「この子が手荷物をひったくられたから、それを格好よく取り返しただけ。それよりあんたら、隊商の情報はなんかあったの？」

「隊商!？」

ミラの言葉に反応したのは頭を下げている少年だった。

「隊商を探してらっしゃるんですか？ なぜです？」

「なぜって、ちょっと遠くまで旅をするから護衛ってことで同行させてもらおうということだ」

ソラの説明に少年は一人で大きくうなずいてから、自分の胸をドンと叩いた。

「そういうことでしたら僕にまかせてください！ 申し遅れましたが、僕はジョアン。父は隊商のリーダーを務めているんです」

隊商

ジョアンを伴って宿に戻った3人だったが、そこには環とカレンの2人と話をしている見知らぬ男がいた。

「父さん！」

ジョアンがそう言ってその男の前に飛び出した。

「ジョアン、どうしたんだ？ それに、そちらの方々は？」

「市場でひったくりにあつたんですが、こちらのミラさんに助けていただいたんです」

「そうか、怪我はなかったか」

「はい、大丈夫です」

男はそれを聞くと立ち上がってミラに頭を下げた。

「息子を助けていただいてありがとうございます。私はレナルド、小さな隊商をやっているものです」

「えー、私はミラです。えー、修行中の剣士ですが、えー、よろしくお願いします」そこまで言うてから、ミラはカレンに助けを求めた。「カレン師匠ー、助けてください」

レナルドは不思議そうにカレンを見た。

「お知り合いですか？」

「はい、旅の連れです」

「あの、師匠っていうのは」

ジョアンの疑問にはソラが答えた。

「言った通りの意味で、そちらのお2人は僕達の師匠です」

それを聞いてレナルドは面白そうな表情になった。

「ほう、縁というのは不思議なものですな。これはタマキさんとカレンさんの頼みも断れなくなりましたな」

「それじゃ、商業都市エズラまで護衛の件は了承してもらえたってことでいいのかな」

「はい、息子を助けていただきましたし、あなた達が信頼に足る人

物だというのもわかりました」

「あとはルートの調整ですね」

カレンの言葉にレナルドは笑顔で応えた。

「それはこれから相談しましょう。我々も商売がありますから」

「それはわかります。ですが、我々としても、少しでも早くエズラに到着したいのです」

それから、カレンとレナルドは具体的な話にはいる雰囲気になった。

「それじゃ、俺達はちよつとそこらへんぶらぶらしてくるから、カレン、後は頼んだよ」

環はそう言つて立ち上がると、4人をつかまえて宿の外に出て行った。

その日の夕方、話はまとまり、レナルドはジョアンを連れて隊商の宿に戻っていた。環とカレンは宿の1階の食堂兼居酒屋のようなところで向かいあつて座っていた。

「隊商と同行はできるようになったわけだけど、目的地まではどういうルートなのかな」

「多少遠回りになる部分もありますが、おおむね問題ありません。考えていたよりも早くエズラに到着できそうです」

「安全な旅になると思う？」

「ほとんどは安全だと思います。多少危険な場所もあるようですが、問題になるほどではありません」

「もし魔物やらなんやらが出てきたらどうしようか」

「被害がでないように、できるだけ隊商から引き離して相手をしたいですね。それに、タマキ様の正体は明かしていませんし、明かすつもりもありませんよね？」

「別に隠すつもりもそんなにないけど、言いふらそうとも思つてないからそれがいいか。まあ、巻き添えにするのもまずいし、できるだけ離れて戦うっていうのはいいだろうね。そういえば隊商に護衛つて元々ついてないの？」

「いますよ。固定で給料を貰っているそうなので、私達の同行は歓迎していても邪魔だとは思わないはずです」

「厄介ごとはなしか」

環は少し残念そうな顔をした。

翌朝、環達の宿にはジョアンが使いとしてやってきた。

「皆さん、準備は大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ。みんなは？」

「もちろん大丈夫です」

ミラは胸を張って言い切った。それから後ろのソラとミニックに振り返った。

「あんた達は大丈夫？」

「もちろんですよ、先輩」

「姉さんのほうこそ、本当に大丈夫なの？」

「当たり前でしょ。さあ師匠、行きましょう！」

ミラを先頭にして、一行は宿を出た。そして、厩舎のある町外れで隊商と合流した。出発はすぐで、環とカレンは荷馬車、他の3人は隊商の馬車に乗った。しばらく何事もなかったが、荷馬車に護衛らしき2人が近づいてきた。

「よお、あんたらが今回限りの護衛かい？」

環が声をかけてきた人物を見ると、背中に長い剣を背負っている男と、弓を持っている女がいた。

「ああ、そうだよ。で、あんたらは？」

「こっちがシェイラ、この隊商の護衛のリーダーだ。俺はエクセン、まあ副官だな」

「そうなんだ。俺は環、こっちはカレン。あとあっちの馬車に乗っているのがミラとソラとミニック。まあよろしく頼むよ」

環はそう言って軽く手を振った。シェイラはその態度に少し眉をひそめた。

「他の人は見れば大体わかるけど、あなたは何が出来るのかしら？」

「俺？ 俺は魔法使いだよ。けっこうすごい魔法使い」

環の口のききかたに、シェイラは明らかにいらついた表情になった。エクセンは楽しそうにしていた。

「それなら、その腕前を見せてもらいたいものね」

「それじゃ、わかりやすく3倍チャージ連射バージョンファイアボール」

環は上空に向けて3発の火の玉を立て続けに放った。その3発は派手な爆発をして空を彩った。シェイラとエクセンはそれを見て、しばらくの間言葉もないようだった。環とカレンは、特になんてことのないという表情だった。

「まあこんなもんだよ。納得してくれたかな」

「ああ、よくわかった。あんたがいりや安心だ」

エクセンはそれだけ言ったが、シェイラのほうはまだ何も言えないようだった。

「あー、シェイラさん、ご感想は」

「あ、ああ、確かにこれなら安心だ」

それだけ言ってシェイラは立ち去ってしまった。エクセンもその後を追った。

「ちよつとやりすぎたかな」

「そうですね。あんなことは普通はできませんから。常識ですね」
そんな会話をしている2人だったが、シェイラは遠くから、ほとんど畏怖に近い目でそれを見ていた。エクセンはあきれたような表情で口を開いた。

「あのタマキっていう奴はとんでもないな。魔法使いは知ってるけど、あんなもん初めて見たぞ」

「そうね。あれだけでこの隊商は軽く壊滅する」

「そういえば、ノーデルシア王国を救ったっていう噂の勇者がいたよな」

「とんでもない魔法を使って、1人で魔物や魔族を壊滅させたっていう噂ね。1人で戦ったからあまり人の目にもふれず、戦いが終わ

つてもほとんど姿を見せないっていう、半年前なのに伝説みたいな存在」

「ひょっとしてその勇者だったりしてな」

「まさか。それならこんなところを旅してるわけがない」

「わからないぞ。その姿を正確に知っている者はほとんどいないんだから」

エクセンはそう言っただまきをじっと見た。そんなシェイラとエクセンのことを、馬車からじっと見る目があった。

「ふふ、あいつらきつとタマキ師匠の実力を見て震え上がってるに違いない」

「この天才魔導師の僕の先生なんだからそれくらい当然ですよ」

ミラとミニックはそう言っただまきに笑っていた。

「普通はあんなめちゃくちなファイアボールを見せられたらそうなるよ。あんなことできる人は他にいないだろうし」

ソラだけは冷静だった。ミラは笑うのをやめて、頭の後ろで手を組んで後ろによりかかった。

「でもあれじゃ、仮に魔物なんかがでてきても私達の出番がなさそうじゃない？」

「そうだけど、危ない目に会うよりはいいじゃないか」

「甘い！」

ミラとミニックは同時に声を出した。

「もし魔物が出てきたんなら、貴重な実戦訓練になるんだから、できれば僕達で相手をしてやりたいね」

「ミニック、あんたもたまにはいいこと言うじゃん。ソラ、そんな消極的な姿勢じゃ、いつまで経っても1人前になれないよ」

「わかったよ」

ソラはためいきをついて馬車の外を見つめた。

魔族との遭遇

出発からちょうど20日。いくつかの町や村に立ち寄りながら、何事もなく隊商は進んでいた。そして、見通しのいい場所にさしかかった。

「平和だな」

「そうですね、と言いたいところですが、そうでもなさそうですね。環はカレンの視線の先を見た。まだ距離はあったが、何かが接近してきているのはわかった。

「隊商は引き返させましょう。ここではいい標的です」

「そうだな。それじゃ俺はちよつと行つてくるからここは頼むよ」

「わかりました」

環とカレンは荷馬車から別々の方向に降りた。環はバーストで跳び、カレンはレナルドの元に走った。

「引き返せとは、何があつたのでしょうか」

「おそらく魔物です。タマキ様が迎撃に向かわれたので心配はないと思いますが、念のために引き返して距離をとったほうがいいでしょう」

「わかりました、そうしましょう」

レナルドが隊商全体に引き返すように指示を出した。カレンはミラ、ソラ、ミニツクのところに足を運んだ。

「あなた達はこのまま隊商を護衛してください。私はここでしばらく様子をみます」

「わかりました、任せてください！」

ミラは元気よく返事をして、後ろの2人を伴って馬車から飛び降りた。カレンはその様子を見ながら、環が向かった方向をじつと見つめた。

その頃環は、数100体はいる魔物の集団の前に立っていた。ざっと見たところ、特に手強そうな魔物は見当たらなかった。

「お前らだけか？ まあこれくらいならすぐに片付けられるからいいか」

環は自分の右手を魔物達に向け、魔力を集中させた。

「ミニミニシリーズはこのために考えたんだよな。いくぞ、10倍！ マシンガンファイアボール！」

魔物達に向けられた右手から、小さな火の玉が凄まじい勢いで連射された。それは環の手の動きと共に、魔物を端から端まで掃射して小規模な爆発を数1000発引き起こした。

火の玉の嵐と爆発がおさまった後には、魔物達の残骸しか残っていなかった。環はそれを確認すると、隊商のほうに引き返そうと歩き出した。しかしそれは背後からの声で止められた。

「この骸達をもつて姿を現せ、ボンドラゴン」

振り向いた環の目に飛び込んできたのは、以上に魔物の残骸の中心に立ち手を掲げる、異常に髪の毛の長い女のような存在だった。女のようなものの言葉に反応するように、魔物の残骸が動き出し、その頭上で何かを構築し始めた。

「あんたは何者だ」

環の問いに、女のようなものは薄ら笑いを浮かべた。

「理の外にある者、ノーデルシアの勇者。今の魔法といい、実に興味深いな」

「意味がわかるようにしゃべってもらいたいな」

「そのうちわかる時が来る。今はこいつと遊んでいてもらおう」

女のようなものが指をならすと、集まった魔物の残骸が一気に竜の形になった。醜悪で腐臭の漂うボンドラゴンだった。

「私のことはイムトポールとでもしておこう。また近いうちに会うことになる」

そう言ってイムトポールと名乗ったものは闇に消えた。後には腐臭漂うボンドラゴンと環だけが残された。

「面倒なもん残してくれたよ」

一方カレンは、隊商が避難した後も動こうとせず、その場に止まっていた。その距離からでもボーンドラゴンの不気味な姿はよく見えた。カレンは動こうとしたが、何かの気配を感じ、ショートソードを抜いて勢いよく振り向いた。

「これが混沌の魂を持つ者。なるほど、興味深い」

環の前にも現われたイムトポールが立っていた。カレンは油断なく構えた。

「失礼ですが、あなたは」

「イムトポールとでも呼ばべいい。少し確かめさせてもらおう」

言葉と同時にイムトポールはカレンに飛びかかっていった。カレンはそれをかわしながら、その胴体を斬りつけた。だが、その一撃は皮膚にあっさり弾き返された。イムトポールは着地してから振り向くと、薄ら笑いを浮かべた。

「魔族ですか。手加減は無用のようですね」

カレンは眼鏡を外して、それをしまった。赤い瞳がイムトポールを見据えた。

「それでいい」

イムトポールは火の玉を作り出し、カレンに放った。カレンはそれに炎をまとったナイフを投げつけて爆発させると、その爆発の中を駆け抜け、雷をまとったショートソードを振り下ろした。イムトポールはそれを横に跳んでかわし、側面からカレンに向けて氷の牙を3発放った。

カレンはショートソードに氷をまとわせると、2発を打ち払った。さらにダガーを逆手で抜くと、それにも氷をまとわせ3発目も打ち払った。そのままイムトポールにダガーを投げつけてから突っ込んで行った。

イムトポールは投げられたダガーをつかんで投げ捨てると、上空に飛んでカレンの突撃をかわした。そしてそのまま一気に急降下した。斬撃を避けられたカレンは隙ができてるように見えたが、振り下ろしたショートソードを握る手に力をこめると、闇の大剣を一

気に作り上げ、それを降下してくるイムトポールに合わせて思い切り振り上げた。

避けようがないようなタイミングのはずだったが、イムトポールは何事もなくカレンから少し離れた場所に降り立っていた。

「なるほど。大した力だ」

「あなたも、どうやら下級の魔族ではないそうですね」

カレンの一言にイムトポールは軽く笑った。

「また近いうちに会うことになるだろう。それまで平穩を楽しんでおくといい」

それだけ言っているとイムトポールは飛び上がり、空に消えた。

「バースト！」

環は爆発を利用して横に跳び、ボンドドラゴンのプレスをかわした。プレスを浴びた地面は焼けただれ腐敗臭を放っていた。環はそれを見て苦笑いを浮かべた。

「これは浴びたくないな」

環はそう言ってから、ボンドドラゴンに向かって両手をかざした。

「とりあえず落ちてもらおうか。5倍アイスバイト！ ダブル！」

その両手から巨大な氷の牙が飛び、ボンドドラゴンの片方の翼を貫いた。ボンドドラゴンは醜いうめき声のようなものをあげると、バランスを崩し地面に落ちた。だが、すぐに体勢を立て直し立ち上がった。

「立ち上がらせるかよ！ バースト！」

環はそれに突っ込んでいき、すれ違いざまに思い切り頭を蹴り飛ばした。ボンドドラゴンは再びバランスを崩し、倒れた。環は着地するとすぐに振り返り、それに手を向けた。

「10倍マシンガンファイアボール！」

小さな火の玉がボンドドラゴンの体に次々に着弾し、その爆発が体を覆った。だが、その中でボンドドラゴンは咆哮をあげると、傷ついた翼を渾身の力で動かして上空に飛び上がった。そして、環を

圧殺しようと一緒に降下してきた。環はその巨体に向けて両手をかざした。

「10倍プロテクション！」

環の両手を中心として展開された魔法の盾が巨体を食い止めた。

「10倍ブリザードストーム！」

その声と共に、魔法の盾を展開したままの環を中心として凄まじい吹雪が起こった。ボンドラゴンはその吹雪に巻き込まれ、上空高く運ばれた。

「とどめだ！ 20倍！ メテオストライク！」

ボンドラゴンが頂点に達した時、燃えさかる巨大な岩石がそれを直撃した。すさまじい爆発と共に、塵も残さずにボンドラゴンの巨体は蒸発していた。環はそれを確認してから、カレンのいるところに戻っていった。

「激しい戦いだったようですね」

カレンは1人で環を迎えた。

「ああ、なんか変なのが出てきたおかげで大変だったよ」

「こちらにもイムトポールと名乗る魔族が現われました」

「そいつだ、臭い竜を呼び出してきた。また会うとか変なことを言ってたよ」

「私にもそう言いました。なかなか油断できない相手のようです」

そこまで話すと、2人は無言で目を合わせた。

「標的は俺達かな」

「そう考えたほうがよさそうですね」

大賢者

魔物達と魔族との遭遇から12日。その後は何事もなく、隊商は商業都市エズラに到着した。一行は休む間もなく、ミニツクの案内でハティスに会うために出発した。それから2日、町から離れた、小さな湖のそばに建てられた小屋が見えるところに、一行は到着した。

「あれ？ またずいぶんぼろいところに住んでるね」

環は小屋を指差してそう言った。

「ええまあ、師匠は変わり者なんです。ずっと閉じこもってたと思うと、突然どこかに旅に出たりで」

「じゃあ、今はいるのかな」

「さあ、たぶんいると思いますけど。僕が先に行って確かめてきますよ」

そう言ってミニツクは1人で小屋に向かって走っていった。その後姿を見ながら、ミラは疑わしそうな表情を浮かべていた。

「本当にこんなところに大賢者なんて人がいるんですかね」

「いて欲しいもんだね」

環は腕を組んでそう答えた。しばらく待っていると、小屋に入ったミニツクが出てきた。大きく手を振って、待っている一行を呼んでいるようだった。4人はそれに応じて小屋の目の前まで来た。

「全員来たのかね？」

小屋の中から、穏やかだがよく通る声が聞こえた。

「はい」

ミニツクが大声で返事をする、白いローブを着た、大柄で白髪の初老の男が小屋の中から姿を現した。男は一行をさっと見まわしたが、カレンのところでその視線を止めた。何かを言おうとしたが、何も言わずに視線を環に移し、その指にはまっている指輪を見た。

「見たところ、君が勇者かな。待っていたよ」

「ああ、俺は環。それでそっちが大賢者ハティスさんか」

環のストリートなもの言い方に、男は少し笑った。

「昔はそう呼ばれたこともあった。正直、気に入らなかったがね」

「気に入らないってだけで、人の記憶をいじった？」

そう言った環の表情は変わらなかったが、かえってそれが怒りを抱えているように見えた。ハティスはそれを見てためいきをついた。

「君がどんな答えを期待しているのかはわからないが、おそらく、あまりいい返事はできないな」

環はそれを聞いてカレンのほうを見た。

「カレンはそれでいいのか」

「タマキ様、私のことでしたらご心配なく。大丈夫ですから」

カレンの返答に、環はしばらく黙っていたが、気を取り直すと再びハティスに目を向けた。

「まあこのことは置いておくとして、なんで俺達が知の都に行くのがわかってたのかな。こんな指輪に道案内まで用意しておいて」

「この世界で何かを知りたいと思ったら、あそこにたどり着くものだ。それに、ミニツクの案内でここまで楽に到着できたらう」

「でもあんたは、この指輪はカレンと一緒に自分を探しに来た者に渡すようにと、館長に託していた。ひよっとしたら勇者とやらは1人であそこに行ったかもしれない。大体、あんたがこの指輪を館長に渡したのは俺が呼び出されるずっと前だ。ミニツクだって、ひよっとしたら何ヶ月も待ちぼうけを食うはめになったかもな」

「勇者がいずれ呼び出されるのはわかっていたことだ。待ちぼうけなら、路銀はたっぷり渡しておいたから心配はいらん。それに、一緒に旅をするほど、カレンに信頼されず、カレンことも信頼できないような者なら、私としては用がないし、それでは勇者としての資格がない。少なくとも私は認めん」

静かに断言するハティスに、環は苦笑いを浮かべた。

「一体カレンにどんな役割を背負わせてたんだ？」

「勇者を守り、共に戦うこと。ただし、それは私自身が見きわめる

こと」

環の問いに答えたのはカレン自身だった。ハティスは重々しくうなずいた。

「その通りだ。そして、タマキ君、改めて言わせてもらおう、私は君を、君達を待っていた」

「それは、なんのために」

「もちろん世界を救うためだ」

「世界を救うね、スケールが大きすぎてピンとこないな」

ハティスは環のことを不思議なものを見る感じで見た。

「そうでないなら君はなんのために戦ってきたんだね？」

「別に、そうできるから、目の前にいる人を守るだけだよ。確かに今は力があるけど、世界そのものなんて救えるとは思えないし、全てを守ることもなんてできないんだから」

「ふむ。意外と冷めとるな」

「冷めてるんじゃない。全ては守れない、だからこそ、守れるんなら絶対にそうするんだ」

しばらくの間、環とハティスは無言で対峙していた。その沈黙を破ったのは環だった。

「封じた記憶は取り戻せるのか？」

「もちろんできる、そのつもりだ。ただ、ちょっと時間がかかるな」

ミラとソラとミニツクは小屋から離れた場所で適当に座っていた。

「あのさあ、本当にあの爺さんが大賢者なんて呼ばれてたの？」

「僕は知りませんよ。ただ旅先であの人が魔物と戦ってるのを見てんで、それで弟子にしてもらっただけですから」

「弟子になりたくなるほどすごかったのかい？」

「それはもう。まあタマキ先生ほどめちゃくちゃじゃないですけどね」

3人は一斉にうなずいた。

「3人で何を話してるんだ？」

そこに環がぶらぶらと歩いてきた。3人は話を中断して立ち上がった。

「タマキ師匠、カレン師匠と一緒にじゃなくていいんですか？」

ソラの言葉に環は首を横に振った。

「しばらく時間がかかるらしいからね。これからの戦いのために休んでおけだつてさ」

「これからの戦い？ 問題の魔族はもう倒したんじゃないんですか？」

ミラは不思議そうに言った。

「魔族はまだいる。だからそれに備えないといけない、っていうのがあの爺さんの言いぶんなんだ」

「本当なんですか？ そうだとしてもノーデルシア王国を襲ってた闇王っていうのより強いのがいるんですかね」

「少なくとも1人、性質の悪そうなのがいるな」

環がそう言った瞬間、その背後に何かの勢いよく落ちてきた。

「プロテクション！」

環は振り返るより早く魔法の盾を展開し、自分と3人を包んだ。

それが落ちてきた何かが引き起こした爆発を遮った。爆発の後に残された煙がひいた後、環が振り返ると、そこにいたのは髪の長い女のような魔族、イムトポールだった。

「またあんたか。一体何の用だ」

イムトポールはそれに答えず、無言で立っているだけだった。環の後ろの3人はそれぞれ身構えた。環はそれを手を上げて制止した。

「3人は小屋に戻ってるんだ」

「でも！」

「姉さん！ ミニックも！」

ソラは踏み出そうとするミラと魔法を使おうとしたミニックを止めた。

「僕達がかんう相手じゃない、足手まといになるだけだよ」

「早く行くんだ」

環の言葉に押されるように、3人は後ろに下がった。

「無理はしないでくださいね！」

ミラはそれだけ言って小屋に向かって走り出した。ソラとミニツクもそれに続いた。

「さて、もう一度聞こうか。一体俺に何の用だ」

「私と一緒に来てもらおう」

「あんまりうれしくもないお誘いだな。目的は何だ」

「来ればわかる。どうだ、これはお前にとって悪い話ではないぞ」

「いいか悪いかは俺が決めることだ。それに、お前ら魔族に協力するってことは、この世界の人間の敵になるってことだろ。それはできない相談だな」

「ほう、異世界の人間がなぜそこまでこだわる。無理矢理この世界に連れてこられたのだ、恨みを抱くのではないか？」

環はにやりと笑った。

「俺の前に呼ばれた人は、この世界の人間と結婚したんだよ」

「だが、その前に呼ばれた人間は我らの眷属となった」

環はそれを聞いて、少し考え込むように沈黙してから口を開いた。

「なんとなく答えはわかる気がするんだが、一応聞いておこうか。それは誰だ？」

「お前が倒した、閻王と名乗っていた者だ」

環は目を閉じて大きく息をはきだした。そして、全身に魔力を溢れさせ、目を開き、イムトポールをまっすぐ見据えた。

「くわしいことを教えろといっても、言いやしないよな」

「私と共に来れば話してやろう」

「それは無しだ。今ここで、力づくでも聞かせてもらおうぞ」

強敵

カレンとハティスは小屋の中で向かい合って座っていた。

「では、始めよう」

「はい」

ハティスは右手をカレンに向かってかざした。

「カレンよ、お前に施した封印は少し複雑だ。時間がかかるが、いいな」

「問題ありません」

その時、爆発音が聞こえた。カレンは少し身じろぎしたが、それ以上は動かなかった。それからしばらくして、ミラ、ソラ、ミニツクが駆け込んできた。

「大変です！ 魔族が！」

今度はカレンは勢いよく立ち上がった。

「それはどこに？ タマキ様は」

「僕達を逃がして、魔族と」

ソラの一言に、カレンは外していたショートソードをつかんだ。

「待つんだ」

ハティスがカレンを止めた。カレンは今にも小屋を飛び出しているさうだったが、足を止めた。

「なぜです」

「今は記憶の封印を解くのが先だ。座りなさい」

強い調子で言うハティスに、カレンはショートソードを戻して再び椅子に腰を下ろした。

「はあ！」

環は拳に炎をまとわせイムトポールに殴りかかった。だがそれは手のひらで受け止められた。そしてイムトポールがその拳を握ると、闇がそれを覆い、炎がそれに吸い込まれるように消え始めた。環は

反射的につかまれた手を強引にもぎ放して距離をとった。

「これは」

環は自分の拳とイムトポールを交互に見た。

「どうした？ 力づくでくるのではなかったか？」

「ああ、場所を変えるぞ、ついてこい。バースト！」

環は一気に湖の上を跳んだ。イムトポールはそれを見てから、ゆつくりと浮かび上がると、環を追って一気に加速した。環が湖の対岸に着地すると、すぐにイムトポールも追いついてきて、その背後に着地した。

「10倍！ マシガンライトニングボルト！」

振り向くと同時に、環の手から小ぶりの雷の矢が凄まじい勢いで連射された。だがイムトポールは避けるそぶりを見せず、棒立ちでそれを受けた。放電と衝撃で舞い上がった土煙が晴れると、以上に長い髪の毛で全身を包み込んだイムトポールが立っていた。無傷だった。

「やっぱり、この程度じゃちつとも効かないか」

環の言葉に反応するかのように、イムトポールは自分を包んでいた髪の毛を開くと、その一部を両方の手でもぎとった。

「本気になれないようなら、そうできるようにしてやろう」

手に握った髪の毛が刃物のように鋭利に硬くなった。その切っ先が環に向けられ、投げる動作もなしで数十本が飛んだ。環はもちろんストーンスキンを使っていたが、それを受けることはせず、避けようとした。だが、2本は完全には避けられず、腕と脇腹をかすった。服と皮膚が切られ、血が滲んだ。

「ちっ、アイスバイト！」

氷の牙を放つと同時に、環はイムトポールに向かって走り出した。氷の牙は腕の一振りで弾かれたが、環は拳が届く距離まで踏み込んだ。そして、雷をまとった右の拳を振るった。イムトポールはそれを自分の手で受けようとした。

「バースト！」

だが、その直前に振るった拳からの爆発がその手を弾いた。イムトポールの手は弾かれ、その隙に環は左手をその腹に突きつけた。

「10倍！ ファイアボール！」

炎と爆風がイムトポールを包んだ。環はその爆風を利用して後ろに跳んだ。

「20倍！ ライトニイイイング！」

雷がイムトポールを撃ちぬいた、ように見えた。しかし、それは両手をかけ、その間に闇を作り出して平然と立っていた。その闇が雷を飲み込んだようだった。両手が下げられると同時に、その闇も消えた。

「なんでもそうやって消せるのか」

イムトポールはその問いには答えなかった。環は軽く笑うと、腰を落として構えた。

「なら、直接その体に叩き込んでやるまでだ」

「まだ終わらないのでしょうか。それに、私の記憶を戻すことに何の意味があるのですか？」

カレンの問いにハティスは首を横に振った。

「焦ってはいかん。お前の記憶はお前の力とも関係があるのだ」

「私の力、ですか」

「そうだ、私は記憶と共に、力にも封印を施しておいた。人間の体では、それには耐えられないと考えたからだ」

「ではなぜ、今それを開放するのですか」

「その力が必要になるだろうからだ。それが、運命だ」

「そうですか」

カレンはそれだけ言って口をつぐんだ。それから少しの間、環とイムトポールの戦いの音らしきものかしても、カレンは微動だにしなかったが、雷の轟音で立ち上がった。

「もうしわけありませんが、私は、戦います」

それだけ言うと、カレンはショートソードをつかんで小屋から走

つて出て行つた。ハティスはそれを見送ると、大きくため息をついた。

「いいんですか？ カレンさんを止めなくて」

ミニツクがそう聞いたが、ハティスは首を横に振った。

「あの子が行くというなら、私には止められん」

ソラはそれを見て、手をぐつと握つてからミラのほうを向いた。

「姉さん、僕達も行こう！」

「そうだね。ミニツク、あんたは？」

「もちろん行きますよ」

3人も小屋を飛び出していった。

小屋を出たカレンは、音のしたほうに一直線に走り出した。湖の対岸で戦う環とイムトポールを見つけると、眼鏡を外し瞳を赤く光らせた。そして全身を闇のローブで覆うと、イムトポールの頭上に転移した。ショートソードに炎をまとわせ、一気に振り下ろしたが、それは生きているかのように動いた髪の毛に体ごと弾き飛ばされた。「バースト！」

環が間髪要れずに爆風で跳び、空中でカレンを受け止めて着地した。2人は体勢を立て直してイムトポールと対峙した。

「カレン、記憶はどうした」

「まだ途中です。先にやっておきたいことができましたので」

「そうだな。今はこいつを何とかしなきゃな」

「どの程度の強さでしょうか」

「闇王より強い。あいつの髪の毛の攻撃はストーンスキンでも防げないし、魔法も防がれる」

「それは強敵ですね。どうしますか？」

「隙を作らせて一気に決めるしかない。俺に続いてくれ」

「わかりました」

カレンがうなずくと同時に、環がイムトポールに突っ込んだ。炎と氷をまとわせた拳を立て続けに振るつたが、どちらも受け止めら

れた。そこにカレンが飛び込み、横から氷をまとわせたショートソードでその足元薙ぎ払った。だが、それは足の裏で止められ、イムトポールはその勢いを利用して後ろに跳んだ。

距離をとったイムトポールは髪で作った刃を左右3発ずつ飛ばした。カレンはそれを打ち払いながら走った。

「マシンガンアイスバイト！」

その後方から環は氷の牙を連射した。イムトポールはそれを髪をまとめてそれを防いだ。カレンはその反対側から袈裟切りに雷をまとわせたショートソードを叩きつけた。だが、それも逆の髪に防がれた。

「バアアアストオ！」

そこに爆発で勢いを得た環が突っ込み、その顔面に膝を叩き込んだ。その衝撃でイムトポールは後方に吹き飛ばされた。カレンはナイフをベルトから抜くと、それに炎をまとわせ、飛ばされたイムトポールに向かってそれを投げた。地面に叩きつけられたイムトポールは、そのままの体勢で腕を振ってそのナイフを弾くと、ゆっくりと立ち上がった。

「見事だ。これでは閻王が敗れたのも無理はない」

小さいが不自然によく通る声だった。イムトポールは楽しそうな笑みを浮かべさらに続けた。

「まさかここまで人間に楽しませてもらえるとは、予想以上だ。もっと楽しくしようじゃないか」

イムトポールが両手を広げると、その足元から闇が広がり、そこから魔物達が這い出してきた。

「パーティーだ。お前達のゲストも来たようだし、ちょうどいい」
環が後ろを振り返ると、ミラ、ソラ、ミニツクの3人がこちらに向かつて走ってきていた。

「あの魔物達は一体どこから」

ミラは這い出した魔物達に驚きながら走っていた。

「わからない。でもあれはまずいよ」

「たしかにあれはまずそうですね。地面から魔物が湧いてくるなんて、聞いたこともありません」

「とにかく急ぐよ」

ミラはそう言ったが、その足は前方の地面に現われた闇によって止められた。3人が身構えると、そこから10数体の魔物が這い出てきた。

「2人は後ろに、私のサポートをお願い！」

ミラは剣を抜いてソラとミニツクの前に出た。ミニツクは前に出ようとしたがミラはそれを手を伸ばして制止した。

「あんたはせいぜい2発くらいしか魔法つかえないんだから、チャンスがくるまで力を温存しておきなさい」

「わかりました」

ミニツクはミラの後ろに下がってメイスを手にとってかまえた。

「あいつら大丈夫かな」

環は周囲の魔物達とイムトポールに気を配りながら3人を見た。

「最初に会った時よりはずいぶん強くなっていますが、まだ不安ですな」

「それじゃ、カレンはあつちを助けに行ってくれ」

「わかりました」

カレンはうなずいて3人のほうに走り出した。1人残された環のことをイムトポールは笑いながら見ていた。

「お前1人でこの魔物達と私を相手にするつもりか」

「かわいい弟子をほっとくわけにもいかないからな」

「なるほど。それでは少し見物させてもらおうでしょう」

イムトポールは後ろに下がり、魔物達が動き出した。

ミラ達の前の魔物も、ほぼそれと同時に動き出していた。

「ソラ、あんたは横のほうのやつらを牽制して、方法はなんでもいいから。ミニック、あんたは倒すことは考えなくていいから、とにかく1匹でもひきつけておいて」

ソラとミニックは黙ってうなずいた。

「いくぞ！」

ミラが気合を入れ、剣をかまえた。そこにピットデーモン3体が跳びかかってきた。

「風よ！ 吹き飛ばせ！」

ソラが杖を地面に突き立て叫ぶと、凝縮された空気の弾がその杖から3発撃たれ、ピットデーモンに向かって飛んだ。1体はそれに弾き飛ばされ、もう1体は避けようとしたがそれにかすり、体勢を崩した。だが、最後の1対は完全にそれをかわし、ミラに襲いかかった。

ミラは落ち着いてその動きをよく見ながら、正面からそれに淡く光る剣を振り下ろした。鈍い音と共に剣はその頭部を切り、地面に叩きつけた。だが、それに続いて、体勢を崩していたもう1体が斜め前方から跳びかかってきた。

「おいしょっと！」

妙な掛け声と共にミニックがメイスを振るって、そのピットデーモンを打ち返した。ミラは再び剣をかまえなおした。

「まずは1匹、この調子でいくよ！」

そこにイビルミストが氷の牙を放ってきた。ミラはそれを剣で打ち払った。

「ソラ、あいつを！」

「わかってる、風よ切り裂け！」

風の刃がイビルミストを切り裂き消滅させた。だが、残った魔物達はそれにひるむことなく3人にせまってきた。

「ミニック、あいつらの足を止める魔法を！ ソラは上の奴に集中

して！」

「わかった！」

「わかりましたよ」

ソラは上空のイビルミスとに風の刃を飛ばし、ミニックはメイスを腰に戻すと意識を集中させた。

「ファイアウォール！」

炎の壁が出現し、それは一直線に魔物達に向かっていった。そしてその目の前で一気に大きな壁となり、魔物達を阻んだ。ミラはその側面に走り、端にいたオーガと対峙した。オーガはその太い腕を振るってきたが、ミラはそれをかわすと同時に剣を振った。

オーガは形容のしようがない叫び声をあげ、切られていないほうの腕を振るった。ミラはそれをなんとか剣で受けたが、その体は吹き飛ばされた。

「姉さん！ うわ！」

ソラがそつちに気をとられた一瞬、イビルミスから放たれた氷の牙がかすり、体勢を崩した。

「くそっ！ 火の精霊よ！」

倒れこみながらも、ソラは火の玉をイビルミスに向かって放った。それが命中し、イビルミスは燃え上がって蒸発した。だが、別のイビルミスが氷の牙を放ち、それは倒れたソラに迫った。

ソラは思わず目をつむったが、それは飛んできた炎の刃に粉碎された。そして、吹き飛ばされ、立ち上がるうとしているミラに突っ込んでいったオーガは後ろから首を刺し貫かれた。

「カレン師匠！」

ミラとソラは同時に声を上げた。倒れたオーガの背後に立つカレンは、3人の状態を確認するように1人1人を見た。

「怪我はないようですね。一気に片づけますよ」

ミラとソラは立ち上がり、身構えた。ミニックも魔法を解除して、再びメイスをかまえた。カレンは跳びかかってきたスケルトンを簡単に切り捨て、どんどん魔物に向かって歩いていった。

飛びかかるピットデーモンは次々に切り捨てられ、ミラとミニツクがそれに止めを刺していった。イビルミストはソラの精霊の力の餌食になった。順調に魔物は数は減っていった。

「あつち順調みたいだな」

次々に襲いかかってくる魔物を殴ったり蹴ったりしながら、環はちらちらと3人の様子を見ていた。

「ずいぶん余裕のようだな」

「そうでもないさ、よつと！」

イムトポールの言葉に答えながら、環はオーガの腹を思い切り蹴って、その巨体を吹き飛ばした。

「そろそろこんな雑魚じゃなくて、あんたが前に出てきたらどうなんだ」

「たいしい自信だ。それではお言葉に甘えようか」

そう言ったイムトポールは、浮かび上がると環に向かって刃物のようにした髪を飛ばした。環はそれと同時に跳びかかってきたピットデーモンをつかむと、それにむかって放り投げた。鋭利な髪はその体を切り裂き、ほとんど勢いは落ちなかったが、環はさらに殴りかかってきたオーガの腕をつかんで、それに向かって叩きつけた。

さすがにその巨体には髪の勢いも殺され、オーガの体内で止まった。「ファイアボール！」

環はオーガの死体を放し、自分の後方に火の玉を放った。後ろの魔物達は炎に包まれ、その足は止められた。環は両方の拳に炎をまとわせ、前方の魔物に突進していった。

ピットデーモンもスケルトンを殴り飛ばし、オーガを蹴り飛ばし、イビルミストを霧散させながら環は進んでいった。だが、イムトポールが目の前に現われると、その足は止められた。

イムトポールは自分の髪の根元をつかむと、そのつかんだ髪を硬質化し根元から折った。それはいびつな形の刃になり、その手におさまった。それが横殴りに振るわれ、環はなんとか後ろに下がって

それをかわした。

「どうした？ これは受けられないのか？」

「そんなぶっそうなもんは勘弁してもらいたいな」

立て続けに振るわれたその剣をかわしながら、環は自分の右手に魔力を集中させた。そして上段から振り下ろされたそれをかわしながら、その右手をイムトポールに突きつけた。

「5倍！ バースト！」

大きな爆発でイムトポールは上空に打ち上げられた。環はさらに両手をそれにむかってかざし、魔力を込めた。

「ファイアボール！ アイスバイト！ ダブル10倍マシガン！」

こぶりな火の玉と氷の牙が上空のイムトポールに向かって連射された。それは確実に命中したように見え、イムトポールは無防備な状態で落下してきた。

「バースト！」

環は爆発を利用してその着地点に跳んだ。

「くらえええええ！」

右の拳に雷をまとわせ、イムトポールに渾身の力でそれを叩きこんだ。

「これだ！ これを待っていた」

だがそれはイムトポールが自身の胴体に作り出した闇に飲み込まれていた。環は拳を引こうとしたが、それはできなかった。

「無駄だ」

イムトポールは環の両肩をつかんだ。環は左の拳でその顔面を殴りつけたが、イムトポールはそれを微動だにせず受けた。

「無駄だと言ったろう。お前のことは完全に捕らえた。その力、私の闇が全て飲み込んでやろう！」

捕らわれた勇者

右の拳を闇に引き込まれた環は、そこから自分の力が急速に流れ出て行くのを感じた。なんとか引き抜こうとしたが、腕は動かなかった。魔法を使おうにも、急速に魔力を失っているこの状況では、それもできなかった。環が首だけ動かし、後ろを見ると、この状況に気づいたカレン達が向かってきていた。

「あれはどういうことなの！」

「そんなことわからないよ、とにかく早く行かないと！」

ミラとソラは大声でわめきながら魔物達に突っ込んで行こうとしたが、カレンはそれを止めた。

「あなた達は下がっててください」

カレンはそう言つて、ショートソードを握る手に力を込めると、魔物達に向かって1人で走り出した。そして、魔物達の目の前で闇の大剣を作り出した。それを横に薙ぎ、前にいる魔物を一気に切り捨てると、そのままの勢いで魔物の中を走った。

環までの距離はどんどん詰まっていたが、イムトボールの胴体に作り出された闇は、その体から離れ、人間をまるごと飲み込めるサイズにまで大きくなり、環の体がそれに引き込まれ始めた。それを見たカレンは歯を食いしばり、再び闇の大剣を作り出した。

「邪魔だ！」

怒声と共に剣が振り下ろされ、環とイムトボールがいる場所までの道が見えた。カレンはそこを走り抜け、右手を伸ばした。

「タマキ様！」

環も手を伸ばした。だが、お互いの手は届かなかった。環はイムトボールの作り出した闇に全身を飲み込まれていった。イムトボールも笑いながらその闇に身を沈めて消えていった。残った魔物達も同じように消えた。

地面に片膝をついたカレンは、うつむき、無言で握りしめた右手

を地面に叩きつけた。3人はそのカレンの様子に、近づくこともできなかった。

それからしばらくして、カレン達4人はハティスの小屋に集まっていた。カレンはすぐにも環を探しにいくとしたが、それを3人が必死に止めた結果だった。

「それでは状況を詳しく教えてもらえんかな」

「はい」

ハティスの言葉にミラが返事をした。

「遠くからだったのであまりよく見えなかったんですけど、魔族の体になんて言うか、真っ暗な闇が現われて、それがタマキ師匠の腕をとらえていたというか飲み込んでいたというか」

「それでどうなった」

「その後はその闇が大きくなって、魔族の体から離れました。それで、タマキ師匠の体が完全にそれに飲み込まれて」

「消えたわけか。なるほど」

ハティスは腕を組んでしばらくの間考え込んだ。

「おそらくその魔族は魔力を含む力を吸収か、それともどこか別の空間に排出させて勇者を無力化したのだろう」

「それじゃあ師匠は今どこにいるんですか？」

「わからん。だが別の空間ということはないだろう。この地上のどこかにいるはずだ」

「場所はわからないんですか？」

「何か目印となるものでも持つていけばわかる可能性もあるが」

「師匠が渡した指輪じゃ駄目なんですか」

ミニツクの問いにハティスは首を横に振った。

「試してみたが、あれでは駄目だ。もっと強い力が宿っているようなものでなければ」

それを聞いたカレンは、自分の首にかけていた葉子の作ったアミユレットを外して、ハティスに差し出した。

「これはどうでしょうか。精霊の加護を受けた方が作ったもので、タマキ様も同じものを持っています」

ハティスはアミュレットを受け取って、それをよく観察した。

「うむ。これならばかなり正確な位置がわかるかもしれん。対となるものならば精霊の力が引き合う」

「時間は、どれくらいかかりますか」

「集中する必要があるから外で待っていてもらおう。なに、すぐにわかる」

ミラ、ソラ、ミニックは小屋の前に座り込んでいた。カレンは少し離れたところで腕を組んで立ち、遠くを見ていた。

「でもまさか、タマキ師匠がさらわれるなんて」

ソラは少し声を落としてそう言うため息をついた。

「僕達が行ったのがまずかったですかね」

ミニックも落ち込んだ様子でため息をついた。

「今更そんなこと言っちゃってしょうがないでしょ。今はとにかくこれからのことを考えないと」

ミラの言葉にソラとミニックはうつむいた。

「先輩、そうは言っても、あれだけの力を持つてる魔族に僕達がかなうとは思えませんよ」

「そんなもの、知恵と勇気でなんとかするに決まってるでしょ。どんな強い奴にだって絶対に弱点はあるし、力を合わせればなんとかなるって」

「そんな無茶な」

「無茶でもなんでもやるしかないでしょ」ミラはそこで声をひそめた。「あのカレン師匠の落ち込みぶりを見たら放ってなんておけないじゃない」

「確かに様子は変だよな」

「目の前であんなことがあったんだから、無理もないと思いますよ」
3人はカレンの様子を見た。カレンは少しも体勢を崩さず、相変

わらず腕を組んで遠くを見ていた。

ミラは立ち上がったが、ちょうど小屋のドアが開いた。

「勇者のいる場所がわかったぞ」

そう言ったハティスに、カレンは早足で近づいた。ミラ達3人もそれに続いた。

「どこでしょうか」

「これを見なさい」

ハティスはカレン達に見えるように地図を広げ、その一点を指差した。

「ここから3日ほどの距離にある城の廃墟だ。このあたりでは魔族が拠点にするのに一番都合が良さそうな場所だな」

「けっこう近い場所なんですね。すぐに向かいましょう」

ミラはそう言ったが、ハティスは首を横に振った。

「その前に、カレン。お前の記憶と力の封印を解かなくてはならん」
「わかりました」

カレンはうなずいた。ハティスは小屋の中に戻り、カレンもそれに続いた。あとの3人はその場で出発の準備を始めることにした。

椅子に座ってハティスと向かい合い、30分ほどが経過した。それまで何もなかったが、突然門が開いたかのように、様々な記憶の断片のイメージがカレンの頭の中に溢れた。ハティスはかざしていた手を下ろした。

「記憶の封印は解けた。どうだ？」

「いえ、まだ断片的なイメージばかりで」

「しばらく時間はかかるが、それはじきに落ち着く。それではこれから力の封印を解くぞ」

「はい」

ハティスは再び手をかざした。カレンは自分の中のかなにかが組み変わっていくような感覚を感じた。それが数分続き、カレンは自分の力をより強く感じるようになっていった。ハティス

は手を下ろした。

「お前の力に施しておいた封印を解いた。これで今までとは比べものにならない力が使える。だが、注意しろ。お前の混沌の魂は人間では耐えられない力を簡単に引き出すことができるのだ」

「わかつています」

「もし制御に失敗すれば、その身が滅びるだけでは済まない。混沌に飲まれてしまえば、人間としてのお前の存在は消え、悪くすると新しい魔族が誕生することになるかもしれん」

カレンは黙ってうなずいた。

「この6年間だ。お前が私と別れてすごした6年がお前を支える力になるだろう。決して自分を見失ってはいけないぞ」

「私にはやらなくてはいけないことがありますから、それまでは絶対に大丈夫です」

ハティスは強い決意を秘めたカレンの瞳を見つめた。

「それまでなどと言わずに、必ず戻って来るのだぞ」

「はい」しっかりとした返事をして、カレンは立ち上がった。「それでは出発の準備をします」

カレンは扉を開け、小屋から出て行った。ハティスはそれを椅子に座ったまま見送り、

大きく息をはきだした。その顔には深い疲労と憂慮の色があった。

「私にもっと力があればな」

救出へ

出発してから2日。城の廃墟まであと1日となった。カレンは明日の戦いに備え、自分の武器を1つ1つ丁寧に手入れをしていた。ミラ、ソラ、ミニックはそんな様子を見ながら夕食の後片付けをしていた。

「なんか雰囲気重い」

「姉さん、それはしょうがないよ。カレン師匠はタマキ師匠を助けることしか頭にないみたいだしさ」

「そんな時だからこそ、こうさ、もっと盛り上げていきたいじゃない」

「そんなこと言うのは先輩だけです。緊張感を持つてたほうがいいじゃないですか」

「あんまり張り詰めすぎるのはよくないでしょ」

「緊張感がないのはもっと困りますよ」

ミラはいきなり自分の持つている食器をミニックに押しつけた。

「ちよつと話してくる」

そう言つてカレンにどんどん近づいていった。

「師匠、明日のことなんですが」

ダガーに砥石をあてていたカレンは無言で顔を上げてミラの顔を見た。ミラは少し言葉に詰まったが、気合を入れて口を開いた。

「どうするんでしょうか、何か作戦は必要ではないんですか？」

「作戦ですか、相手のことも状況もわからないのに考えても無駄でしょう」

「それはそうですけど」

「タマキ様ならば、とにかく全力でぶつかるだけだ、とおっしゃるでしょうね。非常識だと思うかもしれませんが」

「いえ、そんなことはありませんけど」

ミラの答えにカレンは微笑を浮かべた

「無理はしなくていいですよ。自分でも非常識なことを言っているのはわかっていますから」

「非常識なんかじゃありません！」ミラは大声で宣言した。「私もタマキ師匠ならそう言うと思いますし、それは正しいと思います！明日はとにかく全力でぶつかりましょう！」

そうしてソラとミニツクのところに走って戻っていくと、同じ調子で2人に気合を入れた。カレンはそれを見て再び微笑を浮かべると、ショートソードを抜いて、その刀身をじっと見つめた。

翌朝、早く目を覚ました一行は手早くテント等を撤収して出発した。それから数時間後、城の廃墟が見えてきた。

「昔は立派な城だったんでしょうね」

ソラは廃墟となつて朽ち果てた城を見ながらつぶやいた。

「立派つて言つたて何100年も前の話でしょ。それより魔物の姿は見えない？」

「見えませんね。隠れてるんじゃないですか」

「行けばわかるでしょう」

カレンはそう言つて荷馬車を進めた。そして、崩れた城門前に到着した。カレンは馬を近くの木に結わえ、他の3人も警戒しながら馬車を降りた。

「魔物は見当たりませんね」

ミニツクは注意深く辺りを見まわしながらそう言つた。ソラは無言でうなずき、崩れた城壁をさわっていた。

「油断大敵、相手は魔族でとんでもない奴なんだから気をぬかないようにね」

ミラはそう言つて剣に手をかけ城を見据えた。だがカレンは特に警戒する様子もなく、足を進めた。ソラはそれを見てあわててカレンを追つた。

「カレン師匠、もっと警戒していかないと危険ですよ」

カレンはそれに振り向くことなく答えた。

「大丈夫ですよ。何があっても負けないようにしますからね」

口調は普段と変わらないが、有無を言わせない雰囲気があった。

3人は顔を見合わせて、どんどん進んでいくカレンに慌ててついていった。

そして城の内部に入っていた。ほとんど天井は抜けていて、実によく日光が入ってきていた。

「ほんと廃墟だね」

「当たり前のこと言っていないで、さっさと歩きなさい」

ミラは足元に転がるブロックを蹴りながらソラを振り返ってせかした。そうしているうちに、一行はかつては大きなホールであったと思われる吹き抜け状態になっている場所に到着した。

「よく来たな」

そこには、なぜか真新しい玉座に腰かけたイムトポールが待ち構えていた。カレンは無言で眼鏡を外し、ショートソードを抜いた。

「このふざけた魔族め！ タマキ師匠をどこにやった！」

ミラの大声にイムトポールは笑い、玉座から立ち上がった。

「それならここだ」

玉座に手をかけ、それを無理矢理回転させた。そこにはぐったりした環が縛り付けられていた。ミラ達3人は声を失った。カレンは険しい目でそれを凝視した。

「死んではいけない。この男の魔力と回復力は実に素晴らしいからな」

そう言つてイムトポールは玉座の向きを戻して、それに腰かけた。

「余興だ。少しは楽しませてもらおう」

イムトポールの足元から闇が前方に広がり、そこから魔物達が4人の行く手を遮るように這い出してきた。

「ミニツク、あれに向かってファイアウォールを。ソラは合図をしたらそれを巻き上げるように風を起こしてください。ミラ、あなたは2人を守るのが仕事ですよ」

カレンの指示に3人は少し戸惑ったようにうなずいた。そして、指示通りにミニツクが動き出した。

「ファイアウォール！」

炎の壁が魔物達に向かっていき、それが到達した瞬間。

「ソラ！」

「はい！ 風よ渦巻け！」

ソラの叫びと共に大きな風が炎を巻き上げ火柱となり、魔物達を巻き込んだ。その中からでも飛び出してくる魔物が少しだけいた。だが、それはカレンとミラにあっさり切り捨てられた。

火柱が消えると、這い出してきた魔物の半分以上は姿を消していた。ソラとミニックは思わず顔を見合わせた。

「本当に僕達がやったのかな」

ソラがそうつぶやくと、ミニックも同感といった顔でうなずいた。「あれを1人でもできるようになれたら、一流ですよ。ミラもいい反応でした」

カレンはそう言つて、1歩踏み出した。

「あとは私がやります。あなた達は自分の身を守ることに集中していてください」

カレンはイムトポールを睨みつけ、その瞳が赤くなった。ミラ達はただならぬ雰囲気を感じ、後ろに下がった。

「たしかイムトポールと言いましたか。タマキ様に手を出したことを後悔させて差し上げますよ」

闇のローブが出現し、カレンの体を包んだ。イムトポールはそれを見て失望したような表情になった。

「そんなものは私には通用しない」

それを聞いたカレンは口元にかすかな笑みを浮かべた。その眼光が一段と鋭くなり、瞳が赤から金色の輝きを帯び始めた。

「通用しないかどうか、確かめてもらいましょうか」

カレンの言葉と共に瞳の輝きが強くなり、闇のローブが開いた。

「すごい」

ミラは驚愕してそれだけ言った。ソラとミニックは言葉もなかった。カレンがまもっていた闇のローブは2つに割れ、風も受けずに、

まるで翼のようにその背中でたなびいていた。

さらにカレンはショートソードをイムポータルに向けると、それに力を込めた。今までと変わらない闇の大剣が現われた、だけのように見えた。だが、その大きなエネルギーの塊のようなものは徐々に収縮していき、まるで1本の、吸い込まれるような濃厚な暗黒の物質で作られたロングソードのようになった。

それを見たイムトポールは愉快そうな様子になり、玉座から立ち上がった。

「そうこなくては面白くない。お前のその力、じっくりと味合わせてもらおう」

「そんな口がきけるのも今のうちですよ。悪いことはありません、タマキ様を解放して消えなさい」

「これだけ面白そうなのがあるというのに、そのようなことができるわけあるまい？ 余計なことは考えずに、その力をぶつけてこい」

「後悔しますよ」

カレンは大きく息を吐き出し、イムトポールを見据えた。

力の真価

戦いはまず、残った魔物達が動き出して始まった。殺到する魔物達に、カレンは正面からゆっくりと足を進めた。

まずピットデーモンが飛びかかってきたが、それは暗黒の剣の一振りですぐに両断された。足を止めないカレンに、次々に魔物は襲いかかったが、どれも同じように両断されていった。イビルミストが上空から放った氷の牙も切り捨て、それに向けて剣を振ると、距離があるにもかかわらず、霧消した。

カレンはそのまま、魔物を切り捨てながら1歩1歩進んだ。ゆっくりと、だが確実に。そして、イムトポールまであと数歩のところまで迫り、それに暗黒の剣を突きつけた。

「こんな雑魚では相手になりませんよ。消えずにそこに座っているのなら、あなたが出てきてはどうです？」

「なるほど、それもおもしろい」

イムトポールは立ち上がり、カレンに向かって歩き出した。魔物達はそれに反応するかのように動きを止めた。イムトポールはそのまま足を進め、カレンの剣の目前に立った。

「さあ、その剣で私を斬るのだろっ」

カレンは暗黒の剣を引き、イムトポールの胸めがけて横薙ぎに振った。だが、その体は飛び上がり、その一撃を避けた。カレンは上を見上げると、すぐにその後を追って自分も飛び上がった。

「ほう、飛べるか」

イムトポールは壁を蹴り軌道を一気に変えた。カレンもそこ近い部分の壁を蹴り、それを追った。それが何度か繰り返され、3度目でイムトポールは壁を蹴ってから空中で静止した。カレンもそれには突っ込まずに、いくらか距離をとって静止した。

「ここまでついてくるとはな」

「お望みなら、抜かしてみせますが」

「おもしろい」

イムトポールはそう言つて自分の髪の毛を束ね、それを耄り取ると硬質化させて剣のようにしてカレンに向け、加速した。カレンはその切っ先を暗黒の剣で逸らし、上昇して突撃をかわした。

だが、イムトポールはその勢いそのまま、振り返りざまに硬質化した髪の毛を3発飛ばした。カレンも振り返ると同時に暗黒の剣でそれを次々に打ち払い、壁に背をつけたイムトポールに突っ込んでいった。そのままの勢いで暗黒の剣を叩きつけたが、イムトポールの剣がそれを受け止めた。

カレンは力を込め、それを押し込もうとした。イムトポールは薄ら笑いを浮かべながら、その暗黒の剣を少しづつ押し戻していった。「それがお前の全力か？ そんなことはあるまい、もっとだ、もっと力を見せてみる」

カレンは無言で暗黒の剣にさらに力を込めた。力は再び均衡し、そして、押し戻されたぶん以上にイムトポールの剣をじりじりと押していった。

「そうだ、それでいい！」

イムトポールはそう叫ぶと同時にカレンの暗黒の剣を弾いて上昇した。カレンもそれを追つて上空に飛び上がった。

それを見たミラは玉座に向かって走り出した。

「姉さんどうするの！」

「今のうちにタマキ師匠を助けるに決まってるでしょ！」

「そうですね」

ミニツクはその後を追つて走り、ソラも少し遅れて続いた。残った10体ばかりの魔物達がそれを阻止するために動き出し、その道を塞いだ。3人は足を止めた。

「2人とも、さっきのもう一度できる？」

「駄目ですよ。タマキ先生まで巻き込むかもしれない」

「1匹ずつ倒すしかないか」

「いいえ、手はあります。僕のもう1つの魔法なら、半分くらいは

なんとかできますよ」

「よし！ ソラ、あんたは私の援護」

「わかった！」

ミラは淡い光を放つ剣を構え、魔物達の右側から切り込んでいった。

「風よ！ 弾け！」

ソラは風の弾丸を放って、ミラが1対1で戦えるように援護をした。ミニツクは左側の魔物達の前に立ちはだかり、メイスを腰のあたりに構えた。

「お前達の相手はこつちだ。いくぞ！ サンダーブラスト！」

ミニツクのメイスが雷をまとい、それが横殴りに振られると、そこから雷のシャワーが魔物達に降り注いだ。それを浴びた魔物は口から煙を吐いて倒れた。

「ハッ！」

気合と共にミラの剣がスケルトンを砕いた。そこにオーガが襲いかかってきたが、それはソラの放った風で体勢を崩した。ミラは素早く体の向きを変えると、立ち直ろうとしているオーガの足を切りつけ、さらに下がってきた顔面を切り裂いた。さらにソラの火の玉がそこに直撃し、うずくまったオーガの背中をミラの剣が貫いた。

「これで全部」

ミラは剣を引き抜くと玉座に駆け寄って、すぐに環を解放した。

「タマキ師匠、しっかりしてください！」

環はミラに背中を支えられながら目を開けると、かすれた声で小さくうめいた。ソラとミニツクも心配そうにそれを覗き込んだ。

「俺の上着の内ポケットに、カードが2枚ある。それを」

ミラはすぐに環の上着に手をつ突っ込んで、言われた通りにカードを2枚取り出した。

「これをどうすればいいんですか？」

「俺にかざして、開放と云えばいい」

「はい」

ミラは2枚のカードを環にかざした。

「開放！」

2枚のカードが光になり、それが環の体を包んだ。その光が消えると環は自分の力で体を起こした。

「まったく、ひどい目にあつたな」

環はさっきまでの弱々しい様子ではなくなっていた。3人はそれを見て驚いたが、ミラが一番最初に立ち直った。

「大丈夫なんですか？ それに、今のカードは」

「1枚は俺の魔力を込めておいたカードだよ。もう1枚はインスタントスペルカードって名づけたカードで、1回だけ決まった魔法が使える。今のはヒーリングだ」

それを聞いたミニツクは驚いた表情を浮かべた。

「そんなものがあるんですか。まさか先生が作つたとか」

「そう、俺が作つた」

環はそう言つて立ち上がり、上空を見上げた。

「伏せろ！」

3人が伏せると、その目の前にイムトポールとカレンが落ちてきた。環だけは立つたままその2人を見ていた。どちらも目立った傷は負っていなかった。そして、その顔が環に向けられた。

カレンは安心したような表情を浮かべ、イムトポールは不思議そうな表情を浮かべた。

「なぜお前が立ち上がつていられる？」

環は笑顔で指を振った。

「悪いけど、俺には切り札がいくつかあるんだ」

「なるほど、だが完全には回復していないな」

イムトポールが環のほうに体を向けると、カレンがそれを遮るように動いた。

「タマキ様、ここは私に任せてください」

環は今までとは違うカレンの姿を見て、少し眉をひそめた。

「カレン、大丈夫なのか？」

「大丈夫です。必ず、勝ちます」

カレンは暗黒の剣を構えた。環はそれを見て頭をかいいた。

「まいったな。まあ俺もこんな状態じゃ満足に戦えないし。ここはカレンに任せるよ、頼んだ」

「いいんですか、タマキ師匠？」

ソラは心配そうに聞いたが、環はその肩を安心させるように叩いた。

「カレンなら大丈夫だと思うよ。今の状態の強さは、俺よりもソラ達のほうがよく見てるだろ」

「そうですよね」

ソラはうなずいてカレンを見た。ミラとミニックも同じようにした。

「俺達は下がっていいよう」

環は手を上げて3人を下がらせた。カレンはその様子を一瞥すると、イムトポールと向かいあつた。

「お前1人で私の相手をするのか。だが、そのためにはもっと力が必要だぞ。できるかな？」

イムトポールの言葉にカレンは暗黒の剣を握る手に力を入れた。

ミラ達3人はそれを見て息を呑んだ。場を緊張した雰囲気支配した。だが、それは環によって破られた。

「そのまま戦えばいい、それで勝てるよ。リラックスしていこう」
その気楽な声援に、カレンは口元に笑みを浮かべた。

目覚める闇の力

先にしかけたのはカレンだった。垂直に上昇すると、下降しながらその勢いでイムトポールに突撃した。それは髪の手で受け止められたが、カレンはイムトポールの体ごとそのままの勢いで押し込んでいった。

イムトポールはそれをいなして飛び上がった。カレンは勢いを殺さずに飛び上がると、壁を蹴ってそれを追った。そこに硬化した髪の手が3発飛ばされた。カレンは闇をまとったナイフを投げそれを1発弾くと、ダガーを逆手で抜いて残りの2発を振り払った。

だがそれについてイムトポールが急降下して、真上から髪の手を打ち下ろした。カレンはそれを暗黒の手でなんとか受け流して交錯した。カレンはなんとか体勢を立て直したが、床を蹴ったイムトポールがすぐに下から飛び上がってきた。

「くっ！」

今度は受け流せず正面からそれを受け止めた。そのまま勢いに押され上昇していったが、カレンはイムトポールの体を蹴り、なんとか距離をとった。

「さっきよりも動きが鈍いな。勇者が目覚めて気が抜けたか」

「くだらない挑発はやめてはどうですか。私の力を暴走でもさせようとしているのかもしれませんが、無駄ですよ」

「そのようだな。小細工はもうやめだ」

そこでイムトポールの雰囲気が変わった。髪の手が広がり全身を包み、その大半が体に絡み付いてそのまま一体化した。今までの長髪の姿とは変わった短髪の魔族の姿が現われた。

「これ以上まわりくどいことはしない。お前の力のあるべき姿に目覚めさせてやる」

「今これが、あるべき姿ですよ」

カレンはそう言って動き出そうとしたが、イムトポールはそれよ

りもはるかに速く動き、カレンの暗黒の剣を弾いた。そのまま反対側の壁を蹴り、カレンの背後に迫った。なんとか体勢を立て直したカレン暗黒の剣を振るったが、イムトポールはそれをかいくぐると上昇した。

カレンはすぐに後を追おうとしたが、そこにイムトポールが急降下してきた。それはなんとか暗黒の剣で受け流し、ダガーを振るったが、それは空を切った。そして、すぐに下から上昇してきた突撃によってそれは弾かれた。

「さあどうする？ お前の今の力では勝てないのはよくわかっただろう」

上空から見下ろすイムトポールにカレンは笑ってみせた。

「そうでもありませんね」

カレンは暗黒の剣を構えたが、それは不安定になり、かろうじて剣といえるような形の巨大な闇の塊になった。

その闇の塊が振るわれると、衝撃波がイムトポールを襲った。体勢が崩れ、カレンが突っ込んでいくと後ろに飛んだ。そのままカレンはそれを追って闇の塊を横に薙いだ。壁がごっそりと削られたが、イムトポールは上に飛んで回避していた。

すぐに上空で方向転換したイムトポールが急降下したが、カレンは壁を蹴ってそれを回避するとすぐに下に向かって闇の塊を振った。衝撃波が床をえぐったが、イムトポールは転がってそれを避けた。

そこにカレンは急降下して闇の塊を叩きつけた。だが、それはイムトポールがかかげた両手の間に発生させた闇に受け止められた。

「素晴らしい力だ。この私でもこれは吸収しきれん」

その闇から力が放出され、カレンは上空に打ち上げられた。体勢を立て直す前に、イムトポールが飛び上がり、カレンの首をつかんだ。

「予定とは違うが、それでもかまわん！」

イムトポールの体から闇がほとばしり、それが首をつかむ手からカレンの体に流れ込んだ。

「ぐう！」

カレンはうめきながら闇の塊を振るおうとしたが、その瞬間さらに闇がその体に流れ込んだ。

「うぐうがああああ！」

その体が強張り、イムトポールは満足気な笑みを浮かべたが、そこに1枚のカードが滑り込んできて、光と共に爆発した。カレンの体は空中に投げ出されたが、跳び上がった環が受け止めて着地した。

「カレン、大丈夫か」

環が聞いてもカレンは目を閉じて苦しそうにうめいているだけだった。

「邪魔をしないでもらおうか！」

そこにイムトポールが突進してきたが、環は落ち着いて腰のカード入れに手を伸ばし、そこにあるカードをまとめてつかんだ。

「開放！」

声と共にカードを目の前にばら撒いた。そこにイムトポールが飛び込み、腕を伸ばしてきた。その手が環とカレンにとどきそうになった瞬間、ばら撒かれたカードが光と共に一斉に爆発した。

イムトポールは爆発で吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。環はカレンの様子をもう一度確認したが、やはり苦しそうにうめいているだけだった。

「力の暴走だな。うまくいくかわからないけど、やるしかないか」

環はそうつぶやくと、カレンの後頭部に片手をそえると、自分の額をカレンの額と合わせて目を閉じた。そのふれ合った額から闇が流れ出し、それが環の体を包んでいった。闇はそのまま環の体に染み込むように消えていった。

そして、闇の後は光が額を中心に広がり、2人を包み込んだ。だが、イムトポールに環が蹴り飛ばされると同時に、その光も消えた。環は地面を派手に転がったが、なんとか膝について状態を起こした。

「余計な邪魔をしてくれたな、そんなにまた痛めつけられたいか」

イムトポールは髪の手を環に向けながら迫ってきたが、環は頭を

押さえ、少し顔をしかめながらも笑った。

「そうでもないさ、開放！」

カード入れから2枚のカードを取り出し、それを続けてイムトポールに向かって投げつけた。1枚は髪の手で切られ爆発し、もう1枚は後ろにそれた。

「いつまでもこんなおもちゃが通用すると思うな」

イムトポールは環の目の前で足を止め、髪の手を振り上げた。だが、爆音と共にカレンが猛スピードでその背後に迫り、ショートソードで斬りつけ、そのまま体当たりでイムトポールの体を突き飛ばした。

「まったく、あのカードは便利なものですね」

元の瞳に戻っているカレンはそう言いながら、環に手を差し出した。環はその手を握って立ち上がった。

「まあ、金庫番にはいい顔されないけどね」

「当然です。スペルカード1枚で魔法1発などというのは非常識ですよ」

「黙れ！」

2人の会話をイムトポールの怒声が遮った。環とカレンを見ると、それは背中からどす黒い血を流し、顔を歪めて立っていた。

「くだらないおもちゃと、そんななまくらで私を傷つけるとは、いまいましい奴だ」

イムトポールの怒りにも環は冷静に微笑を浮かべた。

「あんた、怒りっぽくて駄目だな。ちよつと自分の思い通りにならなかったからって、それはないだろ。このカードは俺の切り札だし、カレンの手で切られてなまくらとはほど遠いぜ。そこらへんはちゃんと理解してもらいたいね」

「お前達は生かしておくように言われていたが、気が変わった。今ここで殺してやるう」

イムトポールは両手を広げ、自分の前に闇を作り出した。そしてその中に足を踏み入れ、姿を消した。環はそれを見つめながら口を

開いた。

「カレン、どうも俺の頭の中が混乱してるんだけど、そっちはどうだ」

「私もです。どうやら記憶がおかしくなっているようで、見たことのない景色が浮かんできます」

闇の中から3倍くらいの大きさに膨れ上がった足が出てきた。

「俺もだ。見たことのないはずの記憶が浮かんでくる。俺の育った世界とは違う世界の記憶だ」

「同じです。私にもこの世界の記憶でない、違う世界の記憶が見えます」

さらに、鋭い爪を持った太い腕が闇の中から現われた。

「俺たちの記憶が混ざったのかな」

「かもしれない。私の余分な力をタマキ様が体に取り込んだ時に、何かが起こったのでしよう」

「あいつに蹴られたからかもしれない」

胴体と頭部が姿を現した。それは単純にイムトポールが大きくなったものではなく、体に巻きついていた髪はうろこのようになり、頭に残されていた髪はまとまり、3本の角になっていた。顔は今までの人間のようなものではなく、醜い異形の容貌になっていた。

「死ぬ準備はできたか？」

今までよりずっと低い声が告げた。

2人の底力

「タマキ様、どの程度戦えますか」

「でかい魔法を連発とかは無理だな。さっき取り込んだ力が使えるといいんだけど」

「それはあまり計算はできませんね」

「カレンのほうはどうなんだ」

「私は大丈夫です。ただ、あまり長時間は戦えそうにありません」

「なら、決めるところで一気にいかないと」

「相談は終わったか」

イムトポールの声が2人の会話を遮った。環はそれに笑顔を向けた。

「まだもう少しだ。あんたを確実に倒さなきゃならないからな」

そう言ってカードを投げつけた。だがイムトポールはその爆発をもっともせず、ゆっくりと動き始めた。

環は魔力を全身に巡らせた。カレンは瞳を金色に輝かせ、暗黒の剣と闇の翼を作り出した。2人は左右に別れて走った。イムトポールは2人の動きを確認するように首を動かし、腕を上げた。その腕が振り下ろされると、そこから放たれた衝撃波が環を襲った。

「あぶねっ！」

環はそれをなんとか横っ飛びで避けたが、すぐに次の衝撃波が襲ってきた。

「プロテクション！」

なんとかそれは魔法の盾を展開して防いだが、それでも環は後ろに数メートル押された。イムトポールはさらに衝撃波を放とうと腕を振り上げたが、カレンが横からその足に斬りかかった。イムトポールは素早くそれに反応し、振り上げた腕をカレンに向かって横殴りに振るった。カレンは攻撃を止め、上に飛んでそれをかわした。

「3倍ライトニングボルト！ ダブルだ！」

そこに環が左右の手で雷の矢を放ちながら走ってきた。イムトポールは左右の腕を振るってそれを打ち消したが、環は床を蹴って跳び上がり、その顔面に回し蹴りを叩き込んだ。だが、鈍い感触だけで、蹴りが当たった顔はほんのわずかしかな衝撃を受けている様子しかなかった。

イムトポールは環の足を掴み、振り回して壁に投げつけようとしたが、環はその腕に手を当てた。

「バースト！」

爆発で環を掴んでいた手が緩み、環の体は投げつけられることなく放り出された。そこにカレンが急降下し、イムトポールの後頭部に暗黒の剣を振り下ろした。しかし、それはイムトポールがかかげた腕に受け止められた。

「2倍！ バースト！」

そこに空中から爆発で加速した環が飛び込んできた。そのままイムトポールの足元に潜り込むと、その太い足に手を当てた。

「5倍！ バアアースト！」

その爆発でイムトポールの足がゆらいだ。カレンは暗黒の剣を受け止めていた腕を蹴り、後方に跳んで床に着地すると、すぐにその床を蹴って低い軌道でイムトポールの背後から迫った。そして、その暗黒の剣が太い腕の付け根を切った。

「ウグウグウオオ！」

凄まじい咆哮と共にイムトポールは腕を振り回し、環とカレンを弾き飛ばした。2人はなんとか着地し、態勢を立て直した。その位置関係はちょうど前後からイムトポールを挟み込むような形になった。

「ファイアボール！」

まず環が火の玉を放った。今までほとんど足を動かさなかったイムトポールだったが、いきなり上空に跳び上がった。そのまま環を踏み潰そうと落下してきたが、環は前方に転がってそれをかわした。イムトポールは素早く振り返り、環を攻撃しようとしたが、そこ

に正面からカレンが突撃してきた。腕が振るわれたが、カレンはそれをぎりぎり回避して、そのままイムトポールと交錯した。カレンはそのまま直進しながら上昇し、壁に足を着けた。

イムトポールはそこに顔を向けると、口を開けた。そこから一条のエネルギーが放たれ、壁に向かった。カレンは壁を蹴ってそれをなんとか避けたが、そのエネルギーは壁を削りながらカレンを追った。

だが、それに闇の刃のようなものが投げつけられ、そこから爆発が起こった。それによってイムトポールの口は塞がれ、カレンを追うエネルギーは止まった。

「うまくいったな」

そう言った環が右手を握ると、その腕を炎のように揺らめく闇が包んだ。

「お前がカレンの力を暴走させようとした力だ。なかなかのもんだろう？」

環が右腕を振ると、その闇が飛び、大きな刃のような形になった。イムトポールは片手を出し、それを受け止めようとしたが、それを受けると同時に体が後ろに押された。もう片方の手も添えたが、それでも止められず、どんどん押し込まれていった。そこにカレンが暗黒の剣を構え、降下の勢いそのままに迫った。

「小癪な人間どもがあああああああ！」

その絶叫と同時に、イムトポールは闇の刃を強く握ると、それを間近に迫ったカレンに叩きつけた。カレンはなんとか暗黒の剣でそれを防いだが、その衝撃で環の立っているところまで飛ばされ、体勢を崩しながら着地した。

「なんか怒らせたみたいだな」

「好都合ですね。隙ができるはずですよ」

そこにイムトポールが一気に跳んできた。だが環は右腕を闇に包めると、それでその巨体を殴りつけた。イムトポールは跳ね返され、立っていた地点まで転がっていった。カレンは暗黒の剣を闇の

塊に変化させ、立ち上がろうとしているところに飛び、強烈な一撃を加えた。イムトポールはさらに壁際まで吹っ飛ぶことになった。

「カレン！ あれをやるぞ！」

「はい！」

カレンは環の傍らまで飛んで戻り、環が差し出した右手を握ろうとした。

「グガアアアアアアアアアアアアアア！」

イムトポールは這いつくばったまま、顔だけを2人のほうに向けると、口を自分の顔くらいの大きさまで開いた。そしてそこからはさらに太いエネルギーの塊が光線状に放たれた。

環とカレンはそれをなんとか左右にかわしたが、体勢を立て直す前に4つ足で飛んだイムトポールが迫った。2人はめちやくちやに振り回された腕に弾き飛ばされた。そのままの勢いでイムトポールは環に跳びかかっていった。環はそれをなんとか両腕で受け止め、さらにその両腕を闇に包ませた。だが、それでも少しずつ押されていった。

「潰れる！ ツブレロ！」

イムトポールは絶叫しながら環を潰そうと、さらに力を込めた。しかし、そこにカレンが滑り込んできた。

「ハアッ！」

気合を込めた暗黒の剣がのしかかるイムトポールの胸に深々と刺さった。そして環の体に左手を回した。

「飛びますよ！」

「よし、10倍！ バースト！」

魔法を使うと同時に、環も右手をカレンの体に回した。大爆発とカレンの力で、2人はイムトポールを上にしたまま、ものすごいスピードで上昇した。

「タマキ様、剣を握ってください！」

環はカレンの右手に自分の左手をかぶせて剣を握った。

「今、心と！」

「魂を1つに！」

剣に2人の力が注ぎ込まれ、イムトポールの体を強大な闇の剣が貫いた。その背中からは形を成せないほどの闇のエネルギーが噴出していた。

「光と共に！」

「消え去れええええええ！」

2人の重ねられた手から光が溢れ、闇は光となって剣を中心に爆発的に広がっていった。その光が消えた時、イムトポールの体は跡形もなく消滅していた。

環とカレンは互いの体に手を回したまま、ゆっくりと床に降り立ち、その手を放した。

「師匠ー！」

ミラ、ソラ、ミニツクの3人が笑顔で2人のもとに走ってきた。

「3人とも無事だったみたいだね。けっこう派手にやったから巻き込まれたんじゃないかと思ったよ」

環は少し疲れたような表情だったが、明るい笑顔だった。

「いえいえ、それは大丈夫です」

ミラは手を振って自身たっぷりに答えた。それから目を輝かせてさらに口を開いた。

「それでタマキ師匠！これからどうするんですか？ さらに魔族討伐の旅をつづけるんでしょうか？」

「別にそういうわけじゃないんだけど」

環がカレンをちらつと見ると、カレンは黙ってうなずいた。

「まあ、旅の目的は果たせたみたいだから、いったん帰ろうと思ってる」

「ノーデルシア王国にですね！ そういうことならすぐに出発しましょう先生！」

そう言ったミニツクが1人で走り出した。環はその背中を見ながら、上空をちらつと見上げ、ゆっくりと歩き出した。

2人の底力（後書き）

ここまでが第2部になります。

勇者の危機

イムトポールとの戦いから4ヶ月。環達はノーデルシア王国に戻ってきていた。ミラ、ソラ、ミニツクの3人は環の弟子ということもあって、特に何の問題もなく受け入れられていた。

ミラとソラはエバンスと葉子の夫妻に気に入られ、剣術と精霊の使い方に関して指導されていた。ミニツクは環の助手のようなことをして、魔法に関する理解を深めていた。

そんなある日、環はいつものように自室に引きこもっていた。ミニツクは必要な物を買いくつため、少し離れた町まで出かけていて留守にしていた。

「タマキ、いるのか？」

ノックの音とエバンスの声がした。

「ああ、いるよ。入るんなら勝手に入ってくれ」

環が答えると、エバンスがドアを開けて部屋に入ってきた。葉子も一緒だった。

「どうしたんだよ2人で」

環は椅子を用意しながらそう聞いたが、エバンスは笑顔で首を横に振った。

「いや、特別なことがあるわけじゃない。ただ様子を見に來ただけだ」

「そうかい、まあ座ってよ」

エバンスと葉子は環の用意した椅子に座った。まず口を開いたのは葉子だった。

「環君、カレンと混ざった記憶っていうのはどうなったの？」

「情報は交換してますけど、どうも混ざった時のショックでどっちも断片的になってるんですよ」

「そうなの。それは大変ね」

「まあ別に、それほど大変でもないですよ。俺の記憶だってほんと

いたら消えそうだったし、カレンも記憶が取り戻せなくてもそんなに気にしてる感じでもないし」

「本当に平気なのか？」

エバンスは心配そうに聞いたが、環は笑いながら手を横に振った。
「平気だよ。カレンの記憶だったら、いざとなれば封印した張本人を締め上げればいいんだからさ」

「大賢者か。一体何のために記憶の封印などということをやっているのだろうか」

「知られたくないことでもあるんじゃないかな。昔何かやらかしたとか」

「カレンは長い間一緒に旅をしていたのだから？　なにかそういう記憶はないのか？」

「いや、それ以前に、カレンは全部記憶が戻ってるわけじゃない。

あの爺さんに出会う前の記憶はないみたいなんだ。それは別口の封印か、それとも元からなのかもしれない」

「生まれた場所も、子供の頃のこと何も憶えてないのね、カレンは」

「いえ、特に問題ありませんからご心配なく」

いつの間にか部屋に入ってきていたカレンが、心配そうな表情の葉子に声をかけた。

「びつくりしたー、カレンいつ入ってきたの」

「今ですよ。昼食をお持ちしたのですが、お邪魔だったようです」

「いや、悪いが私達のぶんも持ってきてくれ、たまには食事を共にするのもいいだろう」

「かしこまりました。お2人のお食事もすぐに用意いたします」

カレンは2人ぶんの食事をテーブルに置いてから一礼すると、部屋から出て行った。しばらくして、カレンが同じものを持ってくると、ささやかだが、平和な食事が始まった。

その日の夜。夕食を済ませた環は、カレンと向かい合って椅子に

座ってくつろいでいた。

「記憶の照合は大体終わったと思うけど、大したものはないね」

「いえ、旅でどこに立ち寄ったかという記憶は重要かもしれません。調べる手がかりになります」

「調べると言っても、何を調べるのかわからないとどうしようもないよ」

「そうですね。動いたとしても無駄が多くなるでしょうし」

「そういうこと。それに今はのんびりすごしたいしさ」

「それもいいかもしれませんが。それでは、そろそろ私は失礼します」

カレンは立ち上がって一礼すると、体の向きを変えた。しかし、背後からの音ですぐに振り返った。環が椅子から立とうとした時にバランスを崩したらしく、膝についていた。カレンはすぐにその側に駆け寄り、体を支えた。

「どうしました」

「いや、なんか立ちくらみかな」

環はそれだけ言ったが、明らかにそれよりも状態は悪そうだった。カレンは環の体に手を回して、ゆっくりベッドまで運んだ。

「無理に動こうとしないでください」

そう言いながら環をベッドに横たえた。環は乱れた息をして、天井を見つめていた。カレンはその手を握って、耳元で小さな声で語りかけた。

「タマキ様、どこが悪いのか、わかりますか」

「いや、苦しい、俺の体のなかで、何かが、走りまわってる、ような感じが」

苦しそうな途切れ途切れの言葉を聞いたカレンは、うつむいて考えこんむような様子を見せた。それから、手を握っているのは逆の手で環の額に手を当てて、目を閉じた。しばらくそのままの体勢でいてから、ゆっくり目を開けた。

「理由はわかりませんが、タマキ様の中で、力のバランスが崩れて

いるようです。少し我慢しててください、エバンス様ならこれを緩和できるかもしれません」

カレンは立ち上がり、急いで部屋を出て行った。そしてすぐにエバンスを連れて戻ってきた。

「タマキ！ 大丈夫なのか！」

エバンスはすぐにベッドに駆け寄り、環を覗き込んだ。その苦しそうな様子を確認すると、すぐにカレンのほうに振り返った。

「これはどういうことだ」

「タマキ様の中の力のバランスが崩れていると思われます。前に戦った魔族の破滅の力を私から取り込んだことが影響しているのかもしれない」

「しかし、それは4ヶ月も前のことだろう」

「はい。ですから原因かどうかはわかりません。ただ、今の症状には確実に影響を与えていると思われます」

「そうか、それで私を呼んだのだな」

エバンスはそう言うのと、環の体に両手をかざした。

「水の精霊よ。この者の内にある破滅の力を抑える力を我が手に」かざした両手を霧が包み始め、それは大きな手のような形になった。そこからその霧が環の体に伸びていって、体を覆うように広がっていった。環の様子は少しずつ落ち着いていった。

「タマキ師匠が倒れたった本当ですか！」

そこに、葉子とミラ、ソラが部屋に飛び込んできた。ミラとソラはすぐにベッドに駆け寄ろうとしたが、カレンに止められた。

「今、エバンス様が精霊の力で症状の緩和をさせています。集中を乱してはいけません」

「精霊の力なら、葉子様もソラも使えるじゃありませんか。1人より3人でやったほうがよくはないですか？」

ミラは興奮気味でそう言ったが、それに対しては葉子が口を開いた。

「癒しの力を使えるのは水の精霊だけなの。私の大地の精霊、ソラ

君の風や火の精霊にその力はないのよ」

「そうなの？」

話を振られたソラはうなずいた。

「そうだよ。だから水の精霊は特に神聖なものとされてるんだ。話さなかったっけ」

「聞いてないって」

「2人とも、静かにしなさい」

カレンの厳しい一言で、ミラとソラは黙った。しばらくの間、沈黙がその場を支配したが、エバンスがかざしていた手を下ろしてその沈黙を破った。

「とりあえず落ち着いたようだ。だが、原因がわからない」

エバンスは難しい顔をして、今は落ち着いて目を閉じている様子の環をじつと見た。

「何か、外からの働きかけがあつたということでしょうか」

カレンの質問にエバンスは静かに首を横に振った。

「わからない。タマキの体内の力はかなり乱れていたが、こんなことは少なくとも人間の力ではできないはずだ。これは、嫌な感覚だな」

その不吉な言葉に、一同は黙りこんだ。

「魔族の仕業つていうことはないんでしょうか」

ミラがそう言ったが、エバンスは首を横に振った。

「その可能性もあるが、おそらく違う。魔族ならばタマキの中にある破滅の力だけしか操れないだろう。だが、今は全ての力が乱れていた」

エバンスは環をじつと見つめた。

「これはむしろ病に近いものかもしれない。しかし、魔力の乱れで人が倒れるなどというのは聞いたことがない」

「しかし、タマキ様は特別です」

カレンはそう言って横たわる環を見つめ、ゆっくりと目を閉じた。

希望を探す旅立ち

環が倒れてから2日が経った。症状は落ち着いていたが、目は覚めず、ずっとベッドに横たわっていた。その間、カレンは必要な世話をするためにだけに部屋を訪れ、それ以外の時間は環の症状の原因を調べることに力を注いでいた。

だが、それは何の成果もなかった。資料室には役に立つものはなく、城内を探索しても怪しいもの等は何も発見できなかった。その夜、それでもカレンは疲れた様子もあきらめた様子もなく、今は環の枕元の椅子に座り、その様子を見守っていた。そうしていると、ノックの音が響いた。

「はい、どうぞ」

カレンが立ち上がって返事をする、ドアが静かに開けられ、葉子が入ってきた。

「まだ休んでいなかったの」葉子は心配そうな表情をカレンに向けた。「環君が倒れてからずっと休まずに調べものをしてたりしてたんでしょう？　早めに休んでおかないと体がもたないわよ」

「いえ、これくらいのことなら大丈夫です。ヨウコ様こそ、色々と公務もあるのですから、お早めに休まれたほうがよろしいのでは」「こうして様子を見に来ないと、エバンスも私も心配でしょうがないの」

「そうですね。残念ですが、今のところ状況がよくなる様子も、改善する手段もありません」

カレンの答えに葉子はため息をついた。

「そうなの。でもカレン、あなたは何か考えがあるんじゃないの？」葉子の問いにはすぐに答えず、カレンは環の顔を見つめてから口を開いた。

「はい、考えはあります」

それだけ言って、内容までは説明する気はないようだった。葉子

もそれ以上の答えは求めなかった。

「それじゃ、私は戻るから。カレンもちやんと休まないと駄目よ」
それだけ言うと、葉子はカレンを残して部屋から出て行った。カレンは再び椅子に座り、しばらくの間、何かを考えているような様子で環の寝顔を眺めていた。

翌朝、カレンは狭い自室で自分の旅の装備をベッドに広げ、丁寧に手入れをしていた。それが一通り終わってから、鏡を適当な場所に立てかけて、肩くらいまである自分の髪の毛を左手でまとめながら、右手でダガーをつかんだ。

そのまま一気に自分の髪の毛をダガーで切り落とした。その後は鏡を見ながら、何とか格好がつくようにダガーを使って髪を細かく整えた。それから侍女服を脱ぎ、ベッドに広げていた旅装を手早く身に付けていった。

数分後には、侍女としてのカレンではなく、旅の剣士としてのカレンの姿があった。そのままドアを開け、まっすぐ環の部屋を目指した。すれ違う人は、カレンの格好と、その大雑把に切られた髪に驚いたような表情を浮かべていた。

カレンはノックもせずに環の部屋のドアを開けて中に入った。部屋にはミラとソラが来ていた。2人はカレンの姿に驚いたようで、しばらくの間、何も言えなかった。

そんな2人にかまわず、カレンはベッドの側に行くと、目を閉じている環の手を両手で優しく包み込んだ。

「タマキ様、私は旅に出ようと思います。必ずいい報せを持って戻りますから、それまで待っていてください」

それだけ言っ、カレンは手を放すと部屋から出て行こうとした。ミラとソラは慌ててその行く手を遮った。

「ちよつと待ってください。旅にでるなら私達も一緒に行きます！
というか、なんで旅に出るんですか？」

カレンは立ち止まって、2人の顔を見た。

「ハティス様を探しに行くんですよ。大賢者と言われたあの方なら、この状況に関しても何かわかることがあるかもしれませんから」

「そういうことなら私達も一緒に行きます！」

ミラはソラの腕をつかんで力強く宣言した。ソラはまだ戸惑いながら口を開いた。

「そうは言っても、あの賢者って言う人が今どこにいるかはわからないんじゃないですか？」

「それなら心配ありませんよ。私の記憶によれば放浪癖のある方ですが、旅のルートは大体決まっていますし、拠点にしている場所はそれほど多くありませんから、そこを当たっていけば必ず見つけれはるはずですよ」

「なるほど、わかりました。すぐに準備をしてきますから待っていてください！」

ミラは急いで部屋を出て行った。ソラはすぐには追わなかった。

「あの、僕達がついていってもいいんでしょうか？」

「あなた達も強くなりましたからね。こちらから頼みたいくらいです」

「はい！ それで、集まる場所は」

「裏の門の前にしましょうか」

「わかりました！」

ソラも勢いよく部屋を飛び出していった。カレンはもう一度環の顔をよく見てから、静かに部屋を出て行った。

部屋を出たカレンはまっすぐエバンスの執務室に向かった。緊急ということでは半ば強引にすぐに取り次がせた。何かを相談していたエバンスとロレンザは部屋に入ってきたカレンを見て、少し驚いた様子だった。

「どうしたんだその格好は」

「それにその髪は、何かあったのですか？ カレン」

カレンは黙って一礼してから、顔を上げた。何かを決意したような、鋭い表情だった。

「これから、旅に出ます」

その表情と声に、エバンスは姿勢を正し、カレンの顔をまっすぐに見据えた。

「タマキのことで必要なことなのか」

「はい」

エバンスはしばらくの間、机に目を落として考えているようだった。そして、その目を上げると、力強く首を縦に振った。

「わかった。必ずタマキを救う手段を見つけてきてくれ。必要なものがあれば、何であれ持っていくのを許可しよう」

「ありがとうございます」

カレンは入ってきた時と同じように頭を下げた。そこにロレンザが歩み寄っていった。

「カレン、こちらのことは心配せず、しっかり使命を果たしなさい」

「はい、よろしくお願いいたします」

そう答えるとカレンは頭を上げ、部屋から出て行った。ロレンザはそれを見ながら、口の中で何かをささやいた。エバンスはそれに気がついた。

「どうした？」

「カレンの旅の幸運を祈っていました」

数時間後、カレンが指定した場所にはミラとソラが大きな荷物を足元に置いて待っていた。そこに、荷馬車に乗ったカレンがやって来た。バーンズも一緒だった。

「2人とも準備はできましたか」

「はい、ばっちりです。それより聞いてくださいよ、ミニックにも声をかけてやったんですけど、僕はタマキ先生の側についてる、とか言っただけなんですよ」

「そうですか。それもいいかもしれませんね」

カレンはそれだけ言って、バーンズと一緒に荷物の整理と積み込みを始めた。ミラとソラもそれを手伝い始めると、そこにミニック

が何か言いながら駆けつけてきた。

「ああよかった。まだ出発してなかったんですね」

ミラは怪訝そうな顔で息を切らしているミニツクを見た。

「あんた、一緒に来ないんじゃないの？」

「いや、ミラ先輩、それがタマキ先生が目を覚ましたんですよ」

その一言にその場にいた全員が手を止めた。

「目を覚ましたって！」

ミラはミニツクに掴みかかった。だが、ソラがなんとか引きはなした。

「姉さん落ち着いて。それで、タマキ師匠はどうなんだい？」

「起き上がれはしないくらいだけど、意識はちゃんとしてますよ。」

それでカレンさんのことを話したら、お前も一緒に行けって言われて」

ミニツクはそう言いながら、環がつけていたカード入れを取り出した。

「それで、これを持って行けて、渡されたんです」

カレンはそれをミニツクから受け取り、中身を確認してからベルトに取り付けた。

「ところでミニツク、あんた荷物は」

ミラにそう言われ、ミニツクは背負っていた2つの袋を地面に下ろした。

「僕の荷物は全部ここに入ってますよ。それより、行くと決まったからにはすぐに出発しましょう」

それから、自分の荷物を持って荷馬車の荷台に乗り込んだ。それから少し作業を続け、全ての荷物の積み込みは完了した。

「これで全部ですね」

バーンズは手をたたきながらカレンにそう言った。

「はい。わざわざ手伝っていただいてありがとうございます」

「なに、カレン殿の頼みと勇者様のためですからね。できれば私も同行したいところですが」

「いえ、バーンズ様にはタマキ様を守っていただかなくては
けません」

「わかりました。私が全力でお守りします。では、旅のご無事を願
っています」

「くれぐれもお願いします」

カレンとバーンズは固い握手をした。それからカレンは御者台に
上り、荷馬車を出発させた。

「カレン師匠、1つ聞きたいんですが」

しばらくしてから、ミラが後ろから質問をした。

「なんですか」

「なんでわざわざバーンズさんにタマキ師匠のことを頼んだんです
か？」

「それは、あの城で一番信用できるのがエバンス様とヨウコ様、そ
して、バーンズ様だからですよ」

ミラはその答えに納得したような納得していないような微妙な表
情をしていた。カレンはそれにはかまわず、城を振り返ることもな
かった。

修行の成果

旅立ちから10日が経っていた。その間1つの村に立ち寄ったが、基本的には全て野宿だった。カレンは全く平気な様子だったが、他の3人には少々疲れが見えた。

「カレン師匠、そろそろどこかちゃんとしたところに泊まりませんか？」

ミラは荷馬車に寝転がりながらぼやき気味に言った。

「それなら、今日中に村に着くはずですよ。運がよければ、屋根のあるところで休めるでしょう」

「本当ですか！ それなら急ぎましょう」

ミラは起き上がってそう言ったが、ソラとミニックは特に何の反応もしなかった。カレンも振り返ることはなかった。

「早めに到着しないと色々面倒なこともありますからね」

そう言って、カレンは少し馬車のペースを上げた。そして、その日の夕方というよりは早い時間、一行は小さな村に到着した。

カレンは荷馬車を村の入り口に止めて3人にそれを任せると、手近な村人をつかまえ、村長の居所を聞いてそこに向かった。残された3人は適当に村を見回していた。

「特に特徴のない普通の小さい村みたいですね」

「そんなことより、うまく泊まれればいいんだけどね」

ミニックとミラは多少疲れた様子で言葉を交わしていたが、ソラだけは難しい顔をしていた。ミニックはそれに気づいた。

「どうしたんです？ そんな顔をして」

「いや、どうもおかしい感じがするんだ。なんて言えばいいのかわからないけど、この村には何かよくないことが起きる気がする」

「精霊のお告げってやつ？ 今のところ変わった様子もないけど」

「村そのものが問題なんじゃないよ。ひょっとしたら魔物が近くに
いるのかもしれない」

「魔物ねえ。退治でもすればものすごい歓迎されたりするんじゃない」

そう雑談をしているうちに、カレンが戻ってきた。

「誰も使っていない家があるそうなので、そこを借りることにしました。ただ、条件つきですけどね」

「条件って、まさか魔物退治ですか？」

そう言ったミラをカレンは不思議そうに眺めた。

「そうです。最近このあたりに魔物が出没することがあるので、それを退治して欲しいという話ですが、よくわかりましたね」

「いえ、ソラが妙なことを言ってたので」

「妙なことは、どういうことですか」

カレンはソラに目を向けた。

「いえ、どうも妙な感じがするんです。近いうちにこの村に何かよくないことが起こるような」

「そういうことです。精霊の力が使えるソラの言うことなら、無視をするわけにはいきませんね。今日は警戒しながら休んで、明日になったら魔物を探すことにしましょう」

その夜、最初の見張りはミラとミニックがすることになった。2人は屋根に上って、そこから村を見渡していた。すでに村人のほとんどは眠りにについているようだった。

「それにしても、泊めてもらう変わりに魔物退治なんて割に合わない気がしますね」

「別にそんなことはないと思うけど。大体、タマキ師匠だったら何もなかったって、自分から首を突っ込んでいくでしょ」

「たしかにそうですね。これも修行だと思っただけがんばりますか」

それからしばらくの間、2人は黙って見張りをしていたが、ミラが自分にたかる虫を潰してから口を開いた。

「あー、せっかく屋根のあるところに泊まれたのに、これじゃ野宿と大差ないじゃない」

「交代の時間になれば屋根の下で休めますよ」

「こんなことになったのも全部魔物が悪いんだ。あいつら、見つけたらギタギタにしてやる」

「そうですね、早いとこ片付けないと旅にも影響が出ますし、どうせなら、今晚来てくれると面倒がなくていいですけど」

ミラはそう言ったミニツクを、なにか測るような目で見た。

「ずいぶん自信があんのね」

「僕はこの数ヶ月間、ずっとタマキ先生の助手をして色々教えてもらったんです。そこらへんの雑魚魔物なんて簡単に片付けて見せますよ」

「ああそう、それはすごいすごい。張り切りすぎて山火事を起こしたり家を吹き飛ばしたりしないように気をつけてね」

「この僕がそんなことをするわけがないでしょう」

「この僕だからだよ」

その後は適当な雑談をしながら交代の時間まですごした。交代の時間がくると、カレンとソラが家から出てきた。

「姉さん、ミニツク、交代の時間だよ」

ミラとミニツクはその声に応えて屋根から下りてきた。しかしその時、村中に大きな咆哮が響いた。ミニツクはそれを聞いて笑顔になった。

「本当にあつちから出てきてくれるとは、手間が省けましたね」

「そんなこと言っていないで、すぐに行かないと村に被害が出るよ！」

ソラはすぐに咆哮が聞こえた方向に走り出した。他の3人もすぐにそれに続いた。村のはずれには20体程度の魔物がいた。

「風よ！」

ソラは強風を起こして魔物達の足を止めた。3人はすぐに追いつき、それぞれの武器を構えた。

「3人とも、村に魔物を入らせないように注意して戦いなさい」

「もちろんです、ここから先には進ませませんよ」

ミラはそう答えて魔物の中心に向かって走り出した。

「私が分断するから、2人は残りをお願い！」

ソラとミニツクは左右に別れて、魔物と向かい合った。カレンはその3人を後ろから油断なく見守る体勢をとった。

ミラは剣を振るって数体魔物を切りながら走り抜け、一気に魔物達の背後にまわった。

「僕も負けてられませんね！ サンダーブラスト！」

ミニツクもそれに続いた。メイスを軽く一振りすると、そこから放たれた雷が3体の魔物を打ち倒した。前に使ったものよりも雷は集中し、無駄がなかった。

「風よ、炎を乗せて渦巻け！」

ソラが差し出した右手に火の玉が発し、それが一気に風に乗って魔物に向かっていった。そして、それは魔物4体程度を巻き込む小さな炎の竜巻になった。

魔物達はそれぞれの攻撃を受けて混乱した。ミラは再びその中に切り込んでいき、また止めを刺すことにはこだわらずに、走り抜けながら剣を振るった。

「よし！ サークルオブアイス！」

ミニツクが地面に手をつけると、魔物達を囲むように、大人の背丈ほどもある鋭い氷の塊が地面から突き出した。

「ソラ！ 今だ！」

ミラが叫ぶと、ソラは杖を地面に突き立てた。

「炎よ、魔物達を包め！」

声と共にミラの杖から炎が噴き出し、魔物達を包むように広がった。

「風よ、炎を運び魔物達を焼き尽くせ！」

氷の円の中で、炎の風が吹き荒れた。それが治まると、そこに立っている魔物は1体もいなかった。ミニツクはその中心に歩いていた。

「こんな雑魚なら、10倍いたって怖くありませんね」

そう言いながら振り返ったが、いきなりその横を、雷をまとった

ナイフが通り過ぎた。ミニツクが慌てて振り向くと、炎に巻き込まれなところに隠れていたらしいピットデーモンにそのナイフが突き刺さっていた。

「油断をしてはいけませんよ」

カレンはそう言いながら倒れた魔物に近づき、ショートソードで止めを刺すと、ナイフを回収した。

「村長をやっている方から聞いた話からすると、おそらくこれで全部でしょう。念のために、もう1日この村に泊まって様子を見てから出発することにしましょうか」

それから、戦いの音で起きてきた村人達に事情を説明し、カレンとソラは最初から決めていた通りに見張りを続けた。

夜が明けてからは4人は村の周囲を見回り、その日の夜も見張りを立てて同じようにすごした。魔物は影も形もなく、村は平穏を取り戻していた。そして朝、4人は礼として受け取った食料等を荷馬車に積み込むと、村人達に見送られながら出発した。

ある町での再会

村を出てから5日後。一行はパム口という町に到着していた。荷馬車を厩舎に預け、宿も確保したので、カレンは3人を解放して日が落ちるまで自由行動ということにした。ミニツクは市場に向かい、ミラとソラは特に目的もなく町をぶらつくことにした。

「なんか、いまいちぱつとしない町ね」

「確かにそうだね。観光地になるような場所でもないし、地味だね」

そう話しながら歩いていると、大きな建物に人だかりができていた。2人はなんとなくそこに近づいていった。

「なんでこんなとこに人が集まってるのかね」

ミラはそう言って首をひねっていたが、ソラはその建物に集まっている人にこれのことを聞きにいった。

「それで、何なの？」

ミラは戻ってきたソラにそう尋ねた。

「ここはこの町の集会所みたいだよ。それで今日は月に1度のバザーをやってるんだってさ」

「バザーね。面白そうじゃない」

ミラは人をかきわけて奥に進んだ。ソラもなんとかそれについていった。建物の奥までくると、椅子とテーブルが並べられただけの休憩所があり、人はだいたいぶ少なかった。ミラとソラは適当な場所に向かいあつて座つて、あたりの様子をじっくりと観察した。

「このバザーは町の人達が自由に店を出してやってるらしいよ」

「なるほど。どうりでガラクタみたいのがけっこう売ってるわけね」

「でも、普通じゃ見つからないような珍しいものもあるんじゃないかな」

「でもこの人じゃあね。なんか探そうって気にもならない」

ミラはテーブルに置いてあるコップと水差しを取って、コップに

水を注ぐと、一息に飲み干した。

「あの、ひよっとしてミラさんとソラさんじゃありませんか？」

突然声をかけられ、そっちに顔を向けると、そこには見たことのある少年が立っていた。

「ジョアン、久しぶりだね」

ソラはすぐに気がついた。だがミラはジョアンの顔をしばらくの間見てから、やっと反応した。

「ああ、隊商の。またひったくりにでもあったの」

「いえ、今日はこのバザーに掘り出し物を探しに来たんです」

ジョアンはそう言いながらソラの隣に座った。

「わざわざこのバザーのためにこの町に来たってこと？」

「バザーのためというわけでもないんですが、日程が合ったので滞在日を延ばしたんです。こういった普通の人が店を出すものは、意外と希少なものが仕入れられたりするので」

「へえ、ソラいい勘してんじゃない」

「どういうことです？」

「いや、さっき同じこと言ってたからさ」

ソラを指差しながら、ミラはコップにもう一杯水を注いだ。ジョアンは感心したようにソラを見た。

「それじゃあお2人とも、僕につきあってもらえませんか？ きつと面白いと思いますよ」

その頃カレンは、宿の1階の食堂兼酒場のようなところでテーブルにつき、この町の近くを描いた地図を広げていた。環と話した自分の記憶では、この近くにハティスが拠点としていた場所があるはずだった。

しかし、正確な場所はわからず、おぼろげな地形の記憶を元に、地図にいくつかの候補地を書き込んでいた。そうしているうちに新しい客が入ってきた。カレンは顔を上げずに目だけでその客をちらっと見てから、再び地図に目を落とした。

しばらくして、さっきの客がカレンの座っている席に近づいてきた。

「奇遇ですね。またお会いすることになるとは思いませんでした」
カレンはいきなり顔を上げてそう言った。近づいてきていたシェイラとエクセンはカレンが気づいていないと思っていたので、少し勢いをそがれた。

「ああ、奇遇だな。あんたはまだ旅の続きなのか？」

「続きというわけではありませんが、旅の途中ですよ」

「そうなの。ちょっとここに座ってもいいかしら？」

シェイラの言葉にカレンはうなずいて、テーブルの上の地図をたんだ。シェイラとエクセンは椅子に腰を下ろした。

「で、今回は1人旅なのかい？」

「いえ、違います」

「それじゃタマキも一緒か。どこにいるんだい」

カレンはその問いに少し黙りこみ、眼鏡の位置を直した。

「タマキ様は今回は別行動なので、一緒ではありません。あとの3人は一緒ですが」

「そうなのか。それは残念だな」

エクセンはそれだけ言ったが、シェイラはカレンの様子に不審の目を向けた。

「それじゃ、俺達は荷物の整理があるから先に失礼するよ」

エクセンはそう言って立ち上がったが、シェイラは座ったまま動こうとしなかった。

「どうした、何か話でもあるのか？」

「そう、だから先に行つて」

エクセンは特に何も気にすることなく宿を出て行った。それを確認したシェイラは、カレンと向き合い、口を開いた。

「これは好奇心で聞くんだけど、何があつたのか教えてもらえないかしら」

カレンはその質問にわずかに肩をすくめた。

「面白いことなどありませんよ。それに、聞いてどうするんですか？」

「どうするってわけでもないけど。知らない仲でもないんだから、できることがあれば協力してもいいと思ってる。この町にはまだあと何日かは滞在予定だしね」

「そうですか。あいにく協力していただけることでもないのですが、タマキ様は今、病気のような状態です」

「それとあなた達だけで旅をしているのにどんな関係があるの？」

「それをなんとかできそうな方は放浪していて、どこにいるかわかりにくい人ですから。それに、1人旅は負担が大きくなりすぎますからね」

「なるほどね。その探してる人っていうのは何者なの？」

「かつて大賢者と呼ばれた、ハティスという方です」

「大賢者ハティス」

シェイラはそうつぶやいたが、特に何も思いつかないようだった。「知らないのが当然ですよ。人目にふれないようにしていますから」「ずいぶん変わり者みたいだけど、どんな人なの？」

「一言で言えば、初老で白髪の男性です。真っ白なローブを着てるので、少し目立つかもしれませんがね」

「初老で白髪の白いローブを着た男ね。あなたがここにいるということは、この町の近くにいてもいいってことなの？」

「その可能性はあります」

「わかった。それじゃあ、そういう人を見かけたら教えるから。しばらくここに泊まるんですよ」

「そのつもりです。しかし、なぜ協力していただけるんですか」

「さっきも言ったけど、知らない仲間じゃないし、それにあなた達との旅はけっこう楽しかったし、町にいる間は私達はけっこう暇だから、まあそういうこと」

シェイラはそれだけ言うと立ち上がった。カレンも立ち上がり右手を差し出した。

「とにかく、協力ありがとうございます」

シェイラはその手を握り返してから宿を出て行った。カレンは椅子に座り直して、再び地図を広げた。今度はそこにミニックが戻ってきた。ミニックはカレンに気づいて声をかけた。

「今そこで前の隊商の人達と会ったんですけど、一緒だったんですか？」

「ええ、少し話をしましたよ」

「そうですね、なんか知らないんですけど、護衛のリーダーのシェイラさんがずいぶん張り切っていましたよ」

「そうですね。それより、明日からハティス様を探しに行くので、今日のうちに町で見たいところがあれば済ませておくのがいいですよ」

「それはもう済ませてきましたから、僕は一足先にのんびりさせてもらいます」

ミニックは上の部屋に引きこもりに行った。カレンはそれを見送ると、地図に向かい合った。

刺客

ジョアンと一緒にミラとソラが宿に戻った時には、すでに日は落ちかけていた。カレンは相変わらず1階で座っていたが、すでに地図ではなく、目の前のテーブルには夕食が置かれていた。

「カレン師匠！ 驚いたことに」

「前の隊商がいたんですか」

その一言にミラはがっくりした。

「知ってたんですか」

「ええ、護衛をやっていた2人に会いましたから」

「そうだったんですか。ジョアン、もう入ってきていいよ」

ミラが外に声をかけるとソラとジョアンが中に入ってきた。

「久しぶりですね。レナルドさんはお元気ですか？」

「はい、おかげさまで元気にしています」

「そうですか。夕食がまだなら、一緒にどうですか」

「いえ、僕は違う宿なのでそれはご遠慮します。それじゃミラさんとソラさん、暇があったらまた一緒にしてください」

ジョアンはそう言って頭を下げると宿を出て行った。ミラとソラはそのままカレンと同じテーブルにいった。そうしているうちに、いつの間にかミニックも降りてきていた。

「ミニック、あんたまさか1日中ひきこもってたの」

「僕が出かけたことは知ってるでしょ。ちょっと早く帰ってきてただけですよ」

そう言いながらミニックは席にいった。それを待っていたかのように、3人の食事が運ばれてきた。それにある程度手をつけてから、ミラは口を開いた。

「それで、明日からはどうするんですか？」

「ハティス様がいるかもしれない場所はいくつか目星をつけておきましたから、それを1つずつ潰していくつもりですよ」

「でもなんで最初にここに来たんですか？ 師匠はまだエズラの近くにいてもいいのに」

「私の記憶では、ハティス様は4ヶ月以上同じ場所にいたことはありませんからね。それにエズラの次は大体ここに来ていたんですよ」

「へえ、そうだったんですか」

「そうだったんですかって、あんたは自称弟子なのにそんなことも知らなかったの」

「僕は弟子入りしてからそんなに経ってないですから、そこまではわかりませんよ」

「まったく、役に立たない」

ミラはそう言いながら肉にフォークを突き刺して口に運んだ。

「でも、そういうことなら大賢者さんも簡単に見つかりそうですね」

ソラは2人をとりなすようにそう言ったが、カレンは難しい顔をしていた。

「そう簡単にいつてくれるといいですね」

そこでハティスの話題は終わり、その後は適当な雑談で夕食の間は過ぎていった。

そして夜、カレンとミラはそれぞれ鎧を外していた。ミラは鎧をベッドの横に置いて、ため息をついた。

「本当にあの大賢者っていう人は見つかるんですかね。それに見つかったとしても、タマキ師匠を治すことができるんでしょうか」

「それは正直、わかりませんね。ただ、あの方にそれができなくても、何かヒントになるようなことくらいは知っているでしょう」

ミラはカレンの答えを聞いてから、ベッドに座り込んで腕を組むと考え込むようにうつむいた。

「なんか不安ですね」

「それはわかりますが、先のことを考えても仕方ありませんよ。今は目の前のことに集中すべきですね」

「そうですね。よし！ 明日はがんばりましょう！」

「そうですね」

カレンはわずかに笑って気合を入れているミラに答えたが、すぐにその表情は消え、外していたショートソードを掴み、窓を睨んだ。ミラはそれを見て、わけもわからないまま自分の剣を掴んだ。

「あの」

その言葉はカレンの口に指を当てる仕草で遮られた。カレンは足音を忍ばせ、窓にゆつくりと近づいていった。そして壁に背をつけ慎重に外をうかがっていたが、しばらくすると窓から離れ、ショートソードを自分のベッドに立てかけた。

「あの、何だったんですか？」

ミラは戸惑いながらそう聞いた。

「何か気配がしたと思ったんですけどね。どうも気のせいだったようです」

カレンは特に表情を変えることなくそう答えて、ベッドに横になった。

翌朝、一行は1階に集まって食事を済ませると、早速宿を出発した。

「まずはどこから探しに行くんですか？」

ミニックがそう聞くと、カレンは地図を取り出し、昨日つけておいた印を指差した。

「まずはこの場所からですね」

3人はそれを覗き込んで、ソラが口を開いた。

「どこもそれほど町からは離れてないんですね」

そう言ったソラの頭を、カレン半身になるといきなり押さえつけて下げさせた。次の瞬間、ナイフがカレンの体とソラの頭があったところを通過していき、背後の家に突き立った。

「これはなんのつもりですか」

カレンはショートソードの柄に手をかけ、そのナイフを投げたと思われる男を睨みつけた。男はケープを着けた短髪で、奇妙に不自然な笑顔をしていた。

「どういつつもりかって？ そのナイフは飾りじゃないんだぜ、それでわかれよ」

男はそう言つて腰の剣を抜いた。それを見た周囲の人々は一斉に距離をとり、男とカレン達は円状に空いた空間で対峙することになった。

「どうした？ 抜けよ、見世物としちゃなかなか面白いことになるぜ」

ミラがそれに反応して剣を抜こうとしたが、カレンは手を伸ばしてそれを制した。

「あいにく、町中で剣を振り回す趣味はありません。相手をして欲しいというなら、場所を選んではどうですか」

「こつちもあいにくなんだが、場所を選ぶ趣味はないんだよ」「動くな！」

剣を構えようとした男の動きを上からの声が止めた。カレンが声のしたほうを見ると、宿の3階からシェイラが弓を構え、男に狙いをつけていた。

「シェイラさん、下がっててください」

カレンはそう言ったがシェイラは狙いを外そうとはしなかった。

男はいらついたような表情になり、その方向に剣を向けようとした。「全員伏せなさい！」

カレンはその場に響きわたる大声を出し、腰のカード入れから1枚のカードを取り出した。

「開放！」

カードはカレンの手を放れシェイラと男の間に飛び、爆発を起こした。集まっていた人々はその爆発に全員地面に伏せた。カレンは一気に男との間合いを詰めながら闇の翼を展開し、その勢いのまま男を掴んで飛び立った。

「追うよ！」

ミラはそれを見て、ソラとミニツクに声をかけて走り出した。シェイラは爆発の影響で何が起きたかわからず、ただ呆然としていた。

カレンは町から十分に離れると、男を放り出してから着地した。そして、眼鏡を外すと、金色の瞳で地面に転がっている男を見据えた。

「いつまでそうして寝ているんです？ あなたが人間でないことくらい、最初からわかっていますよ」

「なるほどなあ」

男はそう言いながらゆっくり立ち上がった。

「イムトポールを倒したってだけあって、大した力だ」

カレンはその名前に少し表情を変えた。

「あの魔族の知り合いですか。それが私に何の用で？」

「何の用？ 何の用か」男は楽しそうに笑った。「いやな、派手に町1つを火の海にでもしながら戦ったら面白いんじゃないかと思つてよ。あの髪お化けを倒した実力があるんなら、たつぷり楽しめるだろ？ 俺としちゃそれで十分」

「それは誰の指示なのか、教えてもらえますか」

「そんなことはどうでもいいだろ。おっと、そういえば自己紹介がまだだったな、俺のことはサロアとでも呼んでくれ」

そう言つてサロアと名乗った魔族は剣を構えた。カレンも暗黒の剣を作り出し、それを構えた。

炎の魔族

カレンとサロアは互いに剣を構え、しばらく睨みあっていた。先に動き出したサロアがゆつくりと剣を振り上げると、それは炎に包まれた。それが振り下ろされると炎が剣から伸び、まるで炎の鞭のようにカレンに襲いかかった。

カレンはそれを横に飛んで避けたが、サロアが腕を動かすと、その炎はすぐにカレンを追ってきた。それも上空に飛び上がってかわしたが、炎もそれを追ってきた。そのまま空中で炎をかわしつづけながら、徐々にサロアとの距離を詰めていった。

「すばしっこいやつだな。それじゃ、こいつはどうだ」

今までの単純に剣を振る動作から、剣で空に円を描く動作に変わった。剣から伸びる炎はおさまったが、空中には次々に剣で描かれた円状の炎が出現した。カレンはそれにかまわず、サロアに向かって急降下していった。

「そうやって直線的にくるのはいいねえ、俺も楽しくなってくるよ」
サロアは余裕の笑みを浮かべてから、自分の作り出した円状の炎の1つを切り裂いた。それは人の頭ほどのサイズの火の玉に分裂すると大きく広がり、カレンに向かって飛んだ。

カレン軌道を垂直に変えそれを回避すると、地面に激突する寸前でさらに水平に軌道を変えてサロアに向かった。それに対してサロアはもう1つ、円状の炎を剣で切り裂いた。広がった火の玉がカレンに集中していったが、今度はカレンはよけようとはせず、暗黒の剣を巨大な闇の塊に変えると、それを一閃した。

衝撃波が火の玉を爆発させ、カレンはその中に突っ込んだ。サロアは残りの円状の炎と共に飛び上がった。次の瞬間にはサロアの立っていた場所は闇の塊でえぐられていた。そこにサロアが2つの円状の炎を切り裂いた火の玉が殺到し、カレンは爆発に包まれた。

爆発が収まると、そこには闇の塊を振り切った姿勢のカレンが無

傷で立っていた。着地したサロアはそれを見て満足気に笑った。

「そいつの衝撃波で炎と爆発を吹き飛ばしたか。いいねえ、もっと頼むぜ！」

楽しそうに言うサロアをカレンは冷ややかに眺めた。

「どうもあなたの狙いがわかりませんね、私達を殺しに来たのでしよう。本気でしたらどうです？」

「俺はそんなことはどうでもいいんだよ。ただ楽しめればいい、戦ってその感覚を味わえればそれでいい」

カレンはため息をついた。

「ただの変態ですか。何か情報でも得られればと思いましたが、これでは期待できませんね」

「いや、俺のほうは期待した通りだ」

サロアのその一言が合図になり、2人の間に殺気がみなぎった。

サロアは残った円状の炎を全て切り裂き、自分の目の前に100を越える火の玉を作り出した。サロアが剣をカレンに向けると、それは大きく広がりながら動き出し、カレンを全方位から包囲した。

「さて、こいつはどうする？」

そう言っただけでサロアは剣を炎で包み、それを後ろに引いた。その剣が振るわれると、炎が伸び、さらに空中の火の玉も一斉にカレンに向かった。だが、カレンはその場から動かず、落ち着いて剣の動きだけを見ていた。

火の玉が炸裂し、炎の鞭がカレンの立っていた場所を薙いだ。しかし、その中からサロアに向かって氷をまとったナイフが飛び出してきた。サロアはそれを剣で弾いたが、それを追ってカレンが炎の中から飛び出し、暗黒の剣を振り下ろした。サロアはそれを後ろに飛び退いてかわしながら、炎で包まれた剣を横に薙いだ。

カレンはそれを身をかがめてかわし、飛び退いたサロアに向かって暗黒の剣を下段から振り上げた。それはサロアをかすめ、わずかにその額を切り裂いた。さらに暗黒の剣が袈裟切りに振り下ろされたが、それはサロアの右手の剣に受け流された。

サロアは左手をカレンに向けて伸ばし、そこから炎が噴出した。カレンはとつさに上に飛んだが、炎はそれを捉えた。カレンは炎に包まれたように見えたが、そのまま上昇して炎から逃れると無傷だった。そして、その手にあった1枚のカードが光になって消えた。「そのカードは、町で使ったやつ以外にもあったのか。おもしろいおもちゃだな」

それからサロアは自分の剣をよく確かめて舌打ちをした。

「こいつは結構気に入ってたんだが、これじゃ使い物になんねえな」そう言つて剣を投げ捨てた。カレンは用心深く、十分に距離をとった位置に着地して構えた。サロアは左手を右肩に添え、そのまま指先までその手を滑らせた。それと同時に右腕は炎に包まれていき、腕そのものも炎に変わり、3倍ほどの長さになっていった。

「いくぜえ！」

サロアは地面を蹴り、炎となつた右腕を真上から振り下ろした。

カレンはそれを横に避けながら、暗黒の剣でそれを切り上げた。右腕と暗黒の剣は激しくぶつかり、カレンはすぐに暗黒の剣を引いて横に跳んで距離をとった。サロアはそれを見てにやりと笑った。

「重いだろ。俺の炎は熱くて重いんだよ！」

今度は右腕を横薙ぎにカレンに向かって打ちつけていった。カレンはそれを暗黒の剣で受けたが、衝撃で後ろに飛ばされた。サロアはそれを追つて、さらに逆方向から右腕を振るつた。

カレンはそれを上空に飛び上がってかわしたが、炎はすぐに追ってきた。さらに上昇してそれかわしたが、サロアは左手をカレンに向けた。

「逃がさないぜ！」

その左手から、人間1人を飲み込めそうな火の玉が放たれた。カレンは上昇を止め、それに向かって一気に急降下した。そしてその火の玉に暗黒の剣を振り下ろした。

火の玉はまっぴたつに割れ、カレンはその間を通つてサロアに迫り、再び渾身の力を込めて暗黒の剣を振り下ろした。

だが、カレンの体はサロアの右腕に弾き飛ばされていた。地面に叩きつけられたカレンに向かって、サロアはさらに左手から無数の小さな火の玉を放った。カレンは倒れた状態で暗黒の剣を巨大な闇の塊に変化させると、その体勢のまま、なんとかそれを振るった。

火の玉の爆発が終わると、そこには致命傷はないものの、傷ついたカレンが倒れたままの体勢でいた。カレンはなんとか膝をついて立ち上がるうとしたが、サロアはそれにゆっくりと近づき、右腕を振り上げた。

「なかなか楽しかったぜ」

右腕を振り下ろそうとしたサロアの背後から、雷の矢と氷の牙が襲いかかった。サロアはそれをともに受けたが、倒れもふらつきもせず、無造作に振り返った。そこにはハティスが立っていた。

「ちっ、興醒めだな」

そう言つてサロアは右腕を炎から普通の腕に変え、カレンのほうに向き直った。

「お前との決着は次の機会だ。それじゃあな」

それだけ言つて、サロアは飛び去っていった。ハティスはそれを確認すると、すぐにカレンに歩み寄った。

「大丈夫か」

元の瞳に戻ったカレンは自力で立ち上がった。

「はい、大丈夫です。それよりお話があるのですが」

「わかった。それより少しじつとしていなさい」

ハティスがカレンに手をかざすと、カレンの傷が治っていった。

そこにミラ達3人が駆けつけてきた。

「カレン師匠、さっきの怪しい男は」

「今回は見逃されたようですが、おそらく近いうちにまた会うことになるでしょう。その時は決着をつけなければいけません」

厳しい表情のカレンに、ミラ達も顔を引き締めた。ハティスはしばらくその様子を見ていたが、おもむろに口を開いた。

「カレン、私に話があるのだろう。家は近いからそこで話を聞こう」

「はい、お願いします」

カレンはショートソードを収め、歩き出したハテイスに続いた。

大賢者の研究

カレン達はハティスが滞在しているあばらやに到着した。ハティスは先にそのあばらやに入り、大きな敷物を出してきた。

「いや、ここは人をたくさん入れられるようなものではないのですね、誰に言いわけするでもなく、家の前に敷物を広げた。カレン達4人はその上に腰を下ろした。ハティスも同じようにした。

「さて、それではなぜ私のところに来たのか、それを説明してくれるかね」

ミラが口を開こうとしたが、カレンの視線に気づいて口を閉じた。「要点だけ言いますと、タマキ様が倒れました」

「それは、病気、というわけではないのだね」

「はい。タマキ様の体内で力が乱れているのですが、おそらくその原因は外にあるのではないかと思います」

それを聞いたハティスは大きくため息をついた。

「そうか。そうなってしまったか」

カレンはその言葉に少し眉をひそめた。

「こうなることは予想していたのですか？」

「そういうことだ」

ハティスはしばらくの間、目を閉じて考え込むようにしてから口を開いた。

「まずは伝説の英雄の話から始めよう。500年前、当時はまだノーデルシア王国のような強力な国はなく、魔物の脅威も今よりも大きかった。そこに現われたのが、名前もわからない、ただ伝説の英雄として知られる人物だった」

「その英雄は凄まじい魔法で魔物や魔族を倒して平和をもたらし、ノーデルシア王国の基礎を作ったんですよね」

ミニツクの言葉にハティスはうなずいた。

「その通りだ。だが、その英雄は建国の後はいくつかのスペルカー

ドを残し、姿を消したのだ。その理由は不明とされている」

「500年前の話と今回のことが関係あるって言われても、どんなだろうね姉さん」

ソラは小声でミラにそう言ったが、頭をはたかれた。

「いいから黙って聞いてなさい」

ハティスはそれに気づいていたようだが、かまわずに続けた。

「私は人生を捧げて、姿を消した伝説の英雄の足取りを追ってきた。そして、その中で伝説の英雄と呼ばれた人物のことが少しずつわかってきたのだ。まずその人物はな、カレン」

ハティスはカレンの名を呼び、その顔をじつと見た。

「おそらく、英雄はお前と同じ力の魂を持っていた。そして、その魔力は今の勇者と同等かそれ以上のものだっただろう」

「つまり、伝説の英雄というのは、タマキ様と私の力を併せ持つ存在だったということですか？」

カレンの言葉にハティスは重々しくうなずいた。

「集めた伝承によれば、おそらくその通りだろう。それほど強力な力を持っていたのだ」

それを聞いてミニツクは腑に落ちない顔をした。

「ちよつと待ってください、それならなんで王国の基礎を作るだけで、王にもならないで姿を消したんですか？」

「そうできない事情があったはずなのだが、それはわからなかった。しかし、今回のことで考えていた1つの可能性が現実味を帯びてきた」

「その可能性というのは、どういうことでしょうか？ それに、そのことがどうタマキ様と関係するのでしょうか？」

「残念だが、今はまだ言えん。確証を得るためには知の都に行かなくてはいいかんだ」

ハティスはそこで言葉を切り、それぞれの顔を見まわした。そして立ち上がるうとした。だが、それはカレンに止められた。

「ハティス様、お話しておきたいことがあります」

「なんだね？」

「まず、タマキ様は私の魂の一部を持っています。あの方を救うためにそうしました。そしてもう1つ、タマキ様と私の記憶は現在、混ざり合っています」

「うむ」

カレンの言葉に、ハティスはそれだけ言っただけでうつつむいた。それからおもむろに顔を上げた。

「それも考えなければならぬことだな。とにかく、今は知の都を目指さなければならぬ」

「わかりました。では町に戻って準備をしてから、明日の朝、お迎えに上がります」

カレンとあとの3人は立ち上がり、町に向かった。

町に戻った一行はとりあえず宿に集まった。

「ここから知の都までは、まあ10日といったところですから、食料の調達も必要ですね」

「また前の隊商と一緒に行くのはどうなんです？」

ミニックがそう聞いたが、カレンは首を横に振った。

「私達の出発は明日ですが、隊商はもうすこし滞在するようなので、残念ですがそれは無理ですね」

「そうなんですか。それじゃ、僕達だけか」

「そんなこと言っていないでさっさと買出しに行くよ」

ミラがミニックを無理矢理引っ張っていった。

「それでは私達はそれ以外の準備をしましょうか」

「はい」

残ったカレンとソラは厩舎に向かった。2人はそこで荷馬車と備品類のチェックを始めた。

一方、ミラとミニックは食料の買出しのために市場に来ていた。

「あなた達」

その途中、後ろから声をかけられ、2人が振り向くと、そこには

シェイラが立っていた。

「今朝のあれは一体なんだったの？ あなた達もあの変な男もすぐどこかに行ってしまったし、よければどういうわけなのか聞かせてもらえない？」

ミラとミニックは少し顔を見合わせた。

「どうします、正直に話すわけにはいきませんよ」

「別に明日出発するんだし、適当にごまかしておけば大丈夫だって」
そう小声で言うてからミラはシェイラに笑顔で向き直った。

「あー、いえ、大したことじゃなかったんです。そのなんというか、あれは勘違いだったんです」

「勘違い？」

「そう、勘違いです。いや、どうもあの男は賞金稼ぎかなんかだったみたいで、それで勘違いをしてあんなことになったんですよ。あの後カレン師匠があの子を締め上げて誤解は解いたので何の問題もありません」

「賞金稼ぎ」シェイラはその単語にだけ反応した。「確かにただ者じゃない雰囲気だったしね」

「そうですそうです、それで今言ったように問題は解決済みですから、大丈夫です」

「まあ、こうしてここに帰ってきてるっていうことは、少なくとも問題は解決したのね。あの男が賞金稼ぎなんてものとは思えないけど」

「ははは」

いぶかしげなシェイラの様子に、ミラはなんとなく笑ってごまかした。ミニックもなんとなく同じように笑ってごまかした。シェイラは2人の様子を見て、苦笑いを浮かべた。

「話したくないことがあるなら、無理にごまかしたりしなくてもいいから。それにカレンからあなた達の目的も聞いてるしね」

「え？ 聞いてたんですか」

「大賢者ハティスっていう人を探してるんですよ。残念ながら力に

はなれなかつたけどね」

「いえ、それならもう大丈夫です」

「見つかったの？」

「はい、それで明日にはここを発つので、食料の買出しに来てたところなんです」

「そうだったの。今回は一緒に行けないけど、道中気をつけてね」

そう言つて、シェイラは手を振つてその場を立ち去った。ミラは頭をかきながら軽く息を吐いた。ミニツクもため息をついていた。

「なんか、ぐつと疲れましたね」

「まあ、納得はしてくれたみたいだし、これでいいでしょ。魔族だなんだなんて言ったら、話がややこしくなりすぎるから」

「ですね。じゃあ、早いところ買出しを済ませちゃいましょう」

「そうそう。さつさとすませて、明日からの旅に備えてたっぷり休んでおかないかね」

知の都再び

出発してから9日。急ぎ気味で進んでいたのも、一行は予定していたよりも早く知の都に到着した。まずはカレンが1人で城に向かった。

待っている間ハティスは一言もしゃべらず、公園のベンチに腰かけ、一歩も動かなかった。あとの3人は適当に町を見てまわっていた。大した時間はかからず、カレンはすぐに戻ってきた。

「入城の許可が出ました。他の3人はどこに」

「うむ、近くにいますけど」

「探してきますので少々おまちください」

カレンは3人をすぐにつかまえ、5人そろって城の前まで来た。門をくぐり、受付で武器を預けると、カレンが先頭に立ち、まっすぐに館長のエリットがいる部屋を目指した。目的の部屋の前に到着し、カレンがドアをノックした。

「どうぞ」

中からエリットの声がして、カレンはドアをゆっくりと開けた。エリットは自分の座る椅子をドアのほうに向け、一行を迎えた。

「ようこそ、みなさん。特にハティス、あなたとはずいぶん久しぶりな気がしますね」

エリットは穏やかな微笑を浮かべた。ハティスはそれを正面から受け止め、若干険しい顔をしていた。

「さあ、椅子は用意しておいたから座ってください」

5人はエリットを囲むように置かれている椅子に腰を下ろした。エリットはそれを見まわし、カレンに視線を止めた。

「タマキ様はどうされたの？」

「今は病、のようなもので動くことができません。私達はそれを治す方法を探しているのです」

「そう。それは大変でしたね。ハティスが一緒なのはそういう事情

でしたか」

「そういうことだ。だから、あの部屋への入室を許可してもらいたいのだ」

「もちろんそれはかまいませんが、私から1つ条件があります。あなたに本を書いてもらいます。いえ、もちろんあなたの名前で書かなくてもいいのです。ただ、その知識をしっかりと形として残してもらいたいのですよ」

ハティスは渋い顔をしてうなずいた。

「わかった、本などいくらでも書こう」

その返答にエリットは立ち上がり、1つの古びた本を引き出しの中から取り出した。

「さあ、それではこの城で1番重要な場所にご案内しましょう」

エリットを先頭に、一行は城の地下に降りていった。両脇に警備の兵士が立っている頑丈そうな扉の前まで到着した。

「鍵を」

エリットがそれだけ言うと、警備の兵士はそれぞれ鍵を取り出した。そしてその鍵を扉の鍵穴に差し込んで同時に回した。エリットは扉の中心にある小さな扉を開けると、その中にあるくぼみに持ってきた古びた本を差し込み、それを時計回りに回した。

「さあ、入りましょう」

兵士が重そうに扉を開け、一行がその中に入ると、重い音を立てて扉は閉まった。中は薄暗かったが、エリットが扉の横に行つて何かをすると、灯がともり、室内の様子がよく見えるようになった。

「これは、すごい」

ソラが室内の様子に感嘆の声を上げた。通常の閲覧室よりも重厚な本棚がところ狭しと立ち並び、入り口近くの8人程度が使えるテーブル以外は、密林のような感じだった。

「ここにある本はどれも貴重なものばかりです。みなさん、これを」
エリットは薄手の手袋を取り出して全員に配った。

「本は大切に扱ってくださいね」

ミラは用心深く本には近づこうとはせず、椅子に座ってあたりを見回していたが、ソラとミニックはすぐに本棚に近づいていった。カレンはハティスのことを見ていた。ハティスはゆっくり歩き出すと、本棚の間を通過して、部屋の奥に進んでいった。

ハティスは探すべきものがどこにあるかわかっているようだったので、カレンはその後を追わずに、椅子に座り、同じように座っているエリットを見た。

「ハティスはここに入ったことがありますから、自分が探しているものがどこにあるかはわかっているでしょう。あなたが知りたいことをきつと話してくれますよ」

エリットはカレンに向かって微笑んだ。カレンはうなずいて待つことにした。

しばらくして、ハティスは抱きかかえるほどのサイズと、片手で持てる小さな2冊の本を持って戻ってきた。それを机に置くと、ゆっくりと椅子に座った。それを見たミラとソラは、本を見るのを中断してテーブルに着いた。

「ハティス様、その本は」

「これはな、大規模かつ特殊な結界のことを記した本と、城の詳細な設計図が集められた本だ」

「城の詳細な設計図って、そんなものまであるんですか。もし流出でもしたら一大事でしょうね。でも結界というのは、そんなすごいものなのですか？」

ミニックが驚きながらもそう言った。ハティスは落ち着いた仕草でその質問に答えた。

「大規模な結界というのは町をまるごと1つ封鎖することも可能なのだ。使い方によっては極めて危険なものになる。もっともそれだけのものが使える者など、ほとんどいないはずだが」

「そうなんですか、それで、その2つがどう関係するんですか？」

「まずはこれだ」

ハティスは大きなサイズの本を開き、それを全員に見えるようにした。ミラはそれを覗き込んで首をひねった。

「これはどこの城なんですか？」

「ノーデルシア王国の首都の城だ。もつとも、この設計図は数10年前のものだから、今では細部はだいぶ違うはずだろう。だが、それは重要ではない。本当に重要なのはこの城の基礎にあたる部分と、ここだ」

ハティスが指差したところは地下にあり、設計図では空白になっていた。

「この図には何も描かれていないが、私の推測が正しければこの場所にこそ、勇者が倒れた原因があるはずなのだ」

一同の先を促すような視線を受けて、ハティスはもう1冊の小さな本を開き、自分の懐から紙とペンを取り出した。そして、その紙に本から何かを書き写し始めた。書き終わると、その紙を設計図の隣に置いた。

「この紙に描いたものと、設計図を重ねて見るとわかるのだが、この城の基礎というのは、ある目的を持って作られている」

「結界ですか」

カレンはすぐに気がついた。

「その通りだ。そしてこの結界の効果は封印。この空白の場所にあるものを封じ込めているのだよ」

「城をまるごと使った封印結界ですか。ハティス、あなたはこれなんのためかも、予想がついていないのですか」

「それはここにある書物だけではわからなかった。だが、各地に残っている伝承をつなぎ合わせると、私には1つの可能性が考えられるようになってきた」そこですこし間を置いた。「これだけの結界を考え、実行できたものは伝説の英雄くらいじゃないはずだ。おそらくこの城の設計をしたのはその英雄、そして、それを使って封印されているのも、その英雄だと考えている」

「なぜでしょうか」

そう聞いたカレンの顔をハティスはじつと見た。

「カレン、伝説の英雄はお前と同じ力を持っていたはずだと言ったな。つまり、それは破滅と創造という両面を持っている。もし、そのうちの破滅の力が大きくなりすぎたらどうなる」

「おそらく私の体は耐えられない可能性が高いでしょう。あるいは魔族のようになってしまいか」

「そうだ。だが、もし大きくなった破滅の力に耐えるだけの体と魔力を持っていたらどうなる？」

「体が耐えられたとしても、それはもはや人間とは呼べないものになっているでしょうね。魔族よりも、もっと純粋な破滅の力を持った存在」

「そう、魔族は人間と悪魔の間のような存在だ。それを超える、つまり悪魔がこの現世に出現することになる。通常ならば召喚には器を必要とし、それに縛られる存在のはずのものが、自由を得て生まれるのだ」ハティスは大きくため息をついた。「理由はわからないのだが、おそらく英雄は自分がそうなりつつあるのを知り、そのために自らを封印したのだろう」

部屋に沈黙が訪れた。その中で一番最初に立ち直ったのはミラだった。

「でも、なんでそのことがタマキ師匠に関係あるんですか？」

「たとえ強力な結界の中でも肉体は500年もあれば滅びるだろうだが、魂は別だ。何らかの理由で結界が少しでも弱まれば、すでに悪魔の核とも言えるものになってしまっている可能性のあるそれは、新しい肉体を求めるだろう」

「そして、それが伝説の英雄に匹敵する力を持つタマキ様の体に影響を与えているわけですか」

カレンの口調は落ち着いていたが、テーブルの上に置かれた手は強く握り締められていた。

都への襲撃

夜、カレン達はそれぞれの部屋ですごしていた。カレンが窓から外を見てみると、ドアをノックする音が聞こえた。

「ミラですけど、少しいいですか？」

「どうぞ、開いてますよ」

ミラはどことなく遠慮がちに部屋に入ってきた。カレンは自分はベッドの上に座って、ミラには椅子を勧めた。

「座ってください。何の話ですか」

「はい、では遠慮なく」そう言って椅子に座った。「あの、これからのことなんですけど、やっぱりタマキ師匠のところに戻るんですか？」

「そうですね。あの話が本当だとするなら、そうするしかありません。なにが出来るかは、わかりませんが」

「でも、例の結界っていうのを強化するとか、できるんじゃないですか」

「伝説の英雄が施した結界です。私達がそれに手を出せるのかどうか、そうできたところで、意味のあることができるのかどうか、わかりませんね」

そう言ってカレンは薄く笑った。ミラはどういう顔をすればいいのかわからないようだった。

「私達でなんとかできるんでしょうか」

「なんとかするしかありませんね。今はとにかく、一刻も早くタマキ様の側に戻ることを考えましょう」

カレンは立ち上がり、窓のところに歩いていった。そこから外を見ると、たいまつを持った兵士が走りまわっているのが見えた。

「どうも妙な雰囲気ですね」

そう言ってカレンはドアを開け、外に出た。ミラもその後についていった。カレンは走っている兵士を無理矢理引き止めた。

「一体、何の騒ぎですか？」

「見張りから魔物の姿を見たという報告があったので、確認をしているところです。離れた場所に少数ということなので、心配はありません」

そう言つて兵士は立ち去つていった。ミラは安心したような表情を浮かべた。

「大したことじゃないみたいですね」

「そうだいいんですが、気になりますね。前の町の魔族の件もあります」

「武器を確保しておいたほうがいいんでしょうか」

「そうしておいたほうがいいでしょうね、ソラとミニックも呼んで来て下さい。私はエリット様に武器の件の許可を貰ってきます」

「わかりました！」

ミラは駆け出し、カレンは早足でエリットの部屋に向かった。

それから数10分後、4人はそれぞれの武器を手に、カレンの部屋に集まっていた。

「これからどうするんですか？」

ミニックがそう聞くと、残りの2人もカレンに注目した。

「私は外で警備に参加します。あなた達は武器だけは手元に置いておいて、今日は休んでおきなさい」

「でも」

反論しようとしたミニックをミラが止めた。

「これからのことを考えたら休めるうちに休んでおいたほうがいいって」

ミニックは多少不満があるようだったが、納得はした様子で立ち上がった。

「それじゃあ、僕は先に休ませてもらいます」

ミラとソラもミニックに続いて部屋から出て行った。

その後、カレンは見張り塔に立ち、夜の町を見渡していた。今までのところ特に変わった様子はなかった。

しかし、そこに突然上から熱風が吹きつけた。カレンが上を見上げると、そこには1つの人影が浮かんでいた。

「なんの用でしょうか」

カレンはショートソードに手をかけ、上空に浮かぶ人影、サロアを睨みつけた。

「あんたとまた遊ぼうと思ってな。おっと、今じゃなくてちよつと先だ。今度は邪魔が入らないようにお膳立てはしっかりしてある」

「何もしなくても、私は逃げはしませんよ」

「邪魔が入らないようにしたいと言ったんだ。まあ、明日になればわかる」

それだけ言うとサロアは飛び去った。

結局それ以上のことは起こらず、夜が明けた。それは穏やかなものではなく、朝日とともに魔物の影が町に向かって動き出していた。夜のうちはほとんど姿が見えず、湧いて出たような魔物達に対して、エルウドウネス共和国の軍勢は慌しく出陣の準備を進めていた。その中でカレンはエリットのもとに急いでいた。

エリットは自らの部屋の前で、軍の首脳を集めていた。カレンはそれが終わるまで待ち、声をかけた。

「エリット様、どうされるのでしょうか」

エリットは穏やかな表情をカレンに向けた。

「もちろん魔物は迎え撃ちます。城にも町にも近づけさせはしません」

「そのことなのですが、この襲撃を主導しているのは1人の魔族だと思われます。そしてその狙いは、私です」

「それで、あなたはどのようなつもりなのですか」

「町を守り、魔族を討ちます」

その言葉にエリットはうなずいた。

「では、司令にあなたのことは伝えておきましょう。よろしく頼みますよ」

「本当にそれでいいのか」

その声にカレンが振り返ると、険しい顔をしたハティスが立っていた。

「今は一刻も早くノーデルシア王国に戻るべきではないのか」

「タマキ様ならばここで戦うでしょう。それに、ここまでやるからには、あの魔族が私を見逃すとも思えません」

カレンはそれだけ言うところまで向き直り、一礼をした。

「行ってまいります」

その場を立ち去り、城の入り口まで来ると、それを待ち構えていた3人が行く手を塞いだ。

「今度は私達も戦いますよ」

ミラを先頭に、ソラとミニックも気合の入った表情をしていた。

カレンは3人の顔を見まわしてからうなずいた。

「もちろんそうしてもらいますよ、ただし、魔族と戦うのは私だけです」

「なぜです？ 私達だって強くなっています」

「大丈夫」カレンは笑顔を見せた。「私にも切り札の1つくらいはあります」

ミラ達はそれに何も言えず、4人は最前線、町の外れに向かった。カレンはすぐに軍を統括する司令官のもとに向かった。

「あなたがカレン殿ですか、エリット様から話は聞いています」

「はい。早速ですが、どのように戦うのでしょうか」

「まだ相手の全容がわかりません。しばらくの間はここで防御を固めて守りに徹します」

「そうですか、では私は敵の様子を探りましょう。町のことはよろしく願います」それからカレンは後ろの3人のほうを向いた。

「この3人はそれぞれ素晴らしい力を持っています。魔物達と戦う上で必ず大きな力になりますので、軍に加えてもらいたいのですが」

「ノーデルシア王国の戦士たるあなたがそう言うのであれば、間違いはないでしょう。ありがたく、力を貸していただきます」

3人は軍に加わり、カレンは単独で魔物の中に入りサロアを探すことにした。だが、サロアは見つからず、魔物達の散発的な襲撃を防ぎ攻勢にすることもあったが、魔物を完全に打ち破ることはできず、容赦なく時間は経過していった。

そして、魔物が現われて7日。すでに多くを倒しているにも関わらず、次々に湧いてくる魔物達に、町を守る兵士達にも疲労の色が濃くなってきていた。

「一体、あの魔物達はどれだけいるんでしょうか。これじゃきりがありません」

ソラは焚き火を眺めながら、ため息をついた。

「おそらく、前の町の魔族、サロアがどこかに隠れてこの魔物達を呼びだしているのでしょう。ですが、この7日ずっと探しても、姿はまったく見当たりません」

「どうしてです？ カレン師匠のことを狙っているのなら、すぐに姿を現してもいいじゃないですか」

ミラは不思議そうに言ったが、それにはミニックが首を横に振って答えた。

「たぶん僕達が疲れるのを待っているんですよ。そうすればカレンさんのことを助けようなんて余力はなくなって、1対1で戦えるでしょ」

「それもあるかもしれませんが」カレンは昼間は魔物が満ちていた場所に顔を向けた。「ただ、もしタマキ様が倒れたことがハティス様のおっしゃった通りの理由ならば、裏で魔族が動いている可能性も十分にありえます」

「じゃあ、真実、かどうかはまだわかりませんが、それを知っている私達をここに足止めしておくのが目的かもしれないんですか」
「可能性はありますね。まあ一番大きな理由はミニックの言う通りでしょうから、近いうちに決着はつけられます」

カレンは険しい顔で夜空を見上げた。

激突

翌日、今までよりもずっと多くの魔物が姿を現し始めた。

「この様子では、今日が山場のようですね」カレンはそう言いながら眼鏡を外した。「私は決着をつけに行きます。ここは頼みましたよ」

「まかせといてください！」

ミラは大きな声で返事をした。

「でも、例の魔族がどこにいるんでしょうか」

ソラは不安そうに疑問を口にした。カレンは魔物達から目を離さず、それに答えた。

「あれだけの数です、一気に攻勢に出てくるつもりでしょう。おそらく、あの魔族は後ろでそれを見ていますね」

「そうだとすると、あの中を突破していくんですか？ カレン師匠ならあんなもの上から飛んで行けるんじゃないやありませんか？」

「私の力はあまり見せびらかすものではありません。それに、魔物を放っておくわけにもいきません。正面から突破して、出来る限り倒していきますよ」

「いや、まずは僕達が道を作りますよ」ミニックは静かに言った。

「あれだけの数です、ある程度中に入っていけば、ここからは見えません。そうすればカレンさんと思う存分力を使えるでしょう。それが一番早く、力を消耗することなく、魔族のところにたどりつく方法だと思います」

「それはいい考えだと思うよ。カレン師匠、それでいきましょう」ソラはそう言ってカレンを見た。

「わかりました。3人とも、頼みましたよ」

カレンはその計画を話すため、司令官のいる場所に向かった。

そして1時間後、魔物達は町に向かって動き出した。カレン達4人は、展開する軍隊の前に立っていた。

「さて、それじゃあ僕の魔法でもおみまいしてやろうかな」

「ミニツク、ちょっと待った。戦いは長引くかもしれないんだから、ちゃんと魔力は残しときなさいよ」

「わかってますよミラ先輩。ソラ、君と一緒にやったほうがよさそうだよ」

「そうだね。準備はいいかい」

「もちろん。すぐに始めようか」

ミニツクは右手を前方に差し出した。

「ファイアウォール！」

声と共に右手を地面に叩きつけると、そこから炎の壁がミニツクの前に出現した。ソラは杖を地面に突き立てた。

「風よ、炎をまとい魔物達を貫け！」

渦をまいた風が炎の壁にぶつかり、それをまとって魔物達に向かっていった。魔物達にまでその炎の風が到達すると、その風の進行方向にいる魔物は次々に炎に飲み込まれていき、綺麗に直線の空間を作っていった。

「よし！ 行きましょう！」

ミラはカレンを先導するようにして、その空間に向かって走った。空間を塞ごうと動く魔物を剣で切りつけ、カレンの進む道を確保していった。

「ここまでで十分です、あなたは戻りなさい」

ある程度進み、すでに入ってきた空間が塞がれてからカレンはミラに並んでそう言った。ミラはうなずくと、方向転換をして来た道を戻り始めた。

「邪魔だ邪魔だ邪魔だあ！」

剣を振り回し、叫びながらミラは走った。その横を炎の風が通り過ぎた。

「姉さん！ こっちだ！」

ミラはわずかに走る方向を変え、その新しく作られた道を走った。魔物の中からもう少しで抜けられそうなところまで来たが、その前

を2体の魔物が左右から塞いだ。

「お前らも、邪魔だあ！」

ミラの剣がひときわ強い輝きを放ち、その魔物達はあっさりと切り捨てられた。ミラは元いた位置に戻り、さらにソラとミニツクと一緒に軍隊が展開している位置まで下がった。

「カレン師匠、必ず戻ってきてくださいよ」

ミラがそういうと同時に魔物達の中で何かが起こり、大量の魔物が盛大に吹っ飛んだ。それを合図とするように、ゆっくりと迫っていた魔物達は、一気にスピードを上げて突進してきた。

軍隊と魔物達は激突し、激しい戦いが始まった。しばらくの間、一進一退の攻防が続いたが、突然魔物達が崩れ始めた。

「あれは！ あの軍はなんだ！」

誰かがそう叫び、ミラがその方向を見ると、魔物達の横から数100の軍勢が突撃しているのが見えた。

「我らはノーデルシア王国軍だ！ 王の命により助勢に参上した！」
大きな声で叫んだ先頭の騎士は全身を重厚な鎧で包み、大剣を振るうバーンズだった。魔物達は次々とその大剣の前に散っていった。
「増援だ！ 一気に押し返すぞ！」

司令官はそう叫び、兵士達もそれに答えるように雄叫びを上げ、魔物達を押し返し始めた。

カレンは金色の瞳を光らせ、魔物達を一気に突破していた。そして、人も魔物も見当たらない、町からだいぶ離れたひらけた場所まで到達してから、上空を見上げた。

「そろそろ姿を現してはどうです？ ここならば、邪魔も入らず、思う存分戦えますよ」

カレンの声に反応するように上空に闇が出現し、その中からサロアが姿を現した。

「気づいてたのかよ。それならもっと早く声をかけて欲しいもんだぜ」

「気を使つて差し上げたんですよ。今度はしっかりと決着がつくれるように」

暗黒の剣を構え、カレンはサロアの姿をじっと見た。

「お熱い視線をありがとうよ。それじゃ、始めようか」

サロアはその右腕を炎に変え、それをカレンに向けて振り下ろした。その軌道から数発の火の玉が飛んだ。カレンは地面を蹴って飛び、それを暗黒の剣で斬りながらサロアに迫り、真っ向から暗黒の剣を叩きつけた。

サロアはそれを地面に急降下してかわしたが、カレンもすぐにその後を追った。カレンはそのままの勢いで、サロアを斬ろうとしたが、そこに炎の右腕が横殴りに襲ってきた。なんとかそれを暗黒の剣で受けたが、カレンの体は衝撃で横に吹き飛ばされた。そのまま地面に激突しそうになったが、体勢を立て直した着地した。

「いいねえ。この間より気合が入ってるぞ。でもなあ、それじゃまだ俺には勝てねえぞ」

「そうでしょうね。しかしご心配なく、あなたを片付ける方法くらい考えてありますから」

サロアは本当に楽しそうに笑った。

「なら、それをさっさと見せてもらおうか！」

サロアは左手をカレンに向かってかざし、そこから炎を噴き出させた。カレンは暗黒の剣を闇の塊に変化させ、それを振るった。衝撃波で炎の軌道が歪み、その小さな隙間をはいくぐってカレンは突進した。

サロアは右腕を振り下ろしたが、それは再び変化した暗黒の剣に止められた。カレンはそれを跳ね上げると同時に、サロアの腹に思い切り蹴りを入れた。

「ぐうがあっ！」

うめき声を上げてサロアは吹っ飛び、そのまま地面を転がり、うつぶせに止まった。カレンはそれに向かって闇をまとわせたナイフを投げつけた。だが、倒れていたサロアはそれを左手でしっかりと

掴み、ゆつくりと立ち上がった。

「今のはけっこう効いたぜ。いよいよ俺も本気を出さないとな」

サロアは両手を広げた。炎となっていた右手が一度元に戻り、その全身から爆発的に炎が噴き出した。それが収まると、その体の全てを炎としたサロアが立っていた。

「こいつが俺の本気だ。あんたの本気も見せてもらおうか」

「いいでしょう」

カレンは構えていた暗黒の剣を下げ、目を閉じた。

「タマキ様、私に力を」

そうつぶやき、鎧の中にしまっていたアミュレットを取り出し、それを握り締めた。

まず闇の翼の右側の片方が消し飛び、そこに闇の翼と同じ形の、光でできた翼が現われた。暗黒の剣は、その刀身の半分を光が覆っていき、片面が闇、片面が光の剣となった。

そして、カレンの開かれた右目は白銀に輝き、左目は黒く、飲み込まれそうな闇の色になっていた。

「決着を、つけましょうか」

カレンは闇と光の剣を構えた。

炎と灰

まず動いたのは炎の塊となったサロアだった。体ごとぶつかってきたが、カレンはそれを素早く跳び越え、背後にまわった。サロアの背中に向かって剣が振るわれると、直接剣が届かない距離にも関わらず、その炎の体の一部が切り裂かれた。

サロアはそれにはかまわず、振り向きざまに口があった部分から炎を噴き出した。カレンはそれを後方に素早く下がってかわすと、上空に飛び上がった。サロアもそれを追って飛び上がったが、上昇するカレンとの距離は縮まらなかった。

サロアは火の玉を数発放ったが、カレンはそれを大きく弧を描くように飛んでかわすと、そのままサロアの後方から突っ込んでいった。サロアは振り返り左手から炎を噴出させたが、カレンはそれを剣の一振りで散らせ、サロアとすれちがいざまに剣を横薙ぎにした。だが、それはサロアの急降下でかわされた。そのままサロアは勢いよく着地し、空中に静止したカレンと対峙した。

「なるほど、言うだけのことはあるな。今までとはレベルが違う」「それがわかってるのなら、今すぐ消えて、2度と姿を現さないでもらいたいですね」

「決着つける気満々の奴がよく言う」

サロアは両手を広げ、その手の開いた。それと同時にそこから無数の火の粉が飛び、それは人の頭ほどの火の玉になってサロアの周囲に浮かんだ。

「だが、勝つのは俺のほうだぜ！」

その声を合図に、火の玉は一斉に動き出した。だが、カレンは静止したままだった。そこに火の玉が飛び、次々に爆発していった。だが、その中からカレンは無傷で飛び出し、急降下しながら剣を真上から振り下ろした。サロアはそれを飛び退いて避けたが、その立っていた地面は大きくえぐれた。

一度は飛び退いたサロアだったが、すぐに地面を蹴ってカレンに向かつて飛んだ。右腕を斜め上から振り下ろしたが、それはカレンの剣に受け止められた。そのままの体勢で力比べが始まった。

力は均衡し、至近距離での睨みあいが続いた。その間もサロアの炎はカレンの体をじりじりと焼いていったが、それでもカレンは顔色を変えずに、徐々にサロアを押し込んでいった。

それに耐えられなくなったサロアは後ろに下がり、カレンの剣を逸らそうとした。だが、カレンは素早く剣を一度引いて、踏み込んだ。

「ガアアアア！」

下から振り上げられた剣がサロアの炎の左腕を切っていた。切り落とされた左腕は落ちた場所で燃え尽きたが、サロアはなんとか上空に逃れた。そして、切り落とされたはずの左腕は徐々に再生していった。もちろん、カレンはそれを待たなかった。

直線的に突進するのではなく、サロアよりも高い位置まで一気に上昇すると、そこからナイフを投げ、急降下した。サロアはナイフはかわしたが、カレンの剣を完全にかわすことはできずに、右肩をその斬撃がかすめた。

カレンはそのままの勢いで着地すると、すぐに再び飛び上がり、今度は下からサロアに迫った。今度はかわそうとせず、サロアは足からカレンに向かつて突っ込んでいった。カレンはそれを急旋回して避けた。サロアはそのまま着地し、カレンは少し離れた場所に下りた。

サロアは左腕を完全に再生させ、それをカレンに向けた。

「貴様は！」

大地を揺るがすような声と共に、その左腕がよりいっそう激しく燃え上がった。

「焼き尽くしてやる！」

サロアの2倍以上の大きさの炎の渦がカレンに向かつて伸びた。カレンはその場から動かず、剣を振りかぶり、その炎の渦に向かつ

てそれを振り下ろした。炎と剣の衝突で衝撃波が広がった。

カレンは炎の渦を食い止めてはいたが、少しずつ後ろに押され始めた。そこにサロアがさらに力を込めた勢いが伝わり、体勢は崩さなかったが、さらに押された。

しかし、そこでカレンの右目がさらに輝きを増し、左目は闇の深さを増すと、それに反応するように、その手に持つ剣が光と闇を大きくしていった。

「ハアッ！」

気合を入れて剣を振り切ると、炎の渦は散った。だが、カレンの視線の先にはサロアの姿はなかった。すぐに上空を見ると、そこには自分の体の4倍以上はある火の玉を作り出したサロアがいた。

「よけたらこのあたりは火の海だぜ、よけるなよ！」

巨大な火の玉が放たれた。カレンは剣を構えると、少しの迷いもなくそれに飛び込んでいった。カレンは瞬時に火の玉を貫き、勢いにまかせてそのままサロアの胴に剣を突き立て、切り裂きながら交錯した。

サロアは切られた場所を手で押さえながら落ちていった。カレンはそれは追わずに、火の玉の着弾地点に飛ぶと、勢いを失ったそれを剣で弾き返した。火の玉は見事に跳ね返され、上空で凄まじい爆発を起こした。

そこにサロアが飛び込んできたが、カレンは落ち着いてそれを横にかわすと同時に、その足に向かって剣を振った。

「ウゴオガアア！」

サロアの右足は切断され、バランスを崩して勢いよく地面に突っ込んで転がった。カレンはそれを追ったが、サロアは転がりながらも両手から滅茶苦茶に炎を噴射しながら上空に逃れた。カレンは炎をかわして、距離をとった。

「クソが！ クソが！ このクソがああああああ！」

サロアはそう叫ぶと、左足を再生させ、その炎の体の全てをいっそ燃え上がらせた。

「俺が負けるわけではない！ 負けるわけではないいいいい！」

巨大な炎の塊となったサロアは火の玉を撒き散らしながら、カレンに向かって突進した。カレンはそれを横に跳んで避けたが、そこにも火の玉が飛来した。それを剣で切り払いながらカレンは走った。だが、すぐにサロアが後ろから追いついてきた。カレンは上空に飛び上がりそれをかわしたが、サロアはすぐにターンして、今度は正面から迫った。カレンはそれに剣を振り下ろしたが、体ごと弾かれて地面に叩きつけられた。

カレンは地面に片手をついて体を起こし、上空のサロアを見据えた。

「止めだあああああああ！」

そこにサロアが押しつぶそうとでもするように急降下してきた。カレンは後ろに飛び退いてそれをかわそとしたが、サロアは軌道を変えてそれを追ひ、カレンは炎に飲み込まれそうになった。

しかし、次の瞬間、稲妻がサロアの体を撃ち抜いた。シヨックでその勢いが殺され、カレンとの距離が開いた。カレンは飛び退いた位置から地面を蹴り、体ごとぶつかるようにして、剣をその胸元に深々と突き刺した。

「消えろおおおおお！」

カレンの咆哮に反応して、剣は強く光りだし、サロアの体をさらにえぐった。

「馬鹿なああああああああああああ！」

サロアは悲痛な雄叫びを上げながら、なんとかその剣を両手でつかんだ。

「町も、貴様ら人間どもも道連れだあああああ！」

凄まじい勢いで飛び上がった。その向かう先は知の都。カレンはなんとか剣に力を込めてそれを落とそうとしたが、サロアの最後の力はそれを許さなかった。

そして、魔物達と激闘を繰り広げている最前線が見えてきた。そこで気が抜けたのか、一瞬サロアの力がゆるんだ。カレンはそのチ

ヤンスを逃さず、力づくで軌道を変えた。サロアは抵抗しようとしたが、すでに手遅れで、そのまま2人は最前線から離れた地面に激突した。

投げ出されたカレンは、なんとか膝をついて顔を上げた。すでに瞳は元に戻り、体にもいくつもの火傷や傷を負っていた。カレンの視線の先のサロアは、炎ではなく、ぼろぼろな状態で普通の体に戻っていた。それでもサロアはゆっくりと立ち上がった。

「なめたこと、しやがって」

そうつぶやきながらカレンに向かって1歩ずつ、ひどくゆっくりと足を進めた。

「今、止めを」

そこまで言ったが、その場に崩れ落ちた。その体は末端から灰になり、風に飛ばされていった。カレンはその光景を見届けてから立ち上がるうとしたが、そうすることはできず、その場に倒れた。

王国への帰還

カレンはぼんやりと目を覚ました。どうやら馬車の中に寝かされているというのはわかった。体を起こそうとしたが、背中に痛みが走り、中途半端なところで止まってしまった。

「よかった、目が覚めたんですね」

嬉しそうなミラの声がして、カレンの背中はその手で支えられた。カレンはそれに助けられて体を起こした。

「あれから町はどうなりました」

「ばっちり守りぬきました。バーンズさん達が応援に駆けつけてくれたので楽勝でしたよ。それにカレン師匠が魔族を倒してくれたんですよね、あれ以上魔物が湧いてくることもありませんでした」

「それではこの馬車は」

「バーンズさん達が乗ってきたものです。今はノーデルシア王国に向かっています」

「そうですか」

そう言っただけでカレンは目を閉じた。

「時間は、どれくらい経っていますか」

「あれから2日です」

「やはり、あれはすこし無理があったようですね」

カレンは頭に手を当てながらそうつぶやくと、座りなおして馬車の中を見まわした。装備一式は綺麗にまとめられていた。

「とりあえず私の装備を取ってもらえますか」

「はい」

ミラが持ってきた鎧を、座ったまま器用に身に着け、ベルトのナイフやショートソード、ダガーをそれぞれ自分の前に広げて、確認してから装着していった。全てを身に着けると、カレンは少し背筋を伸ばした。

「ところで、ハティス様は一緒ですか」

「ええ、一緒です。ずっと図書館にこもってたおかげで、例の結界に関して何か見つけたみたいですけど」

「それは話を聞かせていただかなくてはいいけませんね。今日の夜にでも聞きにいきましようか」

「でも、体は大丈夫なんですか？」

「まだ戦えるほどではありませんが、大丈夫ですよ」

「わかりました。それじゃ、私はみんなにカレン師匠の目が覚めたことを知らせてきます」

ミラはそう言って勢いよく馬車から飛び出して行った。カレンは足を崩して楽な姿勢をとった。

「失礼します」

そのまましばらくしてから、バーンズが馬車に入ってきた。バーンズはカレンの様子をざっと見てから、安心したような表情を浮かべて、馬車の中に腰を下ろした。

「もう鎧を身につけていられるほど回復したんですか」

「私の鎧は軽いものですからね。それよりも、なぜバーンズ様達が増援に来たのでしょうか？ 報せを受けてから出発したのでは、これほど早く到着することは出来なかったと思いますが」

「それは、エバンス様と葉子様が精霊から知の都の危機を知らされたのです」

「精霊からですか。ソラも精霊使いですから、そのおかげかもしれませんね」

「ええ、ですが、大規模に軍を動かすのは時間的にも政治的にも難しいことだったので、一番足の速い私の切り込み隊だけを率いて来たんです」

「そうですか。しかし、バーンズ様に来ていただいて助かりました。出来るだけ早く戻らなくてはいいけませんから」

「勇者様のことですね、話はミラ達から大体聞いています。伝説の英雄の魂とは、にわかには信じがたいことです」

「間違っていればいいとは思いますが、そうでない可能性も高いと

思います。そうだった場合、何が出来るかはわかりませんが、全力を尽くす覚悟だけはしておかなくてははいけません」

バーンズはカレンの言葉に深くうなずいた。

「そうですね。カレン殿は到着までゆっくりと体を休めていてください、雑事は全て我々が引き受けますよ」

「ありがとうございます」

カレンが頭を下げると、バーンズは馬車から降りていった。

それから4日後の夜、ノーデルシア王国まであと1日という距離まで到達していた。すでに動き回るのに支障がなくなっていたカレンは、焚火の前で自分の武器の手入れをしていた。その向かい側にはハティスが目を閉じて座っていた。

「いよいよ明日ですね」

そこにミラとソラがやってきてカレンの隣に座った。

「ええ、何があるかわかりませんから、2人ともしつかり準備をしておいたほうがいいですよ」

ミラはカレンの言葉に胸を張った。

「それなら心配いりません。何があるうとばっちり対応してみせますよ」

「僕も、できるだけのことはします」

「もちろん僕もそうしますよ」

ミニツクも2人の後ろから顔を出したそう言った。カレンはそれを見てわずかに微笑んだ。

「頼りにしていますよ」

それからカレンは武器をしまつて、ハティスに顔を向けた。

「ハティス様、あれから何か新たにわかったことがあるなら、教えていただけませんか」

ハティスは目を開けてカレンを見ると、ため息をついた。

「大したことがわかったわけではないのだよ。だが、重要なことではある。あの結界は500年程度では、その力を失うわけがないの

だ」

「つまり、誰かが意図的に結界の力を弱めている、ということですか」

「その通りだ」

「ハティス様以外にも結界の存在に気がついた者がいるのか、それとも、最初からそのことを知っていたのか」

「ちよつと待つてください」ミニツクが口を挟んだ。「最初って500年前でしょ？ それを最初から知ってるなんていったら」

「少なくとも人間ではありませんね」

全員が黙り込んだが、答えはわかっていた。ミラが体を伸ばしてから軽い調子で口を開いた。

「まーた魔族ですか。しつこい上に懲りない連中ですね」

そして深夜、カレンは静かに馬車から出ると、ハティスが休んでいる馬車に向かった。ハティスは馬車ではなく、少し離れた焚火の前に座っていた。カレンはその隣に腰を下ろした。

「少し聞かせていただきたいことがあるのですが」

ハティスは黙ってうなずいた。

「ハティス様がしてきた、伝説の英雄の研究について、その詳しいことを教えていただけないでしょうか？」

数分間、ハティスは何も言わなかったが、おもむろにその重い口を開いた。

「そう、私はずっと伝説の英雄という存在の研究をしてきた。そして、その存在がこの世界のものではないという確信を持った」

「タマキ様のように召喚された者だったということですか」

「いいや、違う。おそらくは、ただ迷い込んできたのだ。なぜなら、異世界からの召喚の術を作り出したのはその英雄だからだ。そして、それを現代に復活させたのが、私だ」

カレンは黙ったまま続きを待った。

「6年前、お前と別れた後、私は1人の青年を異世界から召喚した。

いい青年だったが、彼は魔族に魅入られてしまった。そして彼は人間にとって脅威となる存在になった」

「それが闇王ですか。しかし、なぜ召喚などということを」

「あの頃から魔族の脅威は存在していた。しかし何より、私は英雄をこの目で見たかったのだ」

「身勝手なこととは、思わなかったのですか」

静かだがわずかに怒りをにじませたカレンの言葉に、ハティスは疲れたような表情を浮かべた。

「わかつている、今はよくわかつている。だから私は召喚の術はそれ以降使わなかった。だが、闇王に対抗する手段として、その術がある人物に託した」

「私の力だけでは魔族に対抗できなくなった時のための備えというわけですね。そして、その術を託されたのが、ノーデルシア王国の賢者と呼ばれるロレンザ様ということですか」

「そういうことだ」

そう言うハティスは口を閉ざした。カレンはしばらくしてから立ち上がった。

「最後にもう1つ聞かせていただきたいことがあります。今回タマキ様やヨウコ様が召喚されたのと、城の封印の力が弱まったことは関係があるとお考えですか？」

「それはわからないのだ。だが、もし関係があるとしたら、全てのことは魔族が裏で手をひいていたのかもしれないな」

カレンはそれには答えず、黙ってその場を立ち去った。

封印

一行は昼頃に城に到着し、カレンはまず環の部屋に向かった。護衛の兵士に軽く手を上げて下から部屋に入ると、すぐにベッドに近づいていった。

環は今意識が無く、出発した時よりも弱っているように見えた。カレンはベッドの脇に膝をついてしゃがむと、環の額に自分の右手を乗せた。

「タマキ様、私が最初に考えていたよりも、事態は複雑で厄介なようです。ですが、必ず解決してみせます。それまで待っていてください」

それだけ言うとカレンはまっすぐ部屋を出て行った。それからハティスと合流し、エバンスの執務室に向かった。護衛の兵士に取次ぎをさせ、2人は室内に入った。中ではエバンスと葉子が2人で書類仕事をこなしているところだった。

2人は手を止めて顔を上げた。室内に入ってきたカレンを見てからハティスに目を移すと、エバンスは表情を変えなかったが、葉子は軽く首をかしげた。

「カレン、そちらの方は？」

「この方が大賢者と呼ばれていたハティス様です」

カレンに紹介されたハティスは頭を深々と下げた。

「王子には初めてお目にかかります」

エバンスは立ち上がり、ハティスの前まで歩くと、右手を差し出した。

「あなたの話は聞いている。タマキのことで力を貸してもらえると、そう考えてもかまわないのだね？」

ハティスは差し出された手を握り返してうなずいた。

「もちろんそのつもりです」

「それならば、すぐに話を聞かせてもらおう」

エバンスは自分の机に戻った。カレンは自分とハティスの椅子を用意して、2人はそれに座った。まずはカレンが口を開いた。

「今回タマキ様が倒れた原因ですが、この城そのものに原因がある可能性があります」

「この城に？」

「はい。これはハティス様の研究からの推測ですが、この城そのものが巨大な結界で、その効果は封印です」

エバンスは黙ってうなずいて先をうながした。

「それはかつての伝説の英雄が施したもので、封印されているのはその英雄です」

「それがなぜ問題になるのだ」

「英雄が自分を封印したのは、自身の力が破滅の方向に傾いてしまふのを止められなかったからです。長い時間で肉体は滅びたはずですが、その破滅の力に満ちた魂はまだ存在しているはずで。そして、その魂は新しい肉体を求めている、その力が伝説の英雄に匹敵する魔力を持つタマキ様に影響を与えているのだと思われます」

「そうか」

エバンスはそれだけ言うと、うつむいて考えをまとめているようだった。しばらくしてから顔を上げた。

「話はわかった。その伝説の英雄が封印されている場所というのはどこなのだ」

「この城の地下です。おそらく誰にも知られていない場所なのではないでしょうか」

そこでハティスが1枚の紙を取り出してエバンスに手渡した。それには簡略化した城の図が記され、英雄が自らを封印したと思われる場所に印がつけられていた。

「確かに、このような場所は私も知らない。すぐに確認しなければならぬ」

エバンスは立ち上がって葉子に顔を向けた。

「私はしばらく席を外す。ヨウコ、悪いがしばらくここを頼む」

「わかりました」

葉子は微笑んで3人を送り出した。

途中でバーンズと合流し、4人は城の地下の最深部まで降りてきていた。ほとんど倉庫としてしか利用されていない地下は空気が淀んでいた。目的の場所には到着したが、もちろんそこには入口のようなものは見当たらなかった。

ハティスは壁に手を当てながら、ゆっくりと探るように辺りを調べていた。そして、一通り調べ終わると、壁のある地点に両手を付いた。

「おそらくこのあたりでしような」

エバンスはその場所に近づき、片手を壁に当てた。

「こんな場所に英雄が自らを封印していたとはな。今まで、誰一人として気がつくものはいなかったのか」

「結果には人の認識を阻害する効果もあるのではないでしようか。どうでしょうか、ハティス様」

「カレンの言う通りと考えたほうがいいかもしれませんが。結界の力が弱まっていなければ、こうして存在を感じとることも難しいかっただけでしょう」

ハティスは全員の顔を見まわしながらそう言った。

「とにかく、この壁を破らなければいけませんね。あまり人を使うわけにもいかないでしょうから、私がやりましょう」

バーンズはその場から立ち去り、手に巨大なバトルハンマーを持って戻ってきた。

「倉庫にあった古いものですが、壁を破るには十分でしょう」

そう言っただけでバーンズは壁をバトルハンマーで崩し始めた。カレンも眼鏡を外してその瞳を金色に輝かせると、自分の拳を使って壁を崩すのに協力し始めた。

そして、壁が崩されると、その先には4人の想像とは違うものの、さらに地下へと続く洞窟があった。

「行きましょう」

カレンは眼鏡をかけてから壁の松明を手に取り、先頭に立って洞窟に足を踏み入れた。洞窟は蛇行しながらも確実に地下に続いていた。

そうして、かなり地下深くまで到達した。徐々に道がなだらかになり、幅も広くなっていて、その先に光が見えてきた。

「これは驚きました。地下にこれだけの空間があったのですね」

その光の向こうに到達したカレンはそう言っ、その空間を見回した。その広さは城の訓練所ほどもあり、中央には強い光を発する人間1人を余裕で中に入れられるようなサイズの球体が浮いていた。後ろの3人もその光景に驚いていた。

「ここが英雄が封印されている場所なのか」

エバンスはそう言いながら光る球体に近づいていった。3人もそれに続いた。

「この球体が封印なのか？」

「おそらくそうでしょうな」

ハティスは球体を見上げてそう言った。

「城を1つ使ってこのサイズの結界です。かなり強力なのはまちがいないでしょうが、やはり私が推測していたよりも力は弱くなっていますな」

「その通り。さすがかつては大賢者と称せられたハティス様」

突然背後から声が聞こえ、4人は振り返った。そこには薄ら笑いを浮かべたロレンザが立っていた。エバンスが1歩前に出た。

「なぜここに來たのだ。誰も近づけないように指示を出していたはずだが」

「ええ、指示は間違いなく出されていましたが、私にとってはそんなものは影響のあるものではありませんね」

そう言ったロレンザは薄ら笑いのまま、どんどん近づいてきた。カレンがそれに向かって走り、行く手を遮るように立ちはだかった。バーンズはエバンスを守るようにその前に立ち、腰の剣に手をかけ

た。

「どういうことか、わかるように説明していただけますか」

カレンは腰のナイフに手を伸ばし、ロレンザから目を離さないようにした。

「おや、カレン。鋭いあなたのことだから、私の目的くらい、答えなくてもわかるのではないですか？」

「それは買いかぶりというものですよ。私がそれほど鋭ければ、今あなたとこうして対峙することもなかったでしょうから」

「そうして謙遜することもないでしょう。あなたが私のこと心底信頼していたことなどなかったのですからね。そのおかげで多少苦労させましたけど、今の状況はこの通り」

ロレンザが指を鳴らすと、その背後の空中に闇が広がり、そこからミラ、ソラ、ミニツクの3人、そして環が地面にゆっくりと下ろされた。4人とも意識が無いようだった。

「この3人は私の邪魔をしてくれましてね。必要はなかったんですが、観客として連れてきたのですよ。何しろ、あなた達の弟子ですからね」

「今すぐ、その3人とタマキ様を解放しなさい」

カレンは静かに、不自然なくらい抑えた声を出した。ロレンザはそれを軽く聞き流した。

「さて、そろそろ始めましょうか。魔王の誕生を」

ロレンザは手を部屋のある球体に向けた。

魔王の器

ロレンザがかざして右手から一条の光が走り、それが球体を照らした。光を浴びた球体はよりいっそう強く光りだした。

「あなたの言う魔王というのは、ここに封印された伝説の英雄の魂を使って、タマキ様を魔族にする、ということでしょうか」

「魔族？」

ロレンザはカレンを馬鹿にするように笑った。

「ただの魔族ならば魔王などと言うわけがないでしょう。おとなしくして、その目で見ていれば答えはすぐにわかりますよ」

「そんなものは見たくありませんね」

カレンは眼鏡を外して、ショートソードを抜き放った。

「おやおや、あなたのことは前から冷静ぶってるだけだと思ってましたが、それは当たっていましたね。確かにここは戦うには十分な広さも強度もあるでしょうが、あなたは7人も人間を守りながら戦えるつもりですか？」

「そうしなければならぬのなら、そうするだけです」

ショートソードを構えると、カレンはサロアと戦った時と同じように、右目は白銀、左目は黒い闇、そしてその2通りの光と翼という姿になった。ショートソードは片面ずつ光と闇に覆われていった。「そんな力まで得ていたとは、言うだけのことはあるということでしょうかね」

そう言ったロレンザに、カレンは躊躇なく斬りかかっていた。だが、ロレンザは落ち着いて環の体をつかむと、一瞬でその姿を闇に消した。そして、その姿はエバンス達が立っている反対側、球体の向こう側に現われた。光を発する右手は相変わらず球体に向けていた。

「残念なことですが、あなたの相手より先にすることがありますからね」

ロレンザは球体の反対側にいるエバンス達に向かって左手をかざすと、そこから雷が放たれた。バースがとつさに前に出ようとしたが、ハティスがそれよりも早く動いた。その手から魔法の盾が展開され、雷を防いだ。

「おや、がんばりますね。もう若くはないのですから、あまり無理はしないほうがいいですよ、大賢者さま」

嘲るような調子で話しながら、ロレンザは雷の勢いを強めた。だが、ハティスは1歩も引かなかった。

「全てお前の思惑通りだったのか？ 私が召喚の術を完成させたのも、それで呼び出したあの青年を魔族に堕としたのも、召喚の術を私がお前に教えたのも、そのために新たに勇者が呼び出されることになったのも！」

「細かいことを言えば、全てが思惑通りとは言えませんがね。まあそんなことは500年という歳月に比べれば大したことではありませんでしたよ」

そこにカレンが上空から斬りかかったが、ロレンザは左手をその方向に向け、魔法の盾でその一撃を受け止めた。

「今の勇者は魔法の威力を限界以上に高める方法を編み出しましたね。私も、使わせてもらいましょうか。20倍、バースト」

左手の魔法の盾が爆発に変わり、カレンは吹き飛ばされて壁に叩きつけられた。その余波で、ハティス達も入口付近まで飛ばされた。ロレンザはそれを確認すると、両手を球体に向けた。

「さて、そろそろ始めましょう」

かがげられた両手から、今までよりも強烈な光が発せられた。それを浴びた球体の面が、徐々にほころび始め、そこからどす黒いなかのぞいた。カレンはすでに立ち上がっていて、それを止めようとしたが、球体が発している何かに遮られ、ロレンザに近寄ることができなかった。

そうしている間にも、球体の中にあつたどす黒いものは徐々にその外に出てきていた。それは球体の外に完全に出ると、不定形で実

体があるかどうかわからない、なんとも形容しがたいものとして空中に存在していた。

ロレンザはそれを恍惚とした表情で見つめながら、両手を高々と上げた。

「破滅を司る悪魔、ドゥームデーモンよ。この破滅の力に染まった強き魂を喰らい、力とするのだ！」

両手の間に闇が広がり、そこから実体のない霧のような存在が現われた。そして球体から出たどす黒いものに向かい、それを取り込み、まるで全てを飲み込む虚無のようになった。

「さあ、ここにある強き肉体を捧げよう！ 今こそ、この世界にその持てる力の全てと共に姿を現せ！」

虚無のようなものは環の体に入り込んでいった。その体はわずかに震えただけで、それを受け入れた。

数秒の間の後、環の目は開かれ、その体が動き出した。カレンは無理にロレンザに近づこうとするのをやめ、それをじっと見ていた。環は自分の手を見つめ、その体を一通り確認してから口を開いた。

「不完全とは言え、一度は我を打ち破ったこの肉体、悪くない」

その声も、立ち振る舞いも、すでに環のものではなかった。カレンは感情を押し殺し、それに向かって歩き出した。今度は何にも阻まれず、球体の脇に立ち、ロレンザと環だったものと対峙した。

「1度は倒された悪魔を呼び出すとは、どういうつもりでしょうか」「倒された？ 実におめでたいことですね。あの程度の器では本来の力の10分の1も出せているかどうか怪しいというのに」

ロレンザは薄ら笑いでそれだけ言うと、音もなく後ろに下がっていった。

「まあ、見せてもらいましょうか。カレン、あなたの力を」

そして、そこには環の姿をしたドゥームデーモンとカレンが残された。カレンは剣をドゥームデーモンには向けずに、ただその姿を睨みつけた。

「貴様と戦ったのは少し前だったが、その時よりも力をつけている

ようだな」

ドゥームデーモンは1歩、カレンに向かって足を踏み出した。カレンもそれに応じるように1歩踏み出し、剣を構えた。

「始める前に言っておきます。タマキ様の体からすぐに出て行きなさい、あなたのようなものが好きにしたい体ではありませんよ」

ドゥームデーモンはそれに対して、ただ笑った。

「それならば、貴様の力でやってみせろ」

そして地面を蹴って跳んだ。凄まじい勢いでカレンに迫り、すれ違いざまに無造作に腕を振るった。カレンはそれなんとか剣で受けたが、その力に体勢を崩された。ドゥームデーモンはそのまま壁まで到達すると、そこを蹴って今度は背後から襲いかかった。カレンは体勢を崩しながらもなんとかその方向に体の向きを変え、勢いのまま繰り出された蹴りを剣で受け、逸らそうとした。

だが、剣は碎かれ、ドゥームデーモンの蹴りがカレンの肩をかすった。カレンはわずかによろめいたが、すぐに振り返った。しゃがんだ状態で地面に着地したドゥームデーモンは、ゆっくりと振り返りながら立ち上がり、自分の体を確認するように見まわした。

「この世界でこれほどの力が使えるとはな」それから、カレンに目を移した。「貴様の力も大したものだな。今のをしのげるとは思っていないかったぞ。だが、次はない」

カレンは中ほどから碎かれたショートソードを投げ捨てた。

「次、ですか。残念ですが、それでは終わらせませんし、あなたをそのままにもしません」

カレンは手を自分の胸の前で組んだ。その瞬間、そこを中心として光と衝撃がほとばしった。そして、それが止むと、そこには両方の瞳と翼を白銀に輝かせ、髪の毛もそれと同じ色に変わったカレンが立っていた。

「ほう、面白い」ドゥームデーモンはにやりと笑った。「しかし、それは貴様にもかなりの負担があるだろう。なんのためにそこまでする？」

「私は私の望みをかなえるために戦うだけです」カレンは微笑を浮かべた。「タマキ様、これが終わったら、今度は目的のない旅でも始めましょう」

「そのようなこと、どうせこの男には聞こえていないぞ」

「いいえ、そうではないことをこれから教えてあげましょう」

カレンとドゥームデーモンの間の緊張が一気に高まった。

限界への挑戦

対峙するカレンとドゥームデーモンはまだ1歩も動いてはいなかった。だが、その間の空気は張り詰め、いつ何が起こっても不思議はない雰囲気だった。それを動かしたのはカレンだった。

カレンはその場の雰囲気とは対照的に、ゆっくりと歩き出した。それを見たドゥームデーモンもゆっくりと歩き出した。そして、2人は互いに手が届く距離まで到達すると、同時にその拳を突き出した。

拳同士が激突し、衝撃波が空間を満たした。その衝撃で双方とも後ずさったが、すぐに踏み込み、再び拳を激突させた。再び双方とも衝撃で後ずさったが、カレンは地面を蹴って跳ぶと、ドゥームデーモンに回し蹴りを叩き込んだ。

それはドゥームデーモンの腕に防がれた。ドゥームデーモンは蹴りの威力に少し押し込まれたが、それを強引にはねのけた。そして、間髪入れずに、空中のカレンに向かって踏み込んでまっすぐに蹴りを放った。カレンはそれを腕をクロスさせて受けたが、凄まじい勢いで後方に飛ばされた。

しかし、カレンは壁に足をつけ、そこを蹴ってドゥームデーモンに向かって飛んだ。その勢いのまま、右足を突き出し、強烈な蹴りを見舞った。それはドゥームデーモンの胸元に完全にきまり、その体を後方に吹き飛ばした。

ドゥームデーモンは地面に手について、その勢いを殺してから顔を上げた。

「いい攻撃だ。だが、まだ足りん！」

そこにカレンが一気に間合いを詰め、頭めがけて回し蹴りを放った。ドゥームデーモンはそれを後ろに飛び退いてかわして地面を蹴り、隙ができたカレンに向かって跳んだ。そして、そのままの勢いで頭突きをした。

カレンはそれをまともに受け、のけぞりながら数歩後ずさった。ドウムデーモンは続けてカレンの腹に向けてパンチを放った。カレンはそれをまともにくらったが、こらえて体勢を立て直すと、その次の顔面に向けて放たれた拳は自分の腕で受け止めた。

ドウムデーモンはすぐに腕を引くと同時に、カレンの腹に向かって正面から足を突き出した。カレンは後ろに跳んでその衝撃をかわらげた。いったん間合いをとった両者は、そのまま円を描くようにして歩き、互いの位置を入れ替えてから再び構えた。

ドウムデーモンは素早く動き腕を振るったが、それはカレンに向かわず、飛んできた氷の牙を砕いた。

「余計な邪魔はするな」

ドウムデーモンはロレンザを睨みつけてから手をゆっくりと引いた。カレンはその間、全く動こうともせずにその光景を黙って見ていた。

「もう一度余計なまねをしたら、貴様も我の敵だ」

ロレンザは一瞬口元に笑いを浮かべてから、深々と頭を下げた。

ドウムデーモンはそれを見ようとせず、すぐにカレンの方に向き直った。

何かを言おうとしたのかもしれないが、それは目の前に迫ったカレンの右の拳で遮られた。避けることはできず、拳が顔面を捉えた。さらに左の拳がきれいにその顔面に直撃した。ドウムデーモンはぐらつかなかったが、その脇腹にカレンの右足が叩き込まれ、少し体勢を崩した。そこにカレンの左足が高く上がり、その頭の側面に迫った。ドウムデーモンはなんとか下がりながら腕を上げ、その蹴りを防いだ。

攻撃を防がれたカレンは、すぐに後ろに下がって間合いをとろうとした。だが、ドウムデーモンは体勢を完全に立て直そうとはせずに距離を詰めた。まず右の拳を振るってカレンを殴りつけると、さらに左の拳で腹を、再び右の拳を下から突き上げた。カレンは3発目をかわすと同時に、後ろ回し蹴りをドウムデーモンの腹に決

めた。

両者は距離をとって、動きを止めた。どちらもそれなりのダメージはあるようだったが、カレンのほうがそれは大きいようだったが、カレンは全くひるむことなく、ますます気合を充実させていた。それはドゥームデーモンも同じだった。

ドゥームデーモンは腰を落とすと、低い姿勢で地面を蹴った。カレンはそれを上空に飛んでかわしたが、ドゥームデーモンは素早く方向転換してすぐに追った。カレンは天井に手と足をつけて反転すると、勢いをつけてそれに向かった。

そのまま右膝を突き出し激しく激突したが、それはドゥームデーモンの腕に防がれていた。ドゥームデーモンはカレンの足をつかんで振り回し、地面に向かって投げつけた。カレンはぎりぎりで地面に激突するまえに体勢を立て直したが、そこに真上からドゥームデーモンが降ってきた。

「ガハッ！」

足がカレンのみぞおちを捉え、地面に押しつけた。ドゥームデーモンは再び上空に飛び上がり、今度は膝を落とそうとした。カレンは横に転がってなんとかそれを回避すると、膝について体を起こした。

そこにドゥームデーモンの回し蹴りが追い討ちをかけた。カレンはそれをなんとか腕で防御したが、その勢いを受け止めることは出ず、地面を勢いよく転がった。カレンは体勢を立て直そうとせず、ただがむしゃらに上昇して、自らの背中を天井に叩きつける形で止まった。

それでもドゥームデーモンは追ってきたが、カレンの動きが予想外だったのか、ほんの少しだけ遅れた。カレンが両手を広げると、光がその手を覆った。そして、襲ってきた拳をわずかに頭を動かしてかわすと同時に、その両手をドゥームデーモンの胸に押しつけた。「これで！」

カレンの声と同時にその手の光が炸裂し、ドゥームデーモンは地

面に叩きつけられた。カレンはゆっくりと降下したが、地面に足がつくと同時に瞳と髪の色が元に戻り、その場に膝をついた。

そして、仰向けに地面に倒れているドゥームデーモンは動く様子がなかった。

ロレンザはそこに近づこうとしたが、素早く飛び退いた。その空間を水の刃が切り裂いていった。

「これはエバンス様、一体どういうおつもりですか？」

そう言っただけでロレンザはエバンスの方に顔を向けた。エバンスは剣を構えて立っていた。

「その2人に近づくことは許さん」

「残念ですが、あなたの力では私は止められませんよ」

「どうかな！ 水よ！ 我が剣に宿り邪悪なものを切り裂け！」

エバンスが剣を振るうと、そこから水の刃放たれ、ロレンザに向かって飛んだ。1発目は簡単にかわされたが、エバンスは剣を素早く振り続け、次々に水の刃を放った。

「こんなものでは」

ロレンザはかわし、打ち砕き、全くそれをよせつけなかったが、側面からバーンズが走りこんできた。

「覚悟！」

バーンズは真っ向から剣を打ち下ろしたが、ロレンザはそれを横に動いてかわした。

「同僚にひどい仕打ちですね」

ロレンザはバーンズに手を向けたが、そこに反対側から火の玉と氷の牙が襲いかかった。ロレンザはバーンズに向けていた手をそちらに向けて、魔法の盾を発生させてそれを打ち消した。

「大賢者様ですか。みなさん頑張りますね」

ロレンザは呆れたような表情で苦笑した。それからバーンズとハティスに手を向け、そこに火の玉を発生させた。だが、それは竜巻と雷によってかき消された。さらにそれを追うようにして輝く剣を持ったミラが高く跳び上がり、正面から渾身の力でそれを振り下ろ

した。

ロレンザはとっさに後ろに下がったが、その額とロープをミラの剣がわずかに切り裂いた。ミラは着地するとすぐに後ろに下がり、剣を構え直した。

「雑魚が邪魔をしてくれますね」

ロレンザはそう言ってから正面のミラに向けて手をかざした。

「まずはあなた達から片付けてあげましょう」

絆

ロレンザがかざした手から衝撃波がミラに向かって放たれた。ミラはそれに吹き飛ばされ、エバンスの横まで転がった。ロレンザは続けざまに衝撃波を放ち、次々と自分を包囲していた者達を倒していった。

そして、最後にエバンスが残った。

「さて、エバンス様。あなたは次代の王です。私に協力していただけるのなら、悪いようにはしませんよ」

「そのようなことが聞けるわけがないだろう」

「それは残念です。1人ずつ止めを刺していけば、考えも変わるでしょうが？」ロレンザはなんとか立っているバーンズに手を向けた。「どうしますか？」

「エバンス様！ 私にはかまわずに！」

「これは忠義というものですか。実に感動的ですが、エバンス王子、あなたが首を縦に振らなければ、どうせ全滅ですよ」

ロレンザはエバンスとバーンズを嘲笑した。エバンスは険しいが冷静な表情を崩さなかった。

「お前達魔族に従ってしまったら、それは滅んだのと同じだ」

「それでは戦いますか。勇者は悪魔に取り込まれ、あなた達の切り札であるカレンも動けないこの状況で」

「まだ終わってなどいない。終わらせるつもりもない」

エバンスは剣を振りかざした。ロレンザはそれを見て大げさにため息をついた。

「聡明と言われても、所詮この程度ですか。それならば、まずはあなたから処分してあげましょう」

ロレンザが手をかざし、エバンスは振りかざした剣を振り下ろした。そこから今までにない大きさの水の刃が放たれたが、それはロレンザの放った衝撃波で散らされた。

「それではさようなら、王子」

エバンスに向かって雷の矢が放たれようとしたが、そこに1枚のカードが滑り込んできて、ロレンザの手元で爆発した。舌打ちと同時に、ロレンザはカードの飛んできた方向を見た。

「カレン、そこで寝ていればいいものを」

まだ立ち上がれず、膝をついたままのカレンがいた。ロレンザがドゥームデーモンのほうに目を移すと、それはちょうど動き出したところだった。

「どうやらあなたの戦いも無駄だったようですな。見てみなさい、すでに悪魔は復活していますよ」

ロレンザの言葉通り、ドゥームデーモンはゆっくりと立ち上がっていた。それを確認したロレンザは満面の笑みを浮かべてエバンスに手を向けた。

「そろそろ退場していただきましょうか」

手から再び雷の矢が放たれようとしたが、いきなりロレンザを魔法の盾が円状に覆った。だが、ロレンザの雷の矢は止まらなかった。「プロテンション！ 反転！」

その声と共に雷の矢は魔法の盾に衝突し、その内部で消滅した。ロレンザは驚愕の表情を浮かべ、声のしたほうを見た。そこにはロレンザに向かって手をかざしている、ドゥームデーモンであるはずのものがいるだけだった。

「まさか、そんなバカな」

ロレンザの絶句を合図とするかのように、ゆっくりとそれは立ち上がった。そして、その顔を上げた。

「タマキ様！」

カレンはそう叫んだ。環はそっちに顔を向けて笑顔でうなずいてから、ロレンザに顔を向けた。ロレンザは見るからに混乱していた。「お前は悪魔にその体を奪われたはずだ！ なぜ、なぜ元に戻れた！」

環はその問いに自分のあごをなでて、しばらく考えるような仕草

をした。

「どうしてかは俺にもあんまりよくわからないな。まあ、カレンのおかげだっていうのだけは間違いないと思うんだけどさ」

「しかし、悪魔はどうした！ その体から追い出すなど不可能なはずだ！」

「いや、追い出してなんかいないぜ」

そう言った環は左手の人差し指にはめている指輪をロレンザに向けた。それは普通の指輪だったはずが、今は黒い闇をまっとたものになっていた。そこから声が響いた。

「そうだ、我はまだこの体の中にいる。だがまあ、なんというかな、この男と契約を結ぶことにした」

「契約だと？ 私との契約があるだろう！」

「さっきその女と戦ってるときにな、創造の力を打ち込まれた。どうもそれがこの男の魂に反応して我の力を封じ込めたいらしい。それで、さっきまでこの男と話していたのだが、これがなかなか面白かった」

「面白かっただと？ 馬鹿な！」

「馬鹿だろう。だが、お前などよりこの男のほうが面白そうだからな、こいつと契約することに決めたのだ。我はこやつと一緒に、我が世界とは全く違うこの世界をじっくりと見させてもらう。戦いしか求めない貴様らよりもよほど条件がよいのだ」

「ま、そういうことだよ」環は手を戻した。「わかっただろ、あんたのたくらみは失敗したんだ」

そう言った環はロレンザを無視して、カレンに近づいていって右手を差し出した。

「大丈夫か、カレン」

「はい、タマキ様こそ大丈夫ですか」

「体中痛いけど、なんとか平気だよ」

環はカレンに右の肩を貸して立ち上がらせた。その光景を見ながら、ロレンザは冷静さを取り戻していった。

「そうですか、今回は失敗ですか。まあいいでしょう、今回はカレン、あなたの魂で我慢しましょう」

ロレンザはそう言って笑った。そこにエバンスの水の刃が飛んできたが、それは片手で弾いた。

「エバンス、俺達なら大丈夫だ。みんなをそこに集めて、見ていてくれよ」

環がそう言うと、エバンスは黙ってうなずいて、ロレンザの攻撃を受けた仲間達を助けに行った。

「余裕ですね、勇者タマキ。あなたの体はカレンとの戦いでかなり消耗しているはずです。すぐに消してあげますよ」

その言葉に環はにやりと笑って、左手の指輪を顔の高さまで上げた。

「おい、早速お前の力を貸してもらうぞ」

「好きに使い」

環の体から闇が溢れた。それは禍々しい力だった。ロレンザは再び驚愕した。

「まさか、その力、悪魔の力を使えるとも言うのか」

「当たり前じゃないか。それ以上のこともこれから見せてやるよ」

「ありえない！ そんなものは私は認めないぞ！」

「そんなこと言っただって、できるものはしょうがないじゃないか」

環はにやりと笑ってカレンの顔を見た。

「カレン、決めるぞ！」

「はい、わかりました！」

カレンはそう言って瞳と髪を白銀に変えた。そして、環とカレンは肩を組んだまま手を広げた。環の手は闇をまとい、カレンの手は光をまとった。

「破滅の力」

環は闇をまとった左手を前に差し出した。

「創造の力」

カレンは光をまとった右手を前に差し出した。

「それをつなぐ、絆の力」

2人が声を合わせると、その差し出した手の間に闇と光の道が出来た。そして2人は手の平を向かい合わせて、ゆっくりとそれを近づけていった。

「今こそ1つに」

2人の手がやわらかく握りあつた。闇と光が一体になり、そのどちらとも言えないものがその場を満たしていった。

「こんなものが！
なんだというんだ！」

ロレンザは両手に魔力を集中して、何かの魔法を放とうとした。だが、環とカレンはそれを見ようとしなかった。

「全てを生み出し混沌よ」

「今こそ、その力を示せ」

環とカレンの姿が闇と光が一体になったものに包まれていった。そして、それは2人の握られた手に集中していった。

「死ねええええええええええ！」

ロレンザの手から闇が光線のように放たれた。それは環とカレンを飲み込もうと凄まじい勢いで二人に迫ったが、その握られた手にぶつかると完全に止められた。

「これで」

「終わりです」

環とカレンの静かな言葉と共に、2人の手から闇と光が一体となったものが放たれた。それは闇の光線を飲み込み、さらにロレンザをも飲み込んでいった。

2人の旅立ち

3カ月後、環は慌しく部屋の整理をしていた。そこにカレンが入ってきて乱雑な室内を見回した。

「ひどい有様ですね。明後日には出発ですが、これで大丈夫なのですか」

「大丈夫にするために、こうして片付けてるんじゃないか」

「手伝いを頼むべきではないでしょうか」

「危ないものもあるし、下手に頼めないよ」

「他人には見られたくないものもあるわけですね」

環は天井を見上げて少し考えこんだ。

「まあ、あるかな」

それを聞いたカレンはため息をついた。

「私がお手伝いしますよ。今さら何があったところで驚きはしませんから」

「自分の準備があるんじゃないの」

「もう済ませました」

カレンはそれだけ言うつと環の返事を聞かずに、どんどん部屋を片付け始めた。そこに葉子がドアを開けて部屋に入ってきた。

「あれ、邪魔だった？」

「いや、別にそんなことはないですけど、どうしたんですか？」

環の問いに、葉子は1つのアミュレットを取り出した。

「環君に頼まれてたやつなんだけど、やっとできたから届けに来たのよ」

「ああ、そうだったんですか。忙しいのにありがとうございます」

環はアミュレットを受け取って、それをよく見た。狼のようだが、丸みがあるデザインで、なんとなく愛嬌のある顔立ちをしていた。

環はそれと左手の指輪をくつつけた。すると、指輪がまもっていた闇がそのアミュレットに吸い込まれていき、それはまるで生きてい

るかのように動き出した。

「これが我の新しい窓か」

「そういうことだ」

環はアミレットを首にかけた。

「だが、これは精霊の気配がするな。我にとってはあまり居心地のいいものではないぞ」

「別に死ぬわけじゃないんだからいいじゃないか」

「タマキ、貴様、最近私の扱いが悪くないか」

「全然悪くない。まあ、部屋の片付けを手伝うって言うんなら、少し考えてやってもいいよ」

「それは遠慮しておこう。旅に出るのだろう？ さつさと済ませろ」

「わかったから黙ってる」

「それじゃ環君、カレン、私はちよつと仕事があるから」

「ああ、はい。どうもありがとうございます」

環とカレンは同時に頭を下げて葉子を送り出した。それから2人は黙々と部屋の整理を続けた。

夜になると、片隅に箱が積み上げられている以外は、部屋の中はすっきりしていた。テーブルには夕食が並び、環とカレンは向かい合って座っていた。

「タマキ様、帰ってこないわけでもないのに、なぜここまで部屋を整理したのですか」

「いや、今度はけつこう長い旅になるわけだし、この部屋もだいぶ散らかってたからね。いい機会だから大掃除したんだよ」

「それはしっかり言っておかないと、もう帰らないものと勘違いされますよ」

「わかってるよ、明日になったらそうする」

翌日、環はエバンスの私室に訪れていた。そこにはエバンスの他にも葉子、バーンス、ハティスとミニックが集まっていた。ミラとソラは1ヶ月前に里帰りしていたのでこの場にはいなかった。その

なかで、まずはエバンスが口を開いた。

「昨日は1日中部屋を整理していたと聞いたが」

「まあ、長く空けることになるしね。いい機会だから綺麗にしとこうと思ったただだよ。帰ってきたらまた使わせてもらうからさ」

「そうか、必ず戻ってきてくれよ」

エバンスは安心したように言つて、手を差し出した。環はそれを握り返してから、まずハティスに顔を向けた。

「じゃあハティスさん、俺達がふっ飛ばしちゃった魔族の後始末はよろしく」

「そうだな。エリットとした本を書くという約束もあることだし、私も腰を据えようと思っている。君も達者でな」

2人は握手をした。次はバーンズだった。

「旅の無事を願っています」

「バーンズさんのほうも元気で」

「旅先でミラやソラと会うことがあったら、私がよろしく言っていたと伝えてください」

環はうなずいて手を差し出した。バーンズはその手を軽く握った。それからミニツクの方に向いた。

「タマキ先生、こつちのことは心配しないで、ゆっくり旅をしてきてください。僕がしっかりやりますから」

「そうだな。頼んだよ」

環は腰につけていたカード入れを外してミニツクに手渡した。

「役に立つこともあるかもしれないし、持っておいてくれ」

「はい！」

ミニツクはそれを受け取ってから、環が差し出した手を握った。

最後に環は葉子の方に向き直った。

「葉子さん、みんなのことをよろしく」

「ええ、環君も元気でね」

環は葉子が差し出した手を握ってから1歩下がって全員の顔を見回した。

「それじゃあ、明日の出発の準備があるから、俺はこれで」

そう言って環は足早に部屋から出て行った。その日の残りは明日の出発の準備に忙殺された。

そして次の日の早朝。環とカレンにバーンズとミニックは城門の前で荷馬車に最後の荷物を積み込んでいた。

「これで全部かな」

「はい、今の荷物が最後です」

環は荷馬車を眺めてから、カレンのことをよく見た。

「剣だけじゃなくて、鎧も新しくしたんだ」

「ええ、前の戦いでぼろぼろになってしまいましたから」

カレンは真新しいレザーアーマーと腰の剣を見下ろした。レザーアーマーは今までのものと大した違いはなかったが、剣はより長く、重厚なものになっていた。一方、環も今までのブレザーではなく、革のジャケツトを着ていた。

「そつか。それじゃ、そろそろ出発しよう」

環は荷台に跳び乗った。カレンも御者台に上った。環はバーンズとミニック、そして城壁の上にいるエバンスと葉子に向かって手を振った。

「じゃあ、いつてくるよ」

「先生！ ご無事で！」

ミニックだけが大声を出して環とカレンを送り出した。

そして、数10分の間は2人とも無言だったが、街からだいぶ離れてからカレンが口を開いた。

「タマキ様、どこに向かいますか？」

「どこがいいかな。カレンはどこか行ってみたいところはないの？」

「私は特別行きたいというところはありません。タマキ様はどこか行ってみたいところはないのですか」

「どこか魔族が暴れているような場所に行くべきだろう」

環はしゃべるアミュレットを握りしめて黙らせた。

「そうだなあ、とりあえず北のほうに行ってみたいな」

「わかりました。それでは行ける所まで行きましょう」
「そうしようか」

荷馬車はゆつくりと、着実に道を進んだ。

2人の旅立ち（後書き）

当初考えていたところまで書けたので、完結ということになりました。個人的には短期間で書き上げられたという満足感があります。

読んで楽しんでもらえたならうれしいことです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5063/>

ノーデルシアの勇者 第一章

2011年4月27日15時40分発行